無断転載不可©IPAMIA 2022

IPAMIA Oral History Project 2022

Part1: 荒井真一 Shin-ichi Arai 1959年5月7日生まれ

インタビュアー　山岡さ希子 （IPAMIA メンバー、アーティスト）
橋本匠 こと たくみちゃん （アーティスト）

インタビューをした日　2022年2月11日、12日

場所　荒井真一氏の自宅 （東京都台東区駒形）

＜目次＞

1. 少年時代、恋愛 p.2
2. 中国文学、羽仁五郎、吉本主義 p.10
3. 美学校、神田界隈 p.17
4. 70 年代末からのライブアートシーン p.27
5. 「赤木電気」 p.39
6. 「公民館運動」、「現場の力」 p.46
7. 「仁王立ち倶楽部」 p.56
8. 美学校と大学院の挫折、青年海外協力隊 p.60
9. 帰国とパフォーマンス再開 p.68
10 -1.《Happy Japan !》p.77
-2. 《Viva! Globalization》p.82
-3. 《Thank you Joseph Beuys》p.85
-4. 「大東亜共栄軒」 p.88
-5 《荒井真一のパフォーマンス 1999年から2009年まで》p.89
-6. 《Happy ABE regime!》p.91
11. Lee Wen と陳式森 p.92
12. チェンマイでのワークショップ p.95
13. ザンジバルの師匠 p.97

1. 少年時代、恋愛

山岡 ： では、生まれ育ちのところからお聞きします。記憶によく焼きついていることや、作品につながったかもしれないような経験などを、お聞かせください。

荒井 ： 1959年、昭和34年5月7日生まれ。富山県富山市の出身。家は富山駅から歩いて50分くらい。ちょうど俺の家のあたりは、市街地から農村に転換するあたりだった。俺の家から西へ10分ぐらい歩くと街っぽい感じになり、家から東側に行くと田んぼばっかりみたいな。 国道8号線っていう京都から新潟まで行く国道、北陸の幹線道路、その道路に面した家に生まれたの。その頃まだ歩道がなくて、結構危ない場所だった。幹線道路だから、夜中にトラックとかがばんばん通過してた。昼間も結構多いんですよ。だから、結構うるさいところに生まれ育ったんだ。

山岡 ：1 軒家で、1 人っ子ね。

荒井 ： そう。うちの父は久男っていうんだけど、実家の土地の1/10をもらって家を建てたわけ。俺が生まれて物心ついた時には親父の両親、兄などは全部死んでた。親父は末っ子。親戚で、存命だったのは親父の姉だけ。親父の実家はものすごい金持ちだったというか、土地持ち。要するに、戦後の土地改革がなければ小作農とかいっぱいいるような、地主だったの。だから、ものすごく屋敷も広かった。親父の実家の屋敷跡は、今、ファミリーレストランになっている。「ビッグ・ボーイ」って店。駐車場が50台分くらいある。

山岡 ： その荒井さんの生まれ育った家は、今もまだあるの？

荒井 ： そのまま。だれも住んでない。両親とも、亡くなったので。親父は弱視だったんだよ。一応、見える。で、金持ちの家だから、こんな奴に勉強させてもどれほどにもなれないからって、盲学校に入れたわけ。今だったら入れないと思う。でも、昔の考え方だったらから、こういう子は「あんま」とかそういうことの技術を身につければいいから、普通の勉強はしなくてもよい、と。で、何か失敗すれば、親が全部面倒見るみたいな考え。本人も勉強好きじゃなかったから、遊んでたみたい、盲学校で。一応目は見えるから 他の子よりは勉強できるんだけど、盲学校では、たとえば算数とか、ぎちぎち教えないと思うんだよね、難しいからね、教えるのが。今はわからないけど。

山岡 ： お父さんは何年生まれ？

荒井 ： 大正13年生まれ。弱視だったから 戦争も行かなくて済んだ。勤労動員では、舞鶴の造船所みたいな所で働いた。フデ子っていうのが母親なんだけど、昭和2年生まれで、戦争終わったときに18歳。農村って結構兵隊を出してるから、若い男が全然いなくて、結婚ができなかった。それで、農家だっ

たから、兄の子供とか、赤ちゃんの面倒見てた。農作業忙しくて、お兄さんの奥さんも農作業に出てた。飯作ったり、おにぎり作ったりとか。

山岡 ： お母さんは、何歳で結婚したの？

荒井 ： 30歳過ぎ、かなりの晩婚。俺が生まれる前の年ぐらいに結婚。当時、早い人は、17、18歳で結婚して、遅くても25歳ぐらいだよね。

山岡 ： 女学校に行ったりしたのかしら。

荒井 ： いや、行ってない。でも、高等小学校に行ったというのは、彼女の得意な話題だったね。尋常小学校の後に2年。農家だったけど彼女のお兄さんが、女の子でも2年間くらいは学校行かせた方がいいって言ってくれた。でその2年間だけ。頭悪くないんだよね。それでも、行き遅れていて、結局結婚したのが、うちの親父。しかも、親父は実は再婚なのねー。それはね、俺、28歳になるくらいまでずーっと知らなかったの。要するに母親にとって、俺には、あんまり知ってほしくない事実だったみたい。それがわかったのは……俺も、離婚したことあるんだよね。離婚して、離婚の経緯を話すために富山に帰って、飲んだんだよ、3人で。そしたら親父がなんか酔っ払ってきて、「いや2回目でいいことある」とか言った。あははっ（笑）。そしたら母親がもうパニクっちゃって。「あんた、何言ってんのー！酔ってるから、やめな、やめな」って。でも、俺は聞いちゃったからさ。後でね、親父が死んだ時に、謄本みたいなのをとるわけよ。で、わかったんだけど、前の人とは半年くらいしか一緒にいないの。そして、1 年ぐらい後に、うちの母親と結婚してんだ。で思うに…父親って本当に馬鹿なのよ。人間的にはいい人なの。だけど学問がない。まず、計算ができないんだよね。自分の名前も書けなかったの。うちの母親が教えたの。自分の名前と住所、それと、大正何年に生まれたとか、それぐらいは書けないと、いろいろな場面で馬鹿にされるからって。2人は、見合い結婚なわけ。結婚した段階ではまだ親父の実家がしっかりしてた。まだ大丈夫だったんだよ。母親は農家なわけじゃん、でも親父は、富山市なわけで、悪くないんだよね、条件としては。金持ちの息子だしさ。それでまあ、嫁いだわけなんだけど、嫁いでからいろいろ面倒なことが起こるわけよ。わけわかんないわけじゃん、親父は。だから多分、その最初に結婚した女の人は、やっぱりこの人と一緒にいても、ちょっとまずいんじゃないかと思ったんじゃないかな、推測なんだけどね。その女の人は富山市の人だったから、この家は没落しつつあるとか、大体わかってきたんだと思う。おふくろは、それを知らずに嫁いで、でも結局、土地をもらったから良かった。

山岡 ： 荒井という名前は、富山によくある名前なの？

荒井 ： 荒っぽいに井戸の、荒井っていう名はあまりないんだよ、俺もよくわからない。ただ結構、親父の家系っていうのは面白くて…なんか親父のお兄さん（次男）が地元の YMCA の教会をつくるのにすごく尽力した人だったらしい、大正時代か、昭和かわかんないけど。でなんか、そういう名士だったんだろう

な、荒井家は。それにしても、YMCA はキリスト教でしょう？ 田舎で、それは変わり者。もう1人のお兄さん（長男）の方は、結局、家を壊した人なの。あのあたりは浄土真宗王国なのに、うちは曹洞宗に鞍替えした。宗旨替えっていうのはものすごい大変なことで、近所の人は、うちの家が没落したのは宗旨替えしたからだって、陰口を叩いていたらしい。だから、そういう、ちょっとおかしな家だったの。

山岡 ： その頃、真一少年はどうしていたのかしら。楽しく少年時代を過ごした？

荒井 ： 小学生ぐらいの頃から、まあ割と頭のいい子だった。そして、俺にとって父親っていうのは、うちの父親しか見てないから、小さい時は、こんなもんだっていう感じで育ったわけだ。ある日、親父は、カラーテレビの出てるチラシ見てて、安いテレビみつけたから買える買えるって喜んでたわけ。でも、それは間違いだった。位取りが違ってた。弱視だからでもあるけど。俺は、小学2～3年だったけど、それはわかる。そして、親父には、そういうことが無理なんだなと、わかった。

山岡 ： では、だんだん、お父さんのいろんなことに気がついてきたんだね。

荒井 ： そう。そして、小学校の高学年くらいになると、俺が漢字を読めるようになるでしょ。そしたら、おふくろはもう親父には相談しないで、俺に相談するようになるのよ。ある程度はわかるから。保険の話とかは、全部はわからないけど。で、俺はおふくろに頼りにされてた。それと、母親の弟ってのがすごい頭のいい人で、富山市の財務局に勤めてて、うちに下宿してたの。6畳と4畳半しかない家なのに6畳の方を使ってもらってた。そのおじさんがいるときは、お母さんは全部その人に相談してた。俺が小学校入る前ぐらいに転勤で名古屋に行っちゃったから、空白期があったんだけど、俺が少し成長してからは、母親は俺に相談するようになってきた、そういう感じ。

山岡 ： その頃は、何かになりたいとか、憧れていたこととか、とても好きなものとかあったの？

荒井 ： 子供のとき、母親は内職やっていた。あの頃って既製服がなくて、洋服は手作り。で、スタイルブックがあるわけ、「装苑」とか。型紙が付いてんの。お客さんがうちに来て、それを見てこの服作りたいって注文したら、生地とボタンなんかの店を教えて、買ってきてもらい、採寸して作ってあげてた。

山岡 ： ドレメとかそういうところに勉強に行かれたのかしら。

荒井 ： 行ってたみたい。だいたい親父と同じぐらい、稼いだんじゃないかな。

山岡 ： お父さんのご職業は？

荒井 ： 親父は家が没落したんだけど、コネクションはあって、紹介されて、釘を作る工場で働いてた。単純労働だよね。で、母親は家で内職。家の近くにあんまり同い年の子がいなかったから、俺は家で母

親と一緒にいることが多かった。買い物に行ったら、紙を5枚くらい買ってもらって、家帰ったら、おふくろの隣で絵を描いてるっていう感じ。だから絵が好きだったんですよね。

山岡 ： 本も読んでた？

荒井 ： その母親の弟が、とにかく本は絶対読ませなくちゃ駄目だと言ってたので、百科事典とか何かいろいろな本を買ってもらってた。あの頃、百科事典を買うのが流行ってたし。百科事典なんて、うちの家にはね、高いんだよ。1冊1500円とかしてた。それを10巻、毎月だからね、10ヶ月。小学館の「原色世界百科事典」。叔父さんは、置いときゃ勝手に読むから、童話や絵本でもなんでもいいから、買っておいたらいいって、アドバイスしてたみたい。本は、教育の投資だと思ってつぎ込めって。たとえば三輪車だとか、自転車欲しいって、子供は言うじゃん。三輪車は買えないって言うけど、絵を描くための紙とか、本を買うお金はくれた。ちょっと高いもんだって買ってくれる。で、家にあれば、なんか見るじゃん。あの頃の百科事典って、カラー写真が入ってるから、見てるだけで楽しいわけ。なんか内臓の絵とかあったりとかさ、何か訳わかんない生き物とか鳥だとかそういうのの写真見てた。

山岡 ： そして、中学に行ってからは？　精神状態とか、どうだったの？結構のんびりしてる感じ？

荒井: どうかな、あんまり考えたこともない。でもね、中 2 のときにいじめにあったんだよ。半年以上かな。ある女の子がメガネかけてて、あの頃は眼鏡かけてる子って少なくてその子、あんまり美人じゃなかったし、ださいじゃない昔のメガネって。それで、教室で掃除の時間に、椅子とか机を押しているときに、その子を出れないように机で囲っちゃったりとかさ、みんながいじめてたわけよ。その頃、俺は学級委員だったから、お前らそういうことやめろよとか言ってるうちに、今度は俺がいじめられるようになった。とにかく今度は、もっと面白いわけよ、彼らにしてみたら。その子いじめるよりも。勉強できて、それでリーダーみたいな感じのやつを陰湿にいじめる。たとえば、体育でサッカーとかやってて、俺を交代でプレーするようになってるんだけど、みんなが先生が見てないところですぐ交代させるんで、それで結局俺は、全然参加できない。うまい具合にそうやるんだよね。俺は言ったんだよ、先生に、何かちょっと最近変なんだって。そしたら、なんかチクッただろうみたいな話になってさ。なんかいろいろなパターンのそういう形でいじめが存在してさ、でも、暴力はなかったよね、さすがにね。カツアゲとかもなかったんだけど、何かこう仲間に入れないぞとか、シカトとか。嫌だったね。なおかつ、勉強できなくて、俺より下だと思ってる奴らが、集団で俺をシカトしたりとかしてさ。あれはなんかやりきれないものがあったね。お前ら、なんでそんなこと俺に対してやるんだって言ったら、いや、やりたいからやってるだけだよとかみたいなこと言うわけよ。半年以上だよ。でも、止んだの。結局、俺、生徒会長になったから。

山岡 ： えええええ？どうやって?

荒井: 選挙に出た。これはもう、上に行くしかねえと思って。

山岡 ： でもみんな票を入れたってことよね。いじめっこも入れたのかしら？

荒井: わかんないけどね。

山岡 ： 全員がいじめていたわけではないからかな。

荒井 ： いや、そのクラスではほとんど全員からのいじめ。女の子は見て見ぬふり。男はもう完璧に一致団結、一枚岩。その中で、生徒会長に立候補したの。それでもなんか結局 1 人だった、弁当の時間とか。全然みんな俺を入れてくれないの。仲良かったやついるんだけど、そいつも俺のこと無視する。俺は頭いいからさ、勉強教えたりとかもしてたんだけど。

山岡 ： クラスで 1 番ぐらい良かったの？

荒井 ： 1 番だよ。学年でも 1 番か、2 番だった。……とにかく、弁当を 1 人で食うことになって、それで、文学に目覚める、わけ。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： 太宰治は、教科書に載ってるし、図書館で借りて読んだら、なんていうか、なんか駄目な感じ。駄目だけど、なんかすごくペシミスティックで、やっぱりそのペシミスティックさこそが、高貴なんだみたいな……それで太宰を読み始めた。それから、街の本屋で、文庫本は100円とかで安かったから、買うようになった。自分の物だからどんどん読める。以来、週に 1 回ぐらい街に出て、また買ってきてみたいな。そうして、どんどんどんどん、ニーチェとかの方に行っちゃうわけ、岩波文庫の。わかってんのかわかってないのか。太宰ぐらいまでわかってたんだけど、ニーチェぐらいになってくると、ほとんどわかんないんだけど、カッケーなと思った。「ツァラトゥストラ」なんか、お前ら馬鹿どもは、とかさ、大衆は馬鹿だみたいな感じで、本当に考えるやつはもっと軽やかに踊る人間なんだみたいな。この愚鈍な連中は踊りさえもできねえ、みたいなようなこと書いてあるとさ、いやぁ、全くそうだなあ、みたいに思うわけ。

山岡 ： 高校に行ったら、優秀な人たちがいたんでしょう？

荒井 ：うん。高校（県立富山中部高校）に行ったら、俺、もう全然優秀じゃなくなっちゃった（笑）。だってそりゃそうだよね、優秀な子が集まってるんだから。のちに、ノーベル賞取る人も同学年だったんだから。で、俺は中2から文学漬けになってたから、高校は文系に行きたいって言ったんだけど、先生は君は学力があるから、理数科……普通科高校なんだけど、多分、俺が入学する5、6年前から理科系の人材を養成するっていうことで、理数科っていうのができたんだよね。全部で8クラスある中、1クラスだけが理数科。2年生になるときに、文系に移りたかったら移れる、そういう制度もあるから、とにかく 1 回そこに入っとけばいいって言われた。で、そのクラスは、もう優秀な子ばっかり。その理数科っていうのはクラスに40人いて、そのうち20人がのちに医者になったからね。東大の理三に行ったやつもいるし。慶応医学部とか。

山岡 ： そして、荒井さんは、都立大学に行ったわけね。

荒井 ： 俺は、大学は、国公立しか受けられないわけ。うちがすごい貧乏なわけだから。でも目指すんだったらもっと、もうちょっと高いところみたいな感じだったから、哲学科のあるところで、ちゃんとしたところに行きたかった。たとえば、東北大の哲学とか。あの頃、一期校と二期校というのがあって、東大とか京大とかの旧帝大というのは一期校と言って、試験日が違ってたから、両方受けられたわけ。都立大ってのは一期校と同じ試験日だったの。それで、二期校である東北大と都立大に受験票を出した。その頃つき合ってた彼女が、千葉大を受験することになってて、二期校が宮城教育大だったんだよ、彼女は。だから、彼女が千葉大に落ちて、俺が東北大に入れば、同じ仙台だよね。

山岡 ： そんなこと考えたんだ。

荒井 ： 要するに、彼女は、第1志望が千葉大で、第2志望が宮城教育大学。で、いろいろ考えて、やっぱり俺は都立大学でいくしかないと思った。結局、彼女が千葉大に受かることを前提に、自分は東北大をやめて都立大にしたのね。つまり、俺は、別に東京に来る気、あんまりなかったんですよ。

山岡 ： 彼女は千葉大に受かったんだね。

荒井 ： そうそう、でも、すぐに別れた。

山岡 ： うっそ……そうなんだ。

荒井 ： 俺の場合、都立大は授業料免除なんだよ。勉強ができるのと、うちが貧乏だから。後で聞いたら都立大の人文学部に7番で入ってるんだよ。100人のうち。だから3～4年間学費免除になった。でも、4年のころは、ちょっとやばかった。あんまり勉強してないのが、ばれてきた。3年間は確実に学費免除でなおかつ、その頃の学費って都立大っていうのは多分、9万6000円なんですよ、1年間。そんなに高くない。普通、国立大が16万円ぐらいなんですよ。都立大を選んだのは、学費が安いっていうのもあった。しかも、寮に入っちゃったから、ガスと水道と電気代が月500円、寮費が500円。安いよ、それだけ払えば寮に入れた。今の学生にはね、ちょっとわかんないシステム。あと奨学金もらってた。それは後で返さなくちゃいけないけど、奨学金があの頃で6万ぐらい。バイトしなくてもいい。

山岡 ： でもどうなの、哲学科に入って、将来は教員にでもなろうと思ってた？それとも、学者？

荒井 ： そりゃ、学者になろうと思ってたよ。バリバリのニーチェ学者に。あはははは（笑）。ヤスパースとかハイデッカーになろうと思ってたわけよ。東北大の哲学科っていうのはヤスパースとか実存的な流れがあるんですよ。

山岡 ： でも、彼女と一緒にいる方を取ったんだよね、結局。

荒井 ： そうそう。彼女が受かる方向で考えて、都立大にしたの。

山岡 ： そういうところは、優しいっていうか、なんていうか……。

荒井 ： で、その彼女と、どうして出会ったかの話をする。俺、中学から剣道部。本当はサッカー部行きたかったんだけどさ。

山岡 ： サッカー部？　運動は全然できないって、こないだ言わなかった？

荒井 ： 今はできないけど、でも当時は普通にはできてた。

山岡 ： 勉強も運動もできたの？　完璧じゃない？　じゃ、もてもて？

荒井 ： 中学ではもてたね。いじめられてたけど。コクられたこともあった、きれいな子に。でも、なんだか。

山岡 ： どうして？きれいな子だけど、好きじゃないなみたいな？

荒井 ： なんか頭悪そうだったから（照れながら）。あははははは（笑）。だって何か話してても、何か馬鹿。きれいなんだよ、アイドルみたいな顔してんだけど、何か話すことが馬鹿っぽいからさ。なんか俺の学力だけに惹かれてきたのかなと。言いよってくるのも嫌だったし。きれいだとは思ったけど、かわいいとは思わなかった。なんか、いまひとつ。

山岡 ： で、その千葉大の子は？

荒井 ： もう最高。アイドル。今だったら、AKB 入れると思う。

山岡 ： 自分で告白したの？

荒井 ： そりゃそうでしょう。で、俺は、剣道部にいたんだよ。そしたら美術部って男の部員が少なくて女ばっかりだから、なんか男の部員募集しているみたいな噂を聞いた。そして、美人がいっぱいいるって。どんなのがいるのって聞いたら、その中に1人は、つまり、俺とつき合うことになるんだけど、その子いるんだったら、いいかなとか思ってさ。

山岡 ： で、美術部入ったのね。話は、脱線しているようで、してないね。

荒井 ： 2年生から美術部に入ったの。それでなんかもう、完璧にさ、もうこれはもう初恋だったよね。それで最初のデートで、『ポセイドン・アドベンチャー』って、映画を見に行った。つまり、デートにこぎつけたわけですよ。

山岡 ： 1972年の映画だね。ジーン・ハックマン主演。時代を感じる。

荒井 ： でさ、俺は、田舎もんじゃん、一応、駅から50分だけど、田んぼに囲まれてるところで育った。中学校は、俺の家より30分もっと田んぼの中に行くから、だからもうものすごく田んぼばっかりなわけ。中学の時、自転車通学じゃないやつも黄色いヘルメットかぶってなくちゃいけない校則があった。で、俺はヘルメットかぶって繁華街に、本買いに行ってた。黒い学帽もあるんだけど、車に轢かれたりとかあるからって。俺、真面目で優秀な子だったから、それは守らなくちゃいけないって思ってたわけ。で、俺は、そういうような環境に育って、服とかもう全部母親が買ってきたもの着てるわけ。だから高校入っても、あんまり服買うとかっていうのなくてさ。一方、富山大学附属中学っていうのがあって、抽選なんだけど受験校なんだよね。そういうのは一つのステータスになってた。その高校の8組っていう理数科のクラスっていうのはさ、クラスの半分が附属中学から来てるやつなの。そいつらは、すごいませてるっていうか、もう本当にワイシャツとかもかっこいいのとか着てるし、ズボンも靴もいいのを、はいてるしさ、みんなお金持ってるんだなあと思ったよね。自分はもうそういうのに頓着しないタチだったから、私服とかもダサいのよ。「ビッグ・ジョン」とかの安いやつとかさ、それもなんか自分で買ったんじゃなくて、お袋がみつくろったやつ。で、そのダサイ格好でデートに行ったわけですよ。

山岡 ： 「ビッグ・ジョン」って、ジーンズメーカーの老舗だよね。富山にもあったのね。

荒井 ： その子の方は、高校のすぐ近くの小学校、中学校から来てて、もう子供のときから街の中で育ってるわけ。お兄さんとかお姉さんがいれば喫茶店行ったりとか、家族では何かちょっといい食堂行ったりとか、そういうことしてる子だったと思うんだよね。彼女は俺の私服を見て、こいつどうするんだろうみたいに思ったかも。そういう言い方は絶対しないけどね、いい子だから。映画見た後、喫茶店とか…わかんないじゃん、田舎もんだから。で、大和デパートっていうのがあって、それが映画館の隣、子どものとき、そこのファミリーレストランみたいなところに行ったことがあって、そこでコーヒーとか飲めるの知ってたから、そこに一緒に行ったわけよ。そうしたら、なんか途中で、荒井くん、お腹痛くなったから私帰る、って言われちゃったの。家まで送るよって言ったんだけど、いやいや大丈夫、大丈夫って、ここで別れましょうってさ。

山岡 ： あらら。

荒井 ： あとで友だちに言ったら、お前それ、お前がダサかったんじゃねえのと。それと、大和デパートの食堂に行くなんて絶対おかしいだろとかも言われちゃった。だから、それ聞いてさ、ファッションのことも少し勉強したりとかして、少しは自分で何か買うようにした。ジーパンもなんかも雑誌見て、こういうのがいいのかなとか、とりあえずお金かからない範囲で、ちょっと自分で買うようになった。そうやって努力して、もう、押しまくって、ほとんどストーカーみたいな域に達するぐらい押しまくって、それで彼女が折れた。あとはほら、俺は、漫画だけでなくて、本とかも読んでたから、やっぱりそういうことは、彼女にとって新鮮だったと思うんですよ。それで、ダサさをカバーして、なんとか付き合ったのよ。

2. 中国文学、羽仁五郎、吉本主義

山岡 ： それで、東京に来てどうなったの。来たのは、1978年だね。

荒井 ： 彼女は千葉大で、俺の方の都立大学は目黒なんだけど、寮がなぜか新小岩。彼女のところに近いの。でも、結局、その子とは、最初の3ヶ月ぐらいうまくいってたんだ。彼女は彼女でアパートじゃなくて下宿。下宿で、1階が大家さんの家、2階は女の子だけに貸してるっていう、そういう形式のやつ。それで電話も大家さんちにかけて、大家さんが2階に呼びに行く。大家さんは大家さんで、大切な娘さんを預かっているという意識があるから、俺なんかが電話すると、なんか怪訝に、またですか、とか言う。そんな感じで。携帯とかない時代だからね。俺の方もさ、寮だから電話が鳴ると、電話当番というのがいて、なんか面白がってさ、「何号室の荒井さん、千葉大の何とかさんから電話ですよ〜ん」と、からかう。それでまあ、連絡もギクシャクで、結局言うまくいかなくなった。それから俺のストーカー人生が始まる。だって大学行くよりも千葉大が近いわけだからさ。

山岡 ： また、ストーカーになっちゃったの？？

荒井 ： そう、これはもうストーカーしかないと思って、完璧に、待ち伏せしたり、彼女のバイトしてたスーパーをうろついたり。まだストーカーって言葉がない頃だからね、最初のうちは、忘れられないのかなみたいな、それぐらいだったんだけど、やっぱりだんだんね、向こうもね、こいつ駄目だなと思い始めたんじゃない？　特に少し酔ってたりとかしたから。その頃お酒飲み始めてたんだ。「学校行ってないんじゃないの」とか言われてさ。

山岡 ： 行ってんの？

荒井 ： 行ってない。1 年生のときからもう全然学校行ってない。彼女に振られそうだっていうことで、もうそこに全力を注がなくちゃいけなかった。それで結局、1 年ぐらいそういう状態が続いた。もう向こうも嫌だったろうね。最終的に彼女に彼氏ができて、彼氏の言葉で、多分引っ越して、もうどこ行ったか全然わかんなくなっちゃった。

山岡 ： 大学はどうなった？

荒井 ： 大学で1年から2年に進級するときに、哲学科行くか人類学科か、決めなくちゃいけないのね、都立大の場合。俺はさ、なんか一応勉強しようと思って大学入ったからね。都立大って、夜間部もあるんだよ。今あるかどうかわからないけど。そしたら夜間の人も昼間の授業取れて、昼間の人も夜間の授業取れるってシステムだったの。そういう体制だったから、俺は第2外国語を2つ取った。1つはドイツ語で、もう1つが中国語。昼に英語とドイツ語、夜は中国語、そういう形にして、うんと学ぼうと思ってたわけですよ。思ってたんだけど、その女の子とうまくいかなくなって……

山岡 ： 堕落が始まったのね。

荒井 ： (笑)そう、堕落が始まった。それで、ただ、夜の中国語の授業っていうのがすごい面白くて、それだけは出てた。学生は俺を入れて3人だけ。俺以外の2人は昼間に働いてるの。夜の授業は5時半ぐらいからスタートなんだけど、最初の授業の日、なんかいきなりビール持ってくる人がいて(笑)、教壇に置いて、後ろに座ったので、この人学生なのか？変だなと思ったんだけど、それから先生(飯倉照平氏)が来た。そして、今日はみんな仕事で疲れてるだろうから、一応授業はするけど、本当の授業はゴールデンウィーク明けからします、と。1 回授業やると、次はゴールデンウィーク明け。なので、今日はとりあえずビールでも飲みながら話しましょう、とか言ってさ、なんか。

山岡 ： そういえば、荒井さん、いつから飲み始めてます？

荒井 ： 俺はもう高校から少しずつ飲んでるけど、でも、すごい飲むようになったのは、寮に入ってから。寮に入ってると、飲むの好きなやつとかいるから、そいつと。

山岡 ： じゃあ、授業でビールが出てきても大丈夫なんだね。

荒井 ： ああ、いいね、いいねと思ったさ。で、飲みながら、自己紹介しろと。そうしたら、ビール買ってきたやつは先輩だったのね。この人も働いてるから、質問があったら、この人に聞くといいよ、と。荒井君は働いてる人なの？って聞くので、僕は昼の学生ですって答えた。では、一緒に他の人と頑張りましょうと。それでなぜか、俺は他の授業は出なくなって、その夜の中国語の授業だけ、出ることになった。先生が面白い人だったからね。先生は、中国行ったことないんだよねと言う。その頃中国なんてそんな簡単に行けなかったし。中国行ったことないから中国語の発音駄目だからね、みんなラジオとかで勉強してください、と。それで結局、授業は何をやってるかっていったら、その先生が自分の昔していた仕事のこととか話すわけ、先生も夜間の学生だった。学生にさ、仕事どうよとか聞いたりして、そんな話で、なんとなく終わるんだよ、だいたい。学生も、こんなことあったとか言ってると、20 分ぐらいたつじゃん。それでひとりひとり話すわけ。で、荒井君は今日何やってたのって、いや、僕は飲んでただけですって言うと、そっ

かそっかと。だんだん慣れてきたらさ、このあと、ちょっと飲みに行くかとかいうことになってさ、一緒にそのまま先生についてくわけ。そしたら、そこは中文のたまり場みたいな飲み屋で、大学院生とか他の先生とかが来てる。

山岡 ： どこにあったの、その飲み屋。

荒井 ： 大学の裏の居酒屋、目黒の柿の木坂だね、都立大駅のあたり。行くとさ、学問の話じゃなくて、もう、なんかわけわかんない話をしてるわけ。時たま学問の話も出たけど、それでなんかこうよもやま話でさ、50歳ぐらいの先生とか、30歳ぐらいの大学院生とか、そういう人たちがいて、何かこう、なんとも言えない雰囲気。1軒目はお金出さなくていい、学生は。大学院生は1000円なの、あとは全部先生が出してくれる。学生は昼間働いてるっていうのが前提になってるから、働いてる人から金取れない、と。俺は働いてないんだけど、とにかくそっちのカテゴリーに入れてくれた。行ったらとにかく1軒目はただなわけじゃん、結構飲むんだよ、2時間、3時間。週2回授業あるから、週2回そこに入り浸りみたいな。だからもう本当に大学行くのはその授業の時だけになっちゃった。

山岡 ： なんとねぇ。

荒井 ： ところで、都立大の学生の自治会って日本共産党系で、民青がすごく強いんだ。民青ってのは、民主青年同盟って言って共産党の下部組織の学生組織で、これがものすごく、ひどい。要するに、今の日本共産党がもし政権を握ったら、いかにもやるだろうというような不正をいっぱいやってたわけ。選挙とかのやり方とか。たとえば俺の友だちが、自治会選挙に立候補したのね。彼は寮の友だちで、当時、三里塚とかに割とよく行ってた。でもセクトには入ってなかったの。俺も三里塚とか行きたいと思っていたんだけど、勇気がなくて行かなかったんだ。そいつがね、立候補するって言うから、手伝ったんだよ。大学の自治会が、何かおかしいっていうのは、みんななんとなくわかってて、彼は、アンチみたいな意識で立候補したわけ。割と同じく思ってる人が多かったから、5、60人ぐらい手伝う人がいたの、最初は。でも 1 週間ぐらいしたら半分も、いなくなっちゃった。なぜって、反対陣営の民主青年同盟（共産党系）の人たちが、俺らの親に電話して、「お宅の息子（娘）さん、ちょっと学校でね、過激派の人たちの手伝いしてるみたいです、息子（娘）さんに、どういうことなのかちゃんと聞いてあげた方がいいですよ」というようなことをバーっと流した。俺んとこはお袋があいう人だから、そんなのは息子に任せてるからって（笑）言うけど、他の親はさ、心配するよね、その過激派と関係してるとかは。その頃内ゲバとかいっぱいあったわけだからさ。そういうふうにして、切られていく感じがあった。

山岡 ： それは、その後の荒井さんの作品のテーマなんかに影響していくのかなあ。

荒井 ： 思想のことで言えば、高校時代は、さっき言ったように、ニーチェとかハイデッガーとか読んでたんだけど、だいぶ性欲が高まってたのもあって、そんなとき、「月刊プレイボーイ」ってのが出たわけ。それはすごい分厚くて、白人と黒人の女性モデルのヌードばっかり載ってて、でも、特集記事があって、読みごたえがあるっていうか、その読みごたえっていうところで、おふくろには、これは裸のためじゃなくて、

読み物の記事あるから、そういう言い訳できると思って、買うようになった。実はただ、洋物のピンナップを見てオナニーするためなんだけど。それに、本多勝一の『中国紀行』っていう連載があったんだよ。カラー写真付きでさ、それ読んでなんかこう、これはなんかちょっとね、これは知らなかったみたいに思った。それと、実は、個人的には、たとえば禅とか、座禅組んだりとかしてたのよ。自己流で。中学んときぐらいからな。でもね、本多勝一とかを読んでるうちに何かこう、個人の精神を変えるとか、整えるとかっていうよりも、社会が病んでるんじゃないかみたいに思うようになったんだ。で、そっちの方向に転換していくわけだよな。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： その中で、そっちの方向をどんどんどんどん、少しずつだけど展開してく中で、羽仁五郎っていう、歴史家に出会うの。『都市の論理』って著作があって、全共闘っていうか、全共闘前ぐらいの世代にものすごく影響を与えた本なんだよ。それは、国なんか要らなくて都市連合で十分だという考え方で、それは要するにフィレンツェとか、それから日本でいうと堺とか。ああいう商人たちが文化を発展させて、権力的なものから守られたところで、文化とか学問とかが成立していくし、大学っていうのも権力から遠いところにあるから重要な学問ができると。そうじゃないとたとえば、コペルニクス的なものも、キリスト教の中だけにあった場合には絶対出て来られない。宗教とか権力から離れたところで、何か商人が金作るようなところで、学問とかが栄えると。そういう町がいっぱいあるところ、たとえばイタリアであったりが、そのルネッサンスっていうものを作ったっていうのが彼の考え方なのね。日本でいうと堺みたいに繁栄した町の商人たちが、商業で儲けた金で軍事力をちょっと持って、あるいは軍事がなくても、その金を貸すかどうかの駆引きで、大名に対して恫喝できた。それが 『都市の論理』ということ。その頃、大阪や京都には革新府政があり、東京で美濃部がいて、神奈川にも革新市政があって、富山にも革新市政があった。そういう大都市の革新が連合すれば、日本を変えていけるっていうような考え。なおかつ彼はちゃんとした歴史家だから、だからそれを割とちゃんと明治時代からの流れの中とか、明治以前の民主主義の流れみたいなところをまぜながら、割とわかりやすく書いていて、ベストセラーになったわけ。

山岡 ： 聞いたことがある。1968 年に出版されたみたいだね。

荒井 ： それを、俺も読んでいて、俺の中に、本多勝一～羽仁五郎路線みたいなのができてたの。羽仁五郎の口癖っていうのは、今となれば滑稽なんだけど、アメリカよりもソ連、韓国よりも北朝鮮、要するに、民衆のためには、どんなに韓国が経済的に発展してても北朝鮮の方がすごいんだと。それからソ連の方がアメリカより勝ってるとか、言ってたわけ。俺は高校生の頃から、羽仁五郎の本は読んでたのね、70 年代に。彼がたくさん影響力のある著作を書いたのは 60 年代の終わりから 70 年代なんだけど、今思うと、ちゃんとした人は、そんなのありえねえってわかるじゃん。でも俺みたいなのは、まだそんなよくわかんなかった。例えば、本多勝一が中国に行って、中国共産党がひどかったと書いた時期なんだから、あの頃は。ちょっとやばい時期なわけですよ、実は。文化大革命とか。でも、羽仁五郎とかは、文化大革命が大好き。でね、三里塚には、子供隊とか、いたわけよ。子供がヘルメットの代わりに鍋かぶって、張りめ

ぐらされた地下壕とかにいて、戦ってるのをテレビで見てるわけ、俺は、小学生の時。ベトナムとかの真似なんだけどさ。でそういうのをさ、今だとさ、全然テレビとか出さないと思うんだけど、その頃はもうそういうのをおおっぴらに出してるわけ。ばあちゃんが木に自分を巻きつけて、機動隊来ても、私は動かないとか言ってるところとか。あと1968年のあの東大闘争とか、日大闘争の時に、御茶ノ水あたりで、舗道を剥がしてさ、みんな投げてるのとかも NHK のニュースで映してたからね。そういうのも見てた。なおかつ羽仁五郎が文革がすごいって言ってて、子供たちが、マオ（毛沢東）の赤い本持って、権力者を倒していくっていう、自分と同じ年くらいの子供たちが権力者を倒す、それは「造反有理」と言う、「造反」するには理由がある、という意味なんだけど、三里塚でやってることはまさにそれだと。子供たちが立ち上がって大人の不正を暴き出す。読むとそうなのかな、とは思っちゃうじゃん。俺は都立大に入るときも、民青がいる大学ってのわかってた。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： 左翼的ってのが共産党的だとすれば、ちょっといっちゃってる新左翼的な意識。

山岡 ： 彼女にストーカーしながらも、思想的なものがどんどん沸々と。

荒井 ： そうそう。思想的には左翼的なものだったんですよね、そういう本ばっかり読んでたから。だから、都立大に入ってすぐ思ったのは、共産党って駄目だなと思った、やっぱり。

山岡 ： それで？

荒井 ： 結局、中文（中国文学）に行くことに決めた。要するに、1年から2年に上がる時に、中文の飯倉先生が、荒井くんさあ、君、何やるかまだ決まってないみたいだけど、中文来たら卒業させてあげます、中文系の単位は全部「優」にしてあげます、あとは卒論を書けば駄目でも「良」にしてあげるから、って。決まってないんだったら中文来なよ、って言ってくれた。授業はないんだよ、ほとんどやらないんだよ。そういうことで、結局俺は、哲学科とか文化人類学科に行かなかった。都立大では、哲学科とか文化人類学科や英文学がメジャーなわけよ。特に哲学はメジャー。日本共産党の息がすごくかかっている。それで中文を選んだ。

山岡 ： 堕落なりに、理が叶ってる。

荒井 ： 自分は新左翼な立場だし、一方、友だちは三里塚とかに行ってたわけ。それから寮の4分の3は民青ていうか、共産党系なわけ。4分の1の半分は俺みたいなノンポリ。

山岡 ： その時点では、ノンポリのカテゴリーなんだね、荒井さんは。

荒井 ： そうそう。でも、ずっと、ノンポリよ。ノンポリっていうか、ノンセクトね。セクトに入ってない。学生のうち、4分の3が民青っていうセクトに入ってて、4分の1のうちの半分、つまり8分の1はノンセクト、あるいはポリティクスに全然関係ない人。そのあとの8分の1はばりばりの新左翼セクト。たとえば三里塚に行ったりとか、革マルはいなかったけど、そういう実際に、ヘルメットちゃんと持ってたりとか。そのもう一方の8分の1の俺らは、寮の中でも肩身が狭い。その代わり、ラブコールがすごい（笑）。あと民青も民青で、やっぱりその8分の1があっちの8分の1にいったら嫌なわけじゃん。民青は民青で誘うわけだよね。つまり、ノンセクトの人はすごくもてる。

山岡 ： そういうの、もてるって言うのかしら。

荒井 ： （笑） それって、あの頃でオルグっていう言葉なんだけど、オルガナイズっていうのは、今、何もない人を自分の側に入れるみたいなこと。それを、オルグするっていうの。特に1年生は入ったばっかりですごかったよね。何も言わないでさ、ちょっとうちの部屋来いよって、いい音楽を聞かせてやるよとか、お酒飲もうよとか言って、それでジャズとか聴かされて、面白いっすねとか言ったら、段々段々政治の話になっていく。俺自身は実のところ、新左翼にものすごい近いわけ。オルグかけられると、彼らの言ってること、わかるわかるとなって、なら明日、三里塚行こうよって、言われるようなことが多かった。でも、なんかその彼らの言ってる言葉が、ものすごく、民青もそうなんだけど、上からの言葉が降りてきてるだけみたいな感じがした。

山岡 ： うんうん。敏感だね。

荒井 ： 三里塚に行ってる友だちを助けるということじゃなくて、いまの資本主義があって、三里塚の人たちが困らされている状況を助けないでお前はどうなのか、みたいなことを言われる。そういう感じだと、いやそれは俺の問題じゃないよね的なのが、俺にはあった。それに対してどう対抗するか、対抗言説をどう作るかっていう問題。その中で出てきたのが、吉本隆明なんだよね、俺は。

山岡 ： そうなのか。

荒井 ： 羽仁五郎も読んでて、俺は、左翼的な言説っていうのがよくわかるから、吉本もだんだん射程に入ってきたわけよ、俺の。吉本を、すごく積極的に読み出したのが、大学に入ってからなんだけど、それから、中野重治についての吉本の転向論とか、そういうことをガンガン勉強してくわけだよね、なぜか知らないけど。というのは、中国文学っていうのが、そういうものでもあるわけなんだよ。テロに対してどう中国共産党が対応したかとか、文学としてどういうふうに政治と関わるかみたいなこと。そういう中でいろんな問題が、近代中国の魯迅以降、出てくる。

山岡: 魯迅なのか。

荒井 ： 毛沢東が出てきた後のこと。魯迅も論争に入ってるからね、魯迅も左翼の連中から、お前の言ってることは手ぬるいみたいなこと言われて、その左翼の連中に対して、お前たちの方が中国の人民のことは何もわかってないと返す。例えば『阿Q正伝』とか。自分から自分で落ちていく人なわけ、「阿Q」っていうのは。そういう人たちがいることもわかんないで、その何かこう、共産主義社会が来れば何でも良くなるみたいな言い方してるお前はどうなのか。そして、なおかつ、そのことで俺や俺の友だちを駄目だとかいうのは、いかがなものか、みたいなことを、魯迅が論争するわけだよね。お前らこそ頭でっかちだと。中国の今の民衆がどういう状況にあり、窒息しそうであるのに、上から引っ張り上げるような考え方で、どうなのか、みたいな論争をするわけよ。そういう流れの中で、俺は、勉強してないって言っても、中国文学の先生たちと飲んでたら、一応、そういう話は出てきてたからね。そしたら、原文は読めないけど、たとえば日本語で読めるものを聞いて、読んでみて、なるほどねとか思ってた。

山岡 ： 一応勉強してたんだね。

荒井 ： 勉強してますよ（笑）、そりゃあ。中国語の勉強ではなく、中国文学の勉強してて、そういうのとは別に、日本文学の中に、転向の問題っていうのがある。要するに、日本文学の中で、共産党は非転向であるっていうふうにして、偉そうにしてるんだけど、じゃあ非転向だからって日本の民衆に何ができたのかみたいなことを、吉本隆明が問うわけよ。要するに獄中にずっといてさ、何もできなかっただけなわけじゃん。民衆に対してアピールもできないのに、ただ獄中にいて、戦争に加担してないからっていうことで、自分たちは偉いとか言ってるけど、それになんの意味があるんだと、吉本は言い切ったわけ。要するにね、日本共産党の人たちは、獄中で死んだ人もいるわけだよ。だけど獄中で生きながらえた人たちは、戦争終わって出てきて、共産党再建したわけだよね。他の政党は全部間違いを起こして、戦争についていったけど、自分たちは戦争に反対したために獄に入れられてたから、自分たちは無傷であるっていうか。でも、転向した人もいっぱいいるわけですよ 。獄中にい続けると、実行力がなくなるわけじゃん、だから、中野重治とか転向したわけだよね。まあ埴谷雄高とかも転向した。みんな多かれ少なかれ、転向しちゃった人が多いわけですよね。

山岡 ： 転向問題ね。

荒井 ： そう、で、吉本隆明は戦争が終わった時に、高校生か大学生ぐらいの年で、軍国少年だったけど、デビューが戦後で、だから彼は確かに転向はしてないし、新しい知性っていうか、もう誰でも批判できる。彼は若くて、だからもう何も怖いものがない。だからそこで、彗星のごとく、昭和20年代の終わりぐらいに、要するに1950年ぐらいから評論を始め、その中で、転向論というのを書いた。それが、すごく評価をされたのね。彼は、評論家として出発するとすぐに、オピニオンリーダーみたいになった。そして、吉本隆明は、羽仁五郎も批判してるわけね。当然吉本隆明は、ソ連のこととか北朝鮮のこともわかってるわけ。彼の言葉って言うのは、ことごとく当たってると思った、俺は。羽仁五郎ってちょっと変だなと思っ

てることについて、吉本が割ときれいにわからせてくれた。その中で、吉本は、三里塚についての意見があって、三里塚に行って、三里塚の人と一緒に戦うことだけが戦いじゃないみたいなことを書くわけ。本当に大事なことは、お前自身が政治的に自立していなくちゃいけない、と。それは、自立主義って言われるんだけど、自立してる人間同士の連帯が保たれるべきで、自分が今いる場所のことを確かにしつつ、彼らが何を考えているかを考えて生きるのが、自立なんだみたいなね。

山岡　：なるほど。

荒井　：それが、彼が言う、「大衆の原像」で、そこらの八百屋のにいちゃんがテレビ見てて、三里塚に行くか？　行けないよな、そういうものなんだ。けれど、新左翼の連中言っているのは、その八百屋のにいちゃんも床屋のおっさんも、みんな三里塚でデモしろっていうような事と、一緒だ。若い学生だったら学生で、何かできることもあるかもしれないって。そのことを思想として、何故あそこに空港ができたのか？とかそういう事をね、ちゃんと把握した上でやらないと駄目だみたいなことが、わかりやすく書いてあった。新左翼の8分の1の人が俺に寄ってきたときに、俺がそれと同じことを言うと、結構黙っちゃうんだよね。向こうはね、わかってたと思う。こいつは、吉本に犯されてる人間だなって（笑）。吉本に犯されてるやつはオルグしても駄目だっていうのがわかってるわけ。彼らも反対できないっていうか、まず反論できないような論理構成になってることが一つなんだけど、そういう冷めたやつはもう無理だってわかる。それで吉本っていうのを使うと割と、民青の方からも、何も言ってこなくなる。つまり、吉本っていうものを使うと、そういう政的なセクト的なものからは、全然大丈夫になる。

山岡　：その辺のことは、大学の何年生の頃の話ですか？

荒井　：　1～2年。それで「吉本主義」っていうのがすごいやばくて。本当にもう死語になりつつあるけど、たとえば俺と同い年ぐらいかちょっと上ちょっと下ぐらいで、吉本にかぶれてる人たちっていうのは「吉本主義者」で、今でも「吉本主義」の人はいる。俺はもう今、「吉本主義」じゃないけれど、時間がかかったわけ、「吉本主義者」じゃなくなるのに。まあ、その失恋ほどじゃないけど、2年ぐらいかかった。

山岡　：そうね、そっちはそれほどでもない感じ　（笑）。

3.　美学校　神田界隈

荒井　：　でも、千葉大の女の子のことの方は忘れられないわけ。もう電話番号もわかんなくなっちゃうし、だけどもう忘れられなくて、でもストーカーできないわけだよね。やりようがないと、だけどもう完璧に気持ちはもう駄目なわけよ。完璧に鬱病みたいになって、もう酒ばっかり飲んでるわけ。2年生ぐらいかな。結局、これはもう駄目だと俺は思ったんだよね、何かしないと。要するに大学行って勉強すりゃいいじゃん

って話じゃん、大学生なんだから。だけど大学に行くっていうのは、何かそんなにね、魅力ない。もうちょっと強制力が必要だった。それで、バイトでもしろよとか言われて、中文の先輩に、司法書士の事務所を紹介してもらった。朝9時から夕方4時までで1日1万5000円かな。その頃ではいい値段。事務の仕事。特許事務所で事務の仕事。9時に行って4時に帰る。言われた仕事やればいいわけじゃん、そういうことが必要だと自分でも思い始めたわけ。そしたら割とそれでだいぶ鬱が治ってきたっていうか。だって昼間飲まないわけじゃん。バイト始めて、とりあえず昼間は仕事して、夕方は中文のサークルに行って飲んで、朝仕事に行って、と。そういうのを、半年ぐらいやった。

山岡 ： おお。

荒井 ： それでお金がたまったわけ、50万円ぐらい。それで、なんかもっと何かやった方がいいなと思った。これじゃ駄目だと思ったの。それで、美学校に入ろうと思ったわけ。

山岡 ： 都立大行きながら？

荒井 ： そう、都立大に行っててもお酒飲むだけだから。美学校に入れば何かほら、するだろうから。

山岡 ： どこから美学校が浮かんだの？

荒井 ： 絵とか好きだったっていうのはあるわけじゃん。

山岡 ： 東京だと、あちこち展覧会があるから、見に行ったりしてたの？

荒井 ： ううん、してない。

山岡 ： してない！

荒井 ： 時たま見てたけどね。でも、まあとりあえず、バイト、プラス何か手を動かしたりすると、だいぶ克服できんじゃないかと。それでいろいろ考えた。美術手帖とか立ち読みして、見つけたの、美学校を。あと、美学校っていうのは、赤瀬川原平が関係してるっていうのが大きかった。

山岡 ： 赤瀬川原平に興味があったんだね。

荒井 ： いや、興味があったんじゃないよ、全然ない。赤瀬川原平というのはあまり知られてないと思うんだけど、昔、有名になる前、ちょっと干されてる時期ってのがあるわけですよ、干されてる時期っていうのはちょっと違うのかもしれないけど、結構、左翼的な人だったんですよ。作品的にも、「アカイ、アサヒ、」

とか、「野次馬新聞」とか、「櫻画報」とか、あれらは完璧に新左翼の知識がないとわからない部分があるんだよ、パロディが。共産党とか、そういう左翼のセクト主義みたいなものもを踏まえた上でのパロディーがいっぱい入ってるの。だからあの頃の新左翼っていうか、あの頃のデモとか行ってる学生には、ものすごく笑えるギャグが満載なわけだよね。そういうことで僕が赤瀬川の作品初めて見たのは、実は富山で高校生の時。地元では、被差別部落の問題があって、でも、富山っていうのは被差別部落がないことになっている、県としてはね。だから同和教育はしない。でも実際にはある。

山岡 ： それで？

荒井 ： ある日、俺が高校生の時に、たくさんのビラが電信柱に貼ってあるのを見た。狭山事件の救済の集会を開きますから、集まれみたいな。それは多分大学生がやってたんだけど、住んでる人たちにぜひ来て、考えてほしいっていうメッセージ。狭山事件というのは、60年代に起きた強盗強姦殺人事件で、部落出身の若者が、証拠が曖昧なまま、自白を強要されて有罪になった。その事件は、70年代にもずっと問題になってて、その集会は、その彼を救援するための集会で、簡単な映画を見せたりして、真実は何かみたいな議論をしていたわけ。俺も、ちょうど、そういう左翼的なものに目覚めてるときだったわけだよね、本多勝一だとか、羽仁五郎だとか読んでて。それで行ったわけだよ。で行ったら、なんかもう、「ナンセンス！」とかさ、叫んでる。大学生30人ぐらいが、しかも身内しかいないみたいな感じで。俺は最初はね、ちょっとびっくりされるわけ。変なライブにうっかり来た人みたいに。「嬉しいけど、何で来たかなぁ～」みたいな反応（笑）。嬉しそうでさ、あっちは。でも、俺は、なんか違う世界だと思った。見てると、本当にさ、何かを説明するとかじゃないんだよね、誰かが何か言うとさ、すぐに、もう「異議なし！異議なし！」とかの声がかかる。

山岡 ： 映画みたいな世界って実際あるんだね。

荒井 ： あったよね。こっちは、高校生だからなんかボーっとしてて、しかも、学生服で行ったから、もうだいぶ浮いてた。終わった後は、みんな普通の大学生だから親切で、「君はどこの高校行ってんの？」とか聞いてきて、あそこですとか言ったら、「君、頭いいんだね」とか、「富山大学来なよ～」とか、そんなこと言われたり。「富山大学のうちのサークルここにあるから、今度また、見に寄りなよ。」とか言いながら、なんかすごくたくさん資料をくれた。その全部の表紙が、赤瀬川が描いたものだった（笑）。

山岡 ： そこに来たか！

荒井 ： 赤瀬川さんはそういう、金にならないパンフレットとかリーフレットみたいなのもデザインをやってたらしい。表紙だから、たとえば荊冠旗っていって、要するに被差別部落解放同盟のマークは、キリストが被ってたその荊の冠なんだけど、そのマークの中から腕がガーン！とか出てるのとか。

山岡 ： それを赤瀬川さんが描いてるっていうのはどうしてわかったの？

荒井 ： パンフレットの後ろを見ると、赤瀬川原平と書いてあって、変な名前だなと思った。なんかインパクト強くてその絵が。俺も美術部だったから、何なんだこの絵怖い、何なんだとか思った。だからって、その赤瀬川原平っていうのを、とくに調べなかった。今みたいにインターネットあるわけじゃないし、その美術手帖に必ず載ってる人でもないわけだから。

山岡 ： 赤瀬川さんは、つまり協力してたわけね。

荒井 ： そうそう。赤瀬川さんは、そういうパンフレットとか、表紙を描いたりとか、中にイラストとかも描いてた。多分タダでやってたんじゃないかなと。だからちょうど、朝日ジャーナルに「アカイ、アカイ、アサヒ、」とかそういうの描いてるときに、ノーギャラに近い形で、カンパとして、そういう絵を描いていたんだろうね。それがすげえインパクトがあって。

山岡 ： それで、荒井さんは美学校に入ったんだね。

荒井 ： そう。その頃、試験なしで、入れるとこって美学校か、B ゼミだったの。お金さえ払えば入れる。

山岡 ： お金はたまってるから。

荒井 ： そうそう。あとは確かにセゾンのカルチャーセンターとかもあったかもしんないんだけど、美術手帖とか立ち読みしてると、広告が出てる B ゼミとか美学校になるわけ。そして、美学校の方は、なんか変なんだイラスト、ヒツジかなんかの変な絵と、なんかわけわかんない宣伝文句が書いてあってさ、それでなんか B ゼミよりもインパクトがあったわけよ。しかも、講師見ると赤瀬川原平って書いてあって、えっ、あの人がいるとこなんだと思った。

山岡 ： うんうん。

荒井 ： それで、行くなら、ここの学校かなとか思って。神保町だから、大学の寮から近い。そのころはもう、大学に近い寮に引っ越してたんだ。ちなみに、千葉から遠くなった。

山岡 ： ところで、千葉の人のことは、どのくらい引きずったの？

荒井 ： いや、だからね。同じ高校の同窓生の田中耕一さんが、ノーベル化学賞取ったの、2002年に。それでもう大騒ぎよ、同窓生は。で、卒業生がみんな集まる大きな同窓会のパーティに、ちょうどノーベル賞取った彼も出席することになって、ちょうどその時幹事役やってたのが俺の友だちで、「絶対お前も

来い！」とか言うので、「……彼女も来るかな？」とか聞いたら、「それは来るでしょう、田中くんとは同じクラスだったんだから」と。彼女と田中くんは同じクラスだったわけ、3年生の時。で、俺も行くべきかなって。

山岡 ： でも、そこまで彼女のこと、ひきずってたわけじゃないでしょう？

荒井 ： 引きずってたっていうかやっぱり……関係はないよ、もう全然。でも、俺の中ではスペシャル。40歳ぐらいまでは、いや、50歳ぐらいまで気持ちは引きずってたよね。そのために、パフォーマンスっていうか、ちょっと何か作品作ろうかなと思って、作ったのがあるんだけど。パフォーマンスとは、何か違う映像的な、千葉への旅みたいな。ただ自分がストーカーしてた場所を撮り続けるとか。でも、やっても誰もわかんないからやめた。自分がそれやりたいだけなんだなって（笑）……。

山岡 ： わかりました。それでは、美学校に行ってからのことをお話しください。

荒井 ： そして、俺は美学校に入って、吉田克朗さんに出会う。ただその前になぜ吉田克朗さんだったのかっていう話。美学校は5月から始まるんだけど、俺は9月ぐらいに行って、途中だけど入れてくれた。今泉省彦という当時の校長先生がいてさ。それがなんかさ、夏だったんだろう。半袖の下着みたいなのあるじゃん、T シャツじゃなくて。なんて言うの？ さすがに腹巻はしてなかったけど。それで汚いサンダル履いてさ。それで「あの～、すいません。ちょっと美学校について聞きたいんですけど」って言ったらさ。「あぁ、何でも聞いて」って。で、俺はなんなんだ、こいつに聞いていいのかなと思った。「僕はね、今泉って言って、一応校長だよ」とか言って（笑）。で、そうなのかと思ってたら、「どうだ？君は焼酎は飲むかね？」とか言うからさ……

山岡 ： また？ 初めから？

荒井 ： うん。「飲みます」って言ったら、「宝焼酎だけど飲むか？お湯で割るか？」って。

山岡 ： 何時に行ったんですか？

荒井 ： 夕方4時ぐらいか。まだ明るかったよ。

山岡 ： なんか荒井さんが歩いていると、酒飲みが出現するよね。

荒井 ： それで、なんかよくわかんないけど、別にそんなにこの人、酔っぱってるわけでもないし、まあ、いいかと思って。それで、宝焼酎を湯飲みに入れてさ。「お湯で割るか？」って言うから、「じゃあ、お願いします」と。

山岡　：　美学校で？神保町？今と同じところ？

荒井　：　そうそう。「それで君はなんなんだね？」言うから。「一応、今は都立大生です。昔から絵が好きだったんだけど、美大に行くとかそういうのは全然選択肢になかったんです。でも、もう1回美術やってみたいなあと思って」「そうかね。なんで美学校なの？」「赤瀬川原平っていう人の名前を知ってたりしたんで、美学校がいいかなと思って来ました」「どんな絵が好きなんだね？」とかいろいろ聞かれて、そして「そうか、君は銅版画に向いてるな」ってね。

橋本　：　どんな絵が好きって言ったんですか？

荒井　：　いろいろね。ミロが好きだとか。あと他に誰か言ったかな。とにかく、現代古典絵画。現代美術のちょっと手前ぐらいの。デュシャンの車輪とか好きですとか、滝口修造が紹介してるぐらいまでを知ってたから。でも、まだあんまり現代美術とかは、駄目だった。

山岡　：　銅版画と言われて、銅版画でいいかって思ったの？

荒井　：　うん、まだ自分は何も考えてなくて。その時は、ちょっと様子見に行っただけでさ。そしたら、話が急にさ「君は銅版画に向いてるよね」って。なぜ銅版画に向いてるんですか、なんて聞けねぇじゃん。初め会った人だし、一応校長だとか言ってるからさ。俺は、銅版画なんて考えたことないのに。

山岡　：　銅版画に生徒が足りなかったから、入れちまえってことか。

荒井　：　そうそう(笑)。それは、後でわかった。それで「君さ、9月から来なさいよ。授業料は１年分を割って、15万かな。お金はあるの？」って。金はあるわけ。で、「じゃあ、やります」「後期は来週から始まるから、来なさい。お金持ってね」って。そこで銅版画工房に入ったんだ。で、克朗さんとこに。でも、俺は、もう吉本主義者だったから、だから、絵とか見て感じるとかいうよりも、もう評論みたいな感じで絵を見てた。自分が絵を描くっていうのは子供のときもやってたし、それは高校の美術部でも描いてたんだけど、なんかそうじゃない…特に、克朗さんは、現代美術作家だとかいうわけだから、まだ40歳ぐらいの人でさ。「作家」は、「作家」はねってよく言う……。

山岡　：　「もの派」の作家だよね？

荒井　：　そう、「もの派」の作家。でも、イギリスに留学してるときに、版画工房に半年いて、そこでシルクを勉強したわけ。そして、一応版画の技術を全部。それで、帰ってきてからは版画を使った「もの派」的な作品を作るようになった。「もの派」っていうのも、これはね、あんまり知られてない話なんだけど、一部の人は結構シュールレアリズム的な展開としての、「もの派」ていうのがあると考えてた。吉田さんとかもそ

うなんだ。つまり、ルネ・マグリットとかみたいな、そういう変な物と変な物みたいなものとか、その空間がよじれる感じとか、錯視みたいな、そういうところを、「もの派」の一部の人たちは考えていた。最初から物を対象にするってよりも、なんていうか、変なリアクションっていうか、たとえば、克朗さんの作品で、鉄の管の中に綿を入れるっていう作品があって、それも「もの派」って言ったら「もの派」の作品。完璧に「もの派」の作品なんだけど、でも実は、彼の中では本当に変なものが見える、ミシンとこうもり傘みたいな、そこからの発想。綿みたいな柔らかい物と鉄みたいな物があるみたいな。克朗さんが言うには、「もの派」の連中って、芸大とか、多摩美出身者が多い。多摩美は、斉藤義重さんとこだから。最初はなんかそういう、シュールレアリズム的な感じだった。それから、克朗さんは自分のことを「作家」とか言っていて、絵描きって自分のこと「作家」って言うんだって、俺は違和感持った。それからギクシャクするんだけど。

山岡　：　ギクシャクするの？？

荒井　：　なんだ、こいつ偉そうに作家とか言ってる、自分のこと。俺の中ではさ、小説家ぐらいが「作家」じゃん。なんで自分のこと「作家」って言うのかなとか。それでも、克朗さん、いつも授業が終わると飲みに連れてってくれておごってくれた。そこでまた、「もの派」的な話になっていくわけだよね。授業は割と簡単で、先週から今週までの間に作った作品を持ってきて見せるの、克朗さんに。それで、みんなでそれを話し合う。で、克朗さんも「なんか前より動きが出てきてるよね」とかそういうような感じのことを言う。「で、君はどれが一番好き？」とか言って「私はこれが一番好き」「君はこれが好きなんだ」とか。それを作った人は「先生は？」って聞く。そして「いや、僕はこれが好きだな」みたいな。それで「荒井君は今日初めてだけど、どれが好き？」とか聞くから「僕はこれが好きです」って、「何で？」って、「なんとなく、これが一番面白い感じがしました」「それでいいけどね。それでいいんだよ」とかって言われた。

山岡　：　優しいね。君たちはわかっとらんとは言わないんですね。

荒井　：　そういうふうには言わないよね。いつもそうみたいで。僕が入ってからも、先々週のやつと先週のやつでどうよって。「僕はこれがこうなっていったのが面白かった」って言ったら、「うーん、そうだね。なんかちょっと変わったよね」とかって。

山岡　：　何でも受け入れてくれる。

荒井　：　うん、受け入れて。「その流れでやっていったら、面白いかもね。」とかさ。

山岡　：　先生のこと、好きだったんですよね？

荒井　：　そうそう、すごく。

山岡　：　どういうところが先生に惹かれたの？

荒井　：　最初はね、ちょっと馬鹿だなと思ったんですよ。だって俺は一応さ、インテレクチュアルじゃん。実存主義だとか、吉本隆明とかでしょう。先生は、何もわからんただの芸術馬鹿じゃん、と思ったわけ。ていうのがいつもさ、俺はね、埼玉の豆腐屋の息子でね、豆腐屋の息子がなんか多摩美入っちゃったんだ、って話す。

山岡　：　えらぶらない人なんだね。

荒井　：うまい具合に嫁が有名人の娘で、今一軒家に住んでるとか言う。実は、今日出海の娘婿なんだよ。今日出海ってのは、初代の文化庁長官。小説家の今東光の弟。その娘が多摩美にいて、それでくっついた。婿入りはしてなくて、名字は豆腐屋のまま。で、その文化庁長官をやった人の家の離れに住んでたっていう。

山岡　：　で、どんな影響を受けたの、その先生から。

荒井　：　いや、影響は受けてない。学んだことの一つは、人のやってないことやんないと駄目だってことね。要するに新しいものとは言わなかったけど、オリジナルなものじゃないと作家にはなれないみたいな。だから誰かの真似してもいいけど、どっかでオリジナルのものを出していかないと作家にはなれない。作家になるにはどうしたらいいか、みたいなことは、いろいろ言われた。他の生徒には、仕事はイラストレーターなんだけど、版画を勉強するとちょっとイラストに役立つかなとかっていう人とか、それから半分イラストレーターだけど、もっと版画の技法とか版画を使えばもっといい面白いイラストが描けるとかいう人もいた。そういうほとんどプロの人たちと、全くあんまり何も考えてない僕みたいな人たちと10人ぐらい。そして、もし美術の作家になるんだったら、君らはちょっと足りないものが多すぎるっていう話になった。要するに、まず予備校行ってないじゃんみたいな。来てる人たちは全員予備校行ってなくて、美大とか受験してなかった。

山岡　：　予備校行ってないということは、基礎的な勉強ができてないっていうことかな？

荒井　：　そうそう、デッサンとかができてないっていうこともあるけど、もうひとつは友だちが少ないってことね。

山岡　：　ほう、それは面白いですね。そんなこと大事かな。

荒井　：　そういうもんだったんだよ。それで、俺は、神田界隈に出入りするようになって、だいぶ慣れてきたりした。展示室の奥に、10人ぐらいが入れる狭い事務所みたいなとこがあって、そこで飲んだりするわ

けですよ。ちょっと顔見知りになると、「荒井君、ちょっと飲んでいきなよ」って言われる、ね。もう知らない人がいっぱいいるわけだよ。中には作家で有名な人もいたりとか、評論家で知ってる人とかいたりするんだけど。とにかくそこの端っこでさ、俺は、ただビール飲んでて。いっぱいいる10人ぐらいでさ、なんかワイワイガヤガヤやって。若い子同士で「どうよ、芸大は？」とか話してたり、予備校で一緒だったとか。年寄りもいて、芸大だったりとか。いろいろ錯綜してるけど、結構、すごい小さいコミュニティなの。予備校の話は非常によく聞いた。若い子同士だったら「なんだお前も、すいどーばた、か」とかさ。

山岡 ： 作家活動するのに、そういう仲間は大事ということ？

荒井 ： 大事っていうか、やっぱそれはすごく感じたよ。たとえば、貸し画廊に行ってて、すごく打ち解けてるわけだよね。作品の話するのもけんかにならないわけじゃん。何も知らない者同士だったら作品の話もしないわけじゃん。怖いし、そんなこと言ったら。でもある程度のコミュニティだと思えば、「いや、あいつの作品、この前悪かったよね」とかって言ったりするわけだよ。俺は「そうだね、あれは良くなかったなとか思ってんだけど」とか言う(笑)。でもそういうのが割と自然に話せる。

山岡 ： 吉田克朗さんは、作品論とかどんなことを言ってたの？

荒井 ： 俺は聞いたの。美術を見たときにどういうことを起点にして、いい作品か悪い作品かって、克朗さんはどんなふうに考えますか、みたいなことを、飲み屋で真面目に聞くとさ、「いやあ、観ていいなと思ったらいいんだよね」とかって。答えになってねえじゃんって思ってさ。とにかく、克朗さんが言ったのは、君らはとにかく、画廊回りしろと。それから美術の歴史、現代美術の歴史を学ばなくちゃいけないと。「君は多分、滝口修造あたりぐらいで作品が止まっているから、とにかく現代美術と言われるものは、貸し画廊でも見るし、大きい展覧会があればちゃんと見に行って、自分の考え、感じたことをちゃんと覚えとく」って。それから美術手帖のバックナンバーをなるべく読むようになった。

山岡 ：（笑） 美術手帖が大事だったんだ。

荒井 ：うん。美術手帖は、やっぱ結構大事だって言ってた、克朗さんは。神保町に学校があるから、美術手帖のバックナンバーなんて、大体100円ぐらいで買えて、1 週間に2冊か3冊ぐらいか、それ読んだ。

山岡 ： 勉強したんだね。

荒井 ： 画廊とかで飲みながら、いろいろ話になるときに、「もの派」は何かとか、そういう話になるわけ。その当時だと、フォルマリズムの話とか出てくるわけね。特に男たちの間では。女の人はそんな話なかったけど。女の人はね、そんなの関係なかったみたいね、フォルマリズムとか。

山岡 ： そんな話、しないの？

荒井 ： でも、その頃は女の人たちの作品が一番面白いんですよ。80年代の初めぐらいは。80年代が今空白的に思われてんだけど、あの頃一番面白かったのは、女の人たちの作品ですよ。

山岡 ：「超少女たち」っていうやつ？

荒井 ： そういうふうな言われ方してたけどね。ただやっぱり、あれ圧倒的に新しかったと思うよね。男たちはフォルマリズムとかいろいろなこと言ってて、インスタレーションの話とかするんだけど、それはなんかコンテキストみたいのがあるんだよ、男の話っていうのは。だからそのコンテキストわかるためには俺は美術手帖の、バックナンバーを読なくちゃいけなかったし、それからクレメント・グリーンバーグの翻訳があんまり少ない時期に、図書館でコピーしてきた日本語版みたいなのを読んだりとか、そうじゃないと追いつかなかったみたいなとこあるわけ。あの頃の彼女たちは、お酒飲むのも好きだったから、居ることはいるんだよ、ギャラリーの飲み会とかに。女だからってチヤホヤされることもない。10人ぐらいいる中に2人ぐらいは、女子。時たま男がさ、「いやぁ～、最近の何々ちゃん作品はさあ～」とか言うと結構、毅然としてさ「いや、それはねぇ、ちょっとなんか見方が間違ってる、私的に私の感じではこういうふうに見てるけど、それと何か、違うよ」とかって言い返してた。

山岡 ： それで、銅版画制作の方は、どう？

荒井 ： 最初の頃はとりあえず、毎日美学校に行って、1 日 1 点作る。6つ作ったら、吉田さんに見せる。とにかく俺は、女の子のことを忘れるためにバイトし、バイト終わったら美学校に行く。

橋本 ： それは自分で自分に課したルール？

荒井 ： そうそう。美学校は22時に閉めるから、そしたら都立大に戻って、中国文学の人たちが飲んでるスナックに行く。そこでまた1時か2時ぐらいまで飲んで。

山岡 ： 帰って寝る。で、朝から仕事に行って、午後は、美学校に行くんだ。そういうルーティーン。

荒井 ： そうそう。大学には行ってないの、ずっと。大学の外側にだけ行ってた（笑）。

山岡 ： お母さんは何も言わないのね、大人と思ってるから？

荒井　：　言わないっすね。就職のこととかも何も言わなかったから。留年したことは言ったよ。留年しちゃったぁ、って感じで。

山岡　：　それはほったらかしてるのか？信用しているのか。

荒井　：　多分俺が子供の時、俺が「ぼくはあなたのロボットじゃない」って言ったのがトラウマになってるんだよ。どうでもいいとは思わないけど、押し付けがましいことは言わない。そもそも、人文学部行くっていうのも、本当に金のことを考えれば法学部や経済学部でしょう。でもそれも言わなかったし。

山岡　：　神田に毎週行ってるときに、自分が個展したらどうなのかとか考えた？

荒井　：　そりゃ、吉田克朗先さんから個展しなくちゃだめだと言われてたんで。だって個展しないとあいつら神田の人たちは俺のこと認めないと思ったから。「かねこ・あーと G1」で最初に同じクラスの内藤裕志幸という人と二人展をやった。

山岡　：「かねこ・あーとG1」は京橋でしょう？　別に神田にこだわりはなかった？

荒井　：　うん、それはない。神田の話が多いのは、「もの派」の流れもあるけど、あと本当にギャラリーのオーナーが親切。でも実は俺は、銀座にも行ってるわけ。若い子ができないようなギャラリーも見には行ってるわけ。中西夏之がやるような東京画廊も行ってるし、西村画廊も行ってるし。鎌倉画廊もあったし。それはもう全部行ってるわけですよ、1日の間に。銀座から始めて、最終的に神田に行くみたいな。なんでかって言ったら、神田に行ったら、お酒飲める。銀座だったら、オープニングやってれば、そこでお酒飲めるけど。でもそれは客として飲んでるわけだから、だらだら飲むわけにはいかないわけじゃん。

山岡　：　その流れで神田の「葡萄舎」との付き合いも始まったわけ？

荒井　：　そうだね。あの頃、「葡萄舎」はぼくなんかにとっては高くて。神田の作家にとっても高くて。だいたい俺らは「養老の滝」とかそういう所に行くんですよ、みんなで飲んでるときは。だけどちょっと金のある人がオープニングとかやると、30人くらい引き連れて「葡萄舎」連れていってくれた。結局、俺なんか知らないやつなわけよ、作家から見ると。だけど作家の後輩のやつとかと一緒に行ってると、みんな行こうぜとかって言われて、ついてったりするみたいな所だったし。俺なんか、ひどいから、お金払わないで逃げたりとかしてた（笑）。そういう店として「葡萄舎」があった。あそこはあの辺では高かった。今も高くないわけじゃないけど。

4. 1970年代末頃からのライブアートシーン

山岡 ： ところで、80年代前後に、荒井さんが出入りしていた、ライブのシーンって、どんな感じ？どんな人たちに会ってたの？

荒井 ： 70年代後半の日本の音楽シーンは、ノイズとかも含めて、吉祥寺に「マイナー」って言う、ジャズ喫茶が発展してできたライブハウスがあって、そこで演奏した人たちというのが、今やアンダーグラウンド界ではビッグネームになっているんだよ。俺が東京に出てきたのは1978年で、その時にはすでに存在してたんだ、ライブハウスとしての「マイナー」は。俺は奥手というか、真面目な子だったから、出入りしていなかったの。変な音は聴いているんだけど、レコードで。ただ、俺が聴いているのは洋物が多かったんで、日本のそういうシーンていうのは全然わかんなかった。でも、ときたま大学の同級生（神谷清美君）で詳しい奴がいて、そいつに付き合って、オールナイトのライブとか、有象無象の連中が出るライブとか観に行くことになったってわけ。美学校に入る前から、そういうシーンというのが、割と身近な感じであったんだよね、俺には。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： で、美学校に入って、「赤木電気」っていうのを始めたから、そういう連中と付き合いができてきた。その頃は、「マイナー」はなくなってて、吉祥寺には、それを継ぐ形で「ギャティ」って言うライブハウスがあった。「マイナー」とは実質関係ないんだけど、「マイナー」を補完するみたいな場になってた。そこは、ソロのライブはあまりなくて、だいたい3つのバンドとか2つのバンドみたいな。出るためには、一応金を払うんですよ。客がくれば金払わなくていいんだけど。でも客来ないから、結局自分たちで払った。「赤木電気」もそこに出るようになった。一緒にやった友達のバンドの友だちとか、そういうのでいろいろ付き合いが増えていった。どっちかって言ったら、音楽関係の友達が増えていくんだけど。そのあたりでは、いろんな人に出会ったよ。

山岡 ： 田中トシさんとも、その辺で知り合ったんだよね？

荒井 ： 彼は、まあ有名人ではあったんだ、その界隈では。わりといろいろとんがってる人として、噂にはなっていた。駒場にある芸術高校の生徒で学生の時から、いろんなところに出入りしていた。その後、トシは、川仁宏さんと「マウスピース」っていうパフォーマンスユニットを組んだんだよ。川仁宏は、美学校作った人。川仁さんは、その前には現代思潮社にいて、土方巽の写真集出したり、マルキ・ド・サドの本を翻訳で出して、裁判沙汰になったりしてた。ちなみに、現代思潮社っていうのは難解な本を出すから「黒難解」って言われた。みすず書房の方は白っぽい本だから「白難解」。

山岡 ： 荒井さんのつけたあだ名ではなくて？

荒井　：　その頃みんな言ってた。特に全共闘系の人たちとかは。俺は全共闘じゃないけど…。やっぱり白難解か黒難解を読んでないとちょっと馬鹿だって思われてた。川仁さんはその頃、もう50歳くらいかな。で田中君は20代前半、20歳ちょっとくらい。で2人でユニットをやって、これが1982～83年。川仁さんっていう人は、いろいろ人脈が広いのでいろんな人が観に来る。川仁さんに世話になってる人とか、ハイレッド・センター系の作家とか。僕もその 1 回目の「マウスピース」のパフォーマンスを、テルプシコールに見に行った。田中トシっての、おれと同い年なんだよね、学年的には。だからなんだこいつって思った。前から名前は知ってたから、しょうがないのかなと思ってたんだけど。でもやっぱりすごい人たちが見に来てて。川仁さんって人は編集者だから、チラシっていうかパンフレットみたいの、すごいかっこいいこと書いてるわけで。だからもう、えー？とか思って。田中トシ格上げー、みたいな。格上げっていうのも変だけど。

山岡　：　その頃の田中トシさんって舞踏ぼくなかったの？

荒井　：　いや、田中トシはもともと「メールド」とか「マイナー」とかに出てたから、ほんとに、はっちゃけたおかしな奴だったんだよ。ぼくが聞いた話でも、おかしなとこがあったんだ。たとえば「TACO」っていう、山崎春美っていう人がオーガナイズしてたバンド、そこにも属してた。そのころ「TACO」は、法政大学の学館っていう、今はなくなったけど、そこで変なコンサートいっぱいやっててさ。1978年か1979年頃かな。俺らなんかには、そっちの方が、「マイナー」よりは行きやすいわけ。しかも、ちょっと伝説化してたの、その頃の田中トシは。その法政大学の学館での「TACO」のライブで、トシは学館のトイレで閉じこもって叫んだりとか、戸を叩いたりとかって話があってさ。

山岡　：　なるほど。そもそも「TACO」は、ちょっとやばめなことをする人たちなんですね。

荒井　：　そう。山崎春美の一番最後にやったパフォーマンスっていうのは、自殺未遂パフォーマンス。そのパフォーマンスは plan-B でやったんだけど、俺は見に行かなかった。1983年か84年くらい。ほんとに自殺未遂やっちゃった。

山岡　：　春美さんが？

荒井　：　そうそう。未遂っていうか、見てて、たぶん出刃包丁かなんかで肩かなんかのところ切りつけたみたいで。

山岡　：　自分で自分の？

荒井　：　そうそう。自殺未遂だったら心臓とかなんだけど、そこまでいかないんだけど。実際にやばいっ

ていうか。実際に血がいっぱい出て、出血多量にもなるような感じで、本気でやっちゃって。けっきょく救急車来て。そういうパフォーマンスがあったっていう。田中トシは関係ない。

山岡　：　ふーむ……。バンドだけど、パフォーマンスをするわけね。

荒井　：その頃、バンドとかそういう考え方が、よくわかんない時期があったわけよ。だから俺らの「赤木電気」もバンドだし、そういう音楽なのかよくわかんないことをやったっていうのは、そういう雰囲気があったわけ。これは音をやってるのか、パフォーマンスなのか、ただ変な音を出すために変なことをやるのかわけわかんないみたいな。さっき言った「TACO」の一員として、田中トシがやった時も、みんなが演奏してるのはステージなんだけど、彼はトイレに籠り、でもそれは TACO の演奏の一部になってるわけ。同じ時間に、ちょっと離れた空間でメンバーが一人でやってたみたいな話になってるわけ。でね、その山崎春美の自殺未遂パフォーマンスは、plan-B に山崎春美がゲストで呼ばれた時の話。香山リカっているじゃん。

山岡　：　心理学者の？

荒井　：　そうそう。まだ彼女は学生かインターンだった。彼女は山崎の友だちで、彼女はそのパフォーマンスを目撃した。あと、細川周平って有名になった音楽学者いるけど、彼なんかも、「TACO」で、シンセとか弾いてたみたいよ。

山岡　：　山崎春美って女性？

荒井　：　男。関西人のおっさん。彼は彼ですごい天才肌。「ロッキング・オン」とかそういうロック雑誌があったんだけど、そういうところに投稿してた。山崎春美って名前で投稿してたから、俺も富山にいる時は女だと思ってたんだけどさ。投稿欄でも頭のいい人っているわけよ。「ガロ」だったら詩人の伊藤比呂美の投稿とかが、すごいぐざっと来たりだとか、「ロッキング・オン」っていう雑誌には、山崎春美っていうのが、いつもエグイこと書いてた。

山岡　：　そっか、「ロッキング・オン」に載ってて知ってたわけね。

荒井　：　川仁さんもよく美学校に来てたから知ってた。田中トシは、その頃美学校でヌードモデルやってたんだよね、デッサンの。それで会ったりして、ちょっと顔もわかってるわけじゃん。で、俺が今度一緒にやりませんかって言ったら、「そうですね」とか言って、わりと軽く、受けてくれた。それが実際に知り合った時。彼は吉祥寺に住んでいたから、ぼくも当時そっちの方に住んでたから、じゃあ、ちょっと飲みましょうかって話になった。それで一緒に横浜港の埠頭で2人でやったんだ。それが、1984年の「ぴくぴくとふるえる」。それから、けっこう家も近いから仲良くなっちゃって。彼もそれなりにお酒はその頃は飲ん

でた。芸術高校の時はパンク系だったんだけど、そのあと「青龍會」っていう舞踏グループに所属した。「青龍會」を主宰した原田伸雄という人も美学校関係のだったので、たぶんその辺で川仁さんと知り合ったのかもしれない。まあ、そういう感じで。

山岡 ： じゃあ、荒井さんに会った時には、トシさんは、もう「青龍會」入ってたわけ？

荒井 ： うん、入ってた、入ってた。

山岡 ： へー。じゃあ、だんだん舞踏になっていくみたいな。

荒井 ： うん、そうそう。ただね、彼はね舞踏家としては珍しく音楽は使わないんだよ。何を使うっていったら、自分の言葉とかボーカリゼーションみたいなことで動く。その頃からやっぱり全然違う感じ、ぼくなんかから見てて。田中トシはあの頃考えた上で、絶対音楽は使わなかった、自分の公演とかでも。田中トシは「ギャティ」でバイトしてたりした。「赤木電気」なんかも、そこでやったりとかしてたので、俺とのつき合いはだんだん濃密になっていった。その後、「ギャティ」が潰れたあたりで、田中トシは「イノカシュラン」っていう、毎週日曜の午後、井の頭公園でのワークショップというか、そういうムーブメントを始めたんだ。

山岡 ： なるほどね。

荒井 ： トシが中心になるとかじゃなくて、あいつの方法論というのはけっこういいかげんというか、ある意味民主的なところがあって、何かやるから、何かやるんじゃなくて、「ぼくは毎週日曜日にやってるから荒井君も来てみてよ。」とかそんな感じ。来なくても自分はやってるっていうさ。だからそういうやり方。

山岡 ： 「イノカシュラン」には、荒井さんもときどき寄ってみたってこと？

荒井 ： そう。寄ってみて、斜めで見てる感じのときもあったし。ぼくもサックスとか吹く方だった。3音か4音しかでないけど。そこで吹いたりとか。あるいはただ叫んで走り回ってたりとか。

山岡 ： 何年くらいやってたの？

荒井 ： 3、4年やってたんじゃない、あいつ。

山岡 ： 荒井さんも3、4年の間にときどき行ってるって感じ？

荒井 ： そうそう。月1とか月2くらいで。

山岡 ： その「イノカシュラン」は公演をやったりするの？

荒井 ： 1回だけ。場所借りて、三鷹の駅の近くに武蔵野芸能劇場っていうのがあって、操り人形の結城座の場所なんだけど、いちおう三鷹市が持ってて、結城座に貸してる。で、結城座がやらないときは市民に貸し出すみたいなシステムだったから、そこで借りて、やったんだ。

山岡 ： 1985 年ですね。その三鷹のには荒井さんも参加したの？

荒井 ： そうそう。それはもう、そこに関わってる人みんな出たって感じ。山崎広太は出なかったかな。とりあえず、有象無象の人も含めてみんなで出た。その後、田中トシが「ユーラシアン計画」っていうの自分で作った。1年くらい日本を出て、インドかなんか行って自転車買って、それでトルコまで行くっていう計画立てたのよ。インドだったと思うけど、インドでサイクリング車とかじゃなくて、そば屋とかみたいな自転車。商業自転車というか。それを買って。安いからね、あの辺。それで荷物とか積んで、トルコまで行った。

山岡 ： 1人で？

荒井 ： そうそうそうそう。ほとんど死にかけてたみたいだけどね。アフガニスタンとかいろいろあったから。

山岡 ： 危なくてってこと？

荒井 ： うんうん。それで最終的に自転車と一緒に成田に戻ってきた。成田からインド製の自転車で東京まで戻って来た。愛着があるからね。やっぱ、ほとんどきちがいだよね、あいつ。

山岡 ： その後、あんまりトシさんと一緒にやったりってことはないの？

荒井 ：トシは、福島の田島のフェスティバルに出てる。そのフェスティバルに、日系ブラジル人の女の子が舞踏を勉強しに来てて、田中泯とかのとことか行ったりとか、さまよってたんだけど、ピンと来なくて、そのうちに田中トシと出会って、ラブラブになっちゃった。それでその流れで、田中トシはブラジルに行った。田中トシ、日本にいても食えねえからさ。その日系ブラジル人の子は家が金持ちだったみたい。

山岡 ： 良かったね。1990 年の「かがやく魂」って荒井さんのイベントに、田中さんも参加してんだね、テルプシコールで。

荒井 ： そうそう。その時はまだ日本にいたんだよ。俺がたぶんアフリカ行ってる間、ブラジル行ったみたいな形になってるんだろうな。

なるほどね。89年から90年ってのは世界は変わるし、日本も変わるし、みんなも変わったんだね、きっとね。

荒井　：「イノカシュラン」ってとこには、たとえば、風巻隆っていう太鼓叩きとか、小西ヤスが来てた。小西さんというのは、フランスに留学していて、帰国してから江古田で「ギャラリーメールド」というのを開いた人。

Y　：「メールド」には、荒井さんって行ったことあるんですか？

荒井　：　いや、行ったことないんだよ。たぶん80年くらいに閉めてると思うんで。ドイツにいた白川昌生さんもそこで、何か展覧会を企画していたらしいね。彼らは、「ジャパン・フルクサス」を名乗ってた。田中トシは、そこに、高校生の頃から、出入りしていたんだよ。

Y　：　白川さんは、「イノカシュラン」には、来てないんだね。

荒井　：　来てない。白川さんは、もう群馬に行っちゃってるんではないかな。小西ヤスっていう人は、「イノカシュラン」で会った人の中では特にちょっと変な人だった。もう隠者っていうか。田中トシとも友だちだし、井之頭公園の近くのアパートに住んでたから、立ち寄るわけ、日曜日に。

山岡　：　ヤスさんってどんなことするの、「イノカシュラン」に来て？

荒井　：　何もしない。隠者だよ、隠者。でも、いつもかっこいいっていうか、きったない長いコートみたいのとか着てたりとか。日本人離れしたファッションセンスで、「ああ来てるわ。来てるわ、こいつ」みたいな。

山岡　：　パリに行ったりするんだから、まあまあお坊ちゃんなのかな。あるいはパリ仕込み。

荒井　：　わかんない。そんなの全然話さない。過去とか、聞いても。

山岡　：　そうなんだ。じゃあ、顔は出してたけど、してたことはあんまり覚えてないって感じっていうか、してなかったような。

荒井　：　そう。ときたま手を叩いたりとかするんだけどそんな感じだよ。パンパンパン(手を叩く音)とかやったりとか。飲みに行ってもなんか、しゃべらない。それでも、何回か、パフォーマンス公演に誘ったよ。明大前にあった「キッド・アイラック・ホール」とかでの。

山岡　：「イノカシュラン」は、当時としては、興味深い活動だね。

荒井　：うん、そう。霜田さんが関係してたイベントとはちょっと違うよね。あの頃にありがちなパターンではあるんだけどね。でも、すごく有名な人とのコネがあって、田中トシは。ケイ・タケイっていうニューヨークのダンサーが日本に来た時には、彼女を「イノカシュラン」に連れて来たんだ。そして、彼女がワークショップやったりとかしたね。そういうこともあって、いろいろ面白かった。
Ｙ　：私、1回ニパフに田中トシさんが出てるの見たよ。

荒井　：それは俺とサエグサ（三枝由起夫）が呼んだんだよ。
山岡　：あーそう。ブラジルから帰って来ましたって。この人は完全に踊りの人だなって思った。田中トシさんって今日本にいるの？まだブラジルにいるの？

荒井　：もう、完璧ブラジル人だよ、今。

山岡　：へー。じゃあ、そん時会った女の人と一緒にいるのかしら？

荒井　：当然だよ。子供もいるし。女の子と男の子の二人。下の男の子がこの前病気で亡くなっちゃって。まあ、いろいろあれもあれで大変なんだよ。あいつもほら、ああいう商売っていうか、田中トシって能とかもやるし。あいつね舞踏とかに行ったのも、身体ってものが何かっていうのを真面目に考えようと思ったから。その後、能に入って、それから整体に入った、野口整体に入った。そういうのを、全部極めてんだよ、とりあえず。それであと父ちゃんが書道家だったから、書道もやってんだよ。

山岡　：ブラジルで整体と書道を教えてるの？

荒井　：いちおう整体は教えてるみたい。教えるっていっても、ちゃんとした免許を持ってるんだ、野口整体の。今は、ブラジルの美術大学の准教授みたいなのをやってるのね。演劇とかダンスとか、サンバみたいなダンスのエンターテインメント系のコースがあって、そこで基礎的なものを教えてるわけよ。それで、あいつが教えてるのは雑巾がけ。日本人もそうだけどね、今ねモップとかでやるから、ああいう動き方しないでしょ、みんな。筋肉の使い方がもうそれ使わないようになってるから。ああいう四つん這いになって、押してくみたいな。

山岡　：私世代は、中学生くらいまでは雑巾がけしたよね。

荒井　：今の子はしてないと思う。けっこうそのことで目覚める奴らもいるみたい。それでそいつらを、彼は大学とは別に自分で教えたりしてるわけ、舞踏みたいなことを。大学でも教えるんだけど、そんなにすごくできないわけじゃん。そういう流れの中で、個人的に田中トシについて来るダンサーとかはいるみた

いで。

山岡 ： 田中トシさんは荒井さんにとってけっこう大事だっていうか、友達なわけ？

荒井 ： そう。やっぱり田中トシと会うことで、いろいろな人間関係が増えていったところがあるから。

山岡 ： なるほどね。

荒井 ： で、小西さんのことでもう一つ話しておきたいんだけど、ある時、真木画廊の山岸信朗さんっていう画廊主の人と飲んでて、「俺、小西ヤスと最近付き合いがあるんですよ」って言ったら、山岸さんが「ええ、あいつ生きてんのか？」って言うから、「生きてますよ」って言ったら、「あー良かった良かった」って。「山岸さん知ってるんですか？」って言ったら、「いやー、あいつさ、神田界隈の貸し画廊でうんこしたことあるんだよね。見つかっても、何にも言わないでそのまま帰っちゃう。そういうことしてたんだよ。」って言うから。「うんこされた方の作家たちは困りますよね」「そうだよね。そうなんだよ。そうか、でも元気なのはいいよ」って。すみません、そんな話で。

山岡 ： ところで、荒井さんは、そのさっき出た、及川さんの企画してた、檜枝岐のフェスティバルイベントには参加した？ 興味はあった？

荒井 ： 及川さんの檜枝岐のフェスティバルは、ノミネートされなければ参加できなかったので、俺は行ってない。近しい知り合いがいれば、もしかしたら、行けたかもしれないけれど。そのあと、及川さんはスポンサーのシュウ・ウエムラからのサポートがなくなったからなのか、檜枝岐のフェスティバルは開催されなくなり、参加していた人たちが新たに、福島の田島でのフェスティバルを企画したので、俺は「現場の力」として、そっちには参加したよ。そちらは、オープンだった。星野共さん、武井よしみちさん、イトーターリさんたちが企画していた。そこには、今では、ジャパン・ノイズとして国際的に知られている「INCAPACITANTS 」（インキャパシタンツ）や、「Merzbow」（メルツバウ）も来ていたね。田島は、福島の山の中だから、観客はほとんどいないのに、もったいないなと思ったよ。僕は彼らの演奏が聴けてラッキーだと思った。その頃、粉川哲夫さんが、ホイト芸の黒田オサムさんを見つけてきていたんだよ。その後の彼らの企画のもので、東京近辺でするものには、僕は参加してた。

山岡 ： プラン−B には出入りしてた？

荒井 ： プラン−B はけっこう面白い企画やってた。特に音楽関係だったら、フリーミュージック、インプロビゼーションですね。まあ、そういうのもあったていうこともあって、あの辺も結構、押さえてた。アンダーグラウンド界隈では見に行かなくちゃいけないイベントみたいな雰囲気もあった。田中泯さんはよく見てたよ。田中泯さんは外国のインプロバイザーとよくやってたんで。「すきすきスウィッチ」っていうバンドをして

いた佐藤幸雄さんっていう人は当時、田中さんの「身体気象研究所」に参加していた。その佐藤さんのことを俺はちょっと知ってたから、「今度、田中泯さんの身体気象のワークショップあるけど来ないか？」って言われた。

山岡 ： 行ったの？

荒井 ： うん。「キッド・アイラック・アート・ホール」でやるから、荒井君も来てみなよ。面白いよ」って。キッドは、明大前にあって、わりと近かったので行った。そして、衝撃的な体験をしたんだ。

山岡 ： おおお。

荒井 ： ぼくの中で「自分も舞踏家になれるかもしれない」と思ったのは、それがあったから。行くときは、なんとなくで、どんなもんかなって程度。500円とか1000円くらいだったし。泯さんはその時来なかったんだけど、田中泯のメソッドっていうのがあって、それ簡単なメソッドで、弟子でもワークショップをすることができたわけ。それがどういうメソッドかっていうと、まず、たとえば、15、6人来るわけよ、ワークショップに。そしたらまず、全然知らない人ばかりなわけだから、とりあえずパートナーで2人1組になるわけ。会ったことない人なんだけど、とにかく2人1組になって、まず呼吸を合わせる訓練から始めるわけ。特にパートナーになった人の吸ったり吐いたりする音を聞きながら、一緒に吸ったり吐いたりする。それで佐藤さんがリーダーだったんで、「ぼくが吐くときに、一緒に吐きましょうね」って言って、フーって吐いて、「今から吸います」スーとか言って、「それ一緒にやりましょう」って言って。「今度はこれ同じことを、二人パートナーになってる人と息を合わせるようにしてください。パートナーの人が途中で吸えなくなったら、吐き始めたら、その人に合わせるようにしてください」と。

山岡 ： やってみたい。

荒井 ： そういうようなことから始めていって、次に、「次はパートナーの人の体前屈を手伝います」って話になって。「これから体前屈二人でやるけど、まず前屈をする人は目を閉じてください。それでパートナーの人が押してください。前屈する人に息を合わせて、その人が吐くときにゆっくり押してあげてください。」って言うわけ。そうするとね、最初のうちはね、ようするに人っていうのは押されると思うと、押す人を意識するわけ。それで、押す人を助けようとして合わせたり、逆に身体的には拒否したり。ようするに知らない人に押されるわけだから、拒否する体の部分もあるし、逆にもっと自分もやってあげようと意識したり。それについてリーダーの人が「なるべくね、徐々に慣らしていきますけど。まず目を閉じている方は自分の息だけを考えて。今から押されるとか、そういうことはあんまり考えないでください。押す人はとにかくパートナーの息を聞いて、吐き始めたと思ったら、一緒に吐きながらなるべく力を入れずにスーっとやってください。」こういう風にね。で交代でやるわけね。それで同じことをやってくんだけど。押されるときにそういう風に言われると、目を閉じてても自分の手が足の指より先に行ってるっとかってわかるわけよ。これっ

て全然任せてるわけ、向こうに。1人でやるときはほら、手を先にやろうって頑張るじゃん。筋肉使ったりとか、前に出そうと。でもそれは全然考えないでやってくれって言われたら、言われるままにリラックスしてくる。

山岡 ： ふーん。

荒井 ： それをね、1時間くらいで、10個くらいの過程がある。最後にはね、頭持って、吐いてるときに、頭をあっちやったりこっちやったりしてください、ということになるわけよ。そうなってくると、パートナーの人のことを信じきってるから。一緒にやってるこっちもだんだん慣れてきて、力抜いちゃってるわけよ、完璧に。吐くときに何かやられても、自分で、頭がどうなってるのかわかんないわけだよね。前屈だったら手が前にいったっていうのはわかるんだけど、頭とかだと完璧にわかんないわけ。ただ自分が吐いてる時にやられると、あー今右にやられたなとかさ、左にやられたなとかさ、前にやられたなとか、あご持って後ろにやられたなくらいで。なんとなくそんな感じでやってるわけよ。それで自分がやられるときはわかんないんだけど、交代して、今度自分が動かす方になり、パートナーを見ると、完璧にグチャグチャに動くわけ。

山岡 ： へ〜

荒井 ： 見てて、すげーなーって思って、自分でやってて。完璧に肩の力とか抜けてる。頭をポーンと下に落とすじゃん、後頭部持って。そしたら、スゲーぐちゃーとなっちゃってさ(笑)。あごを手であげると、逆に後ろにガーンっていくわけ。右にやれば右にやると。ようするに、ボールが紐で一個だけついてて、頭がボールとすると紐でついてるぐらいに、グルグル回っちゃうわけ。

山岡 ： 目をつぶっているわけよね。

荒井 ： 本当に、人間てけっこう柔らかいんだなみたいな。手をブラブラにするとか。足を持ってぴゅんてやるとか。ぴゅんっていうのは、足を持って紐みたいにこうやるわけよ。そうすると体が紐みたいになるわけ(笑)。足でポーンとやった瞬間、順番に頭まで届いてくっていうか。で、そういうの見てるわけ。えー、こんなに動くのか人間ってみたいになるわけ。自分もこんな風になってるんだろうなみたいな、他人の身体見ながら。終わった後にさ、佐藤さんが、その日、「荒井君。みんなの見てたけど、荒井君が一番体柔らかいよね。荒井君一番体がグチャグチャになってた」って言われた。そんなの、今まで言われたことなくてさ。体操は少しはできたんだけど。野球が上手だっていっても、そんなに上手でもなかったしね。それから剣道やってたけど、そんなにね一番強かったわけじゃないし。どっちかって言ったら、自分体固いと思ってたから。体柔らかいって初めて褒められて、自分が20年くらい生きてて。なんかすげー、変に嬉しかった。だけど、柔らかいっていっても自分で柔らかくできてるわけじゃない。そういう条件がそろったとき、柔らかくなるみたい。

山岡 ： そうかもね。それっていつ頃？

荒井 ： 1983年か、1984年でしょうね。俺が、オールナイトのバンド見に行ったりとかしてる頃だから。でも、他の舞踏家のワークショップは一回も行ったことなくて。田中トシとか山崎広太とか、他にもいろいろ舞踏家の奴と付き合いはあったんだけど。それで、田中泯っていうのはすごいなと思ったのは確か。ただ田中泯のメソッドっていうのは本当にメソッドで、ぼくだってできるんですよ、たぶん。そのワークショップ受けた人は完璧に、えー人間の体ってこんな柔らかいんだとわかる、本来的にはね。

山岡 ： ふーむ。

荒井 ： 田中泯って人は自分の表現を、舞踏とは言ってなくて、「ハイパーダンス」って言ってたわけ。東京教育大学、今の筑波大学の卒業生で、なおかつ体育学科で、体育関係のことを勉強した人なんですよ。だからね、舞踏家たちと全然違う方向から踊りにアプローチしてた。体育だと軍隊的な教練みたいな体育があるから、走る人は速く走れるみたいな、水泳だったらとか。そういうものを抜きにしたところで、体はここまでぼよぼよになっちゃうみたいな。ようするに人間の体なんてほとんど水でできてるわけだから。筋肉だかなんだか言ってもね。だからこういう風に波打つみたいに動くこともあるだろうしみたいなね。で。首と本体なんていうのはすごい小さい骨でつながってるだけだから。そういうことでいえば、紐みたいのがあるだけで、まぁ骨だけど、それもコードみたいなもの。電気のコードくらいの太さぐらいの物、もうちょっと太いかもしれないけど。それが本体、肉体とつながってるだけだから、そんなに動かないわけないんだって言うわけね。

山岡 ： 荒井さんはその経験で、何かこれで表現ができるんじゃないかって思ったわけ？

荒井 ： 人間には身体というか、ダンス的な問題で言えば、たぶんこの辺のことで言えば全部なしにすれば、なんとかなるんじゃねえかみたいな、変な強気の姿勢はでてきたよね。実力無視で（笑）。

山岡 ： だけど、それは別に荒井さんのパフォーマンスの原点ではないんでしょ？

荒井 ： そうですね。それが「身体気象研究所」の面白さで。だからワークショップやって自分の所にダンサー入れるとかそういうことじゃなくて、みんながそういう身体性を持ってる、肉体があるっていうことをわかって。それだから、音楽やってる人とか、ヴォーカリゼーションやってる人たちとかが、そういう田中泯の面白さみたいな。それで田中泯がフリーミュージック、インプロビゼーション系の人たちとやったのも、ちょっと新しかったんじゃないかな。舞踏の人がジャズとやるっていうのもあったかもしれないけど、ちょっと違う感じ。

山岡 ： プラン-B と荒井さんとの関わりについて、ちょっとわかった。

荒井 ： そうだから、プラン-B は、面白かった。ただ自分が呼ばれないってことで僻みがあった。スタジオ200とかもそうなんだけど。知り合いの人がみんなやったりしてるけど、自分は若いからなのか、25，6歳ぐらいだから、自分の関係者はいろいろ関係してるけど、自分は全然見に行く人だけであるって、けっこう僻みを持ってた。だからその僻みが、ようするにプラン-B は芸大の教授とかが人選してたりしするんだろうみたいに思った。ファッション系のパフォーマンスアーティストがやったりとかして、本当のパフォーマンスアートは、何にもわかってないみたいだとか、感じていた。

山岡 ： 浜田剛爾さんには会わなかった？

荒井 ： 浜田さんは神田の画廊で展示をしていた。そこでパフォーマンスもしていたけれど、僕はたまたま見なかった。パフォーマンスが終わった後のインスタレーションを見ただけ。当時、飲み会などで、折元立身さんにも会ったけど、俺は面識程度。彼はカリスマ性のある人で、飲みの席では、大きな声で話していて、目立ってた。でも、彼は海外に出ていることが多かったでしょ。

山岡 ： 彼らは、明らかに美術系なんですね。

5.「赤木電気」

山岡 ： では、今度は「赤木電気」のことを詳しく話してください。

荒井 ： それはひょんなところから始まるわけ。まず、俺は美学校で、銅版画をガーッとやってた。美学校には夏期講習というのもあって、写真の夏期講習もあるし、シルクの夏期講習もあるし、石版画の夏期講習もあったので、それも受けた。そして、そこで、出会った連中が、後の「赤木電気」になる。ある時、みんなでオールナイトを見に行ったんだよ。ロック系のというかオルタナティブ系パンク系の。そういうのがよくあったから。オールナイトじゃなかったかな。とにかくそれ見に行って、それで終わって、みんなで飲んで話してた時、あんなんだったら俺らもできんじゃね？みたいなこと言う奴がいたんだよ（笑）。そしたら、そうだよねみたいにさ。いや、ちょろいよなみたいなさ、みんなが。あれは見てる方だから何でも言えるわけじゃん。ピンク・フロイドみたいの見たら、そういうこと言えないけどさ。でも、その時のイベントで出てるやつらはそんなね、たいしたことねえからさ。それで、できちゃうんじゃねとかって話になってさ。でもその時は、誰もそれが発展するとは思わなかったんだよ。それでも飲んでるときにさ、やろうぜみたいな話になったんだよ。そういう飲んだ勢いで、もう2時か3時ぐらいの時。朝方みんな始発で帰った。そいで次の日、夜に学校行ったらさ、三枝由起夫（注：90年代以降、サエグサユキオと名乗る）っていうのがいるんだよ、三枝がさ、サックス自分で吹いてるやつだったの。

山岡 ： 美学校行ってたの、彼も？

荒井 ： うん、あいつはシルク。それで、あいつがさ「おう、来週の日曜日スタジオ取ったぞ」とか言うわけ。「来週って、3日後ぐらいじゃん？」とか言ったらさ、「おう、取ったから。荻窪だぞ」って。シルクの連中が4人、俺だけが銅版。でも、俺には「スタジオって何？」みたいな。

山岡 ： スタジオで音楽をやるとかいう、そういう発想がそもそもないんだよね？

荒井 ： そう。スタジオで練習する？ 練習って何？ みたいな感じ。それが実現化するのかみたいなのも、よくわかんなくて。「1 人 500 円ぐらい、割り勘ね。2 時間借りたから、じゃあ日曜日の何時に集合」で、みんなで集合して行った。スタジオ行ったら、ギターとか借りられるんだよ。ドラムはついてて、アンプはみんなあって、シンセみたいなピアノみたいなエレピみたいなのもあった。それはただで借りられた。ドラムとエレピがあって、ギターとかは借りるのね、500 円とかで。ベースも借りれて、500 円ぐらいで。それで三枝がサックス持ってきてて。俺は音楽苦手だったから、笛とか駄目なわけ。聴くのは聴いてたよ、そりゃたくさん。でも、エレピアノとか無茶苦茶に弾いてすっげえ楽しくて。意味不明。ドラムをダッダーンと叩いて。三枝はサックス吹いてた。楽譜もなにもないわけ。ただただもう子供みたいに興奮してる、そのスタジオっていう空間で。でかい音を出しても何の問題もなく。それはだから三枝がそういうふうに決めなかったら、誰もそういうコースに進むってことが、見えなかったわけ。

山岡 ： 三枝さんはサックスが吹けてたのね。

荒井 ： だから、そういうスタジオとかも知ってたわけ。三枝はみんなが夜中に飲みながら「俺らだって、できるよね」とか言ってたとき、頭ん中でそういうことを考えたんだろうね。じゃあ、俺が具体化してやろうみたいなね。だから俺も、楽しかった。

山岡 ： 1981年くらい？

荒井 ： うん、そのぐらいかな。ほいで、「赤木電気」って、いうんでやろうってことになった。俺らの中で一番年上の人、姉ちゃんと言われてた、赤木能里子の名前を取った。

山岡 ： それが発展して、日比谷の野音でやることになったの？

荒井 ： そうそう。

山岡 ： 2年ぐらいは、みんなで一生懸命やったんだ。

荒井 ： そう。

山岡 ： バイトして、銅版画作って、スタジオも行って、中国文学のところで、飲んで……忙しいね。

荒井 ： 忙しかったね。だからちょっと、その間は千葉大の子のことは忘れるのね。でもね、その頃、俺はもう吉本主義だから、「頭」の人なんですよ。他の連中は、ただの面白主義なわけ。もう面白きゃなんでもいいみたいな。だからもう最初はさ、俺のことみんなね、いじりまくり。いないわけよ、俺みたいのは。みんなは東京生まれの東京育ち。俺だけが、一応大学行ってるってことを、わざわざ公言してる。みんなの学歴はわかんないわけ。自分のことは言わないわけ。俺はさ、田舎もんだからかもしれないけど、俺、都立大行ってんだよとか言っちゃうじゃん。向こうはふーんとか言って。馬鹿なんじゃないこいつって、思ってるわけ。こいつ、いじくったら面白いみたいな感じでさ。その頃、一番いじくられて、腹立ったことがあった。

山岡 ： え？

荒井 ： そのバンドの仲間の1人に星野っていうのがいるんだけど、星野には星子っていうガールフレンドがいたんだよ。それは星野の彼女だから、星子。それで俺が美学校に行く前に、いつも食べるラーメン屋があるわけ。ラーメン食ってから、美学校に行って、それで作品作る、バイト終わった後。そのルーティン途上にラーメン屋があって、そこに歩いて行ったらさ、星子が「荒井さん、相談があるの」とかって言うからさ、なんだろうと思ってさ。「あそこのラーメン屋でよかったら一緒に食べようよ」って俺。それで「何？相談って」。「最近、星野くんが冷たくてね」とか言ってさ。それで「そうなんだ」とかさ一応食いながらさ。「荒井くんって、相談しやすいね」とかっていうからさ。ちょっと変な雰囲気が俺の中で充満してさ。何とかしてあげた方がいいのかな、星野に何て言おうかなとかさ、いろいろ考えんじゃん。「具体的にどんな感じなの」って、「こんな感じでね、なんか最近冷たくてね」「そんなふうに見えないじゃん。仲良くやってんじゃん」「いや、ほら他の人から見たらそうだけどさあ」とかみたいな話でさ（笑）。それでさ、何か星野に言った方がいいなとか思いながら、外に出たの2人で。そしたら、星野と、久住ってやつと、三枝がさ、3人で待ってて、「おっ、一緒に飯か」とか言って。結局さ、俺はいじくられてたわけね。

山岡 ： それが一番嫌だったこと？

荒井 ： 嫌だったよね。そういうふうにしてさ、いじくるっていうか。

山岡 ： でもその女の子はわざとじゃないんでしょ？

荒井 ： いや、グルなんだよ。荒井をからかおうと思って。そんなんすぐわかるじゃん。3人出てきてさ、これやられたと思ったもん。なんでこんな変なことやるんだろって。

山岡 ： ウブだからおもしれえぜって思ったんだ。

荒井 ： そう。そういうことも、あったということ。それでまあ、「赤木電気」は、美学校の写真工房の人が桐生で個展やったときに、そこで、やってもいいよって言うから、そこで演奏したりとか。その写真の先生が割と面白がってくれたんだ、「赤木電気」を。

山岡 ： 「赤木電気」のメンバーってのは？

荒井 ： 荒井、三枝由起夫、星野正治、久住卓也、赤木能里子の5人。

山岡 ： 「赤木電気」というのをやって行こうっていうよりも、ちょっと面白いからやってたという。

荒井 ： そうそう。

山岡 ： オモシロ系ではあるんだよね。

荒井 ： そうやってからかわれたりしてるうちに、俺もだんだん、オモシロ系にちょっと引きづられていた。でも、本当は吉本とか読んでて……

山岡 ： 俺のインテリジェンスは、どこに行ったんだみたいな。

荒井 ： うん。だんだん、まあいいかなって、もう変なこだわりみたいなのは。本当に頭きたけど、そのラーメン屋のときは。本当になんとも言えない感じだよね、はめられたって言っても、別に損してるわけでもないしさ。自分が動揺しただけじゃんね。ただ俺の中ですごい動揺した。ラーメンを10分ぐらいで一杯食ってる間に、それだけの情報を入れられてさあ。

山岡 ： 怒ったの？

荒井 ： 怒ることもできなくて。ドッキリカメラとかいう言葉でもなくて。1 分ぐらいしてから、はめられたなと思って。星子も一緒だなと思って。俺をはめるために、こいつら4人で待ち伏せしたんだ。

山岡 ： それ三枝さん考えたのかな？

荒井 ： いや、わかんねえ。

山岡 ： それで、段々オモシロ系に行ったの？ 痛恨な洗礼…

荒井 ： そうね。あの頃の美学校は、そもそも、オモシロ系だったからね。だから、オモシロ系というのは赤瀬川さんのクラスの若い人たち、南伸坊とか、あの辺がオモシロ系で。やっぱりそういう土壌があって。自分は、それは嫌だなと思いつつも。

山岡 ： 嫌だと思ったんだ。

荒井 ： だって、俺は真面目な人間だからね。

.

山岡 ： 荒井さんが、アーティストとして始まるのはこのあたりからだよね。

荒井 ： 要するに、80年代っていうのが、谷川まりさんに出会ったり、霜田誠二氏に出会ったり、そういう出会いの始まりなんだ。たとえば、霜田氏と最初に話したのは、日比谷野音に「赤木電気」で出た時で、霜田氏が自分の作ったTシャツ売ってたの、参加はしてないんだけど。それで「あ、もしかして霜田さんですか？」って。霜田氏はある程度有名人だったので。

山岡 ： 版画もやりつつ？

荒井 ： 銅版画もやってたわけだよ、というか、そっちは作家活動だと思ってた。たとえば、舞踏家としてすごく才能のあって、続けてる人。それから音楽家で、その頃同じような所で何かやってたやつでも、本当に音楽を作ってる人。そういう人たちの中にいるとき、俺は自分は音楽やってるんじゃないなと思ったよ、舞踏でもないなと。なぜって、彼らはすごく訓練してるんですよ、舞踏家にしても音楽やる人にしても。で、俺たちっていうか、5人がみんなそう思ったわけじゃないかもしれないけど、俺は何かサックス吹いたりとかしても、全然さ、楽器を吹いてるって感じじゃなくて、ただ阿鼻叫喚を作りたいだけなんだよね、自分の中で。だから何かこれはもう、まあ、「パフォーマンス」と言うしかないかなと思った。でもそれは後でわかることだけど、「パフォーマンス」でも何でもないんだよ。

山岡 ： 今日初めて「パフォーマンス」って言葉、言ったね（笑）

荒井 ： その時は「パフォーマンス」と言うしかなかったし、時代は、僕らがやってることを「パフォーマンス」としてOKにしてた時代ではあったわけ、80年代は。一方、「パフォーマンス」っていうのは、如月小春とかも「パフォーマンス」だったわけで、演劇から逸脱していく形の「パフォーマンス」だったし、むしろあれが「パフォーマンス」って言われてたわけですよ、あの時代の、商業的な場面では。要するに何かから

逸脱してるもの、たとえば舞踏から逸脱していくものとか。「ポエトリーリーディング」っていう言葉はなかったけど、霜田氏が、「う〜〜んこ〜〜〜〜」と言ってたのは、今なら、どっちかって言うと、「ポエトリーリーディング」かもしれない。でも「う〜〜〜〜ん」とか言ってるのは、これはやっぱりポエトリーリーディングからも逸脱してる部分、身体性があるからね、そこには。ポエトリーリーディング以上の、体の震えとか、がある。さっき出た谷川さんにしても、彼女にしても自分では、ダンスみたいな、歌のようで歌でない、どっちでもない、で、それで彼女がやってる事は「パフォーマンス」というふうに言っておけばいいし、それで俺らもそういうふうに見ていた。だから俺も、俺ら5人がやってることは、「パフォーマンス」と言っときゃいいんじゃないかみたいに、思うようになった。

山岡　：　どんな場所でやっていたの？

荒井　：　あの頃の80年代のは、ノイズの人たちとかも結構、いたわけだけど、普通のライブハウスはなかなか借りられなかった。爆音とか、汚したりとかいろいろ問題があって。それで、何でもできる場所みたいなのをみんなで探したわけだよ。そういうライブハウス。当時若手の舞踏家も師匠から離れて自分の場所をみつけたかったから、そういうやつらもふくめて、有象無象で、うまくでっかい音出しても大丈夫なライブハウスを見つけてきて、1人で借りると10万ぐらいするから、じゃあその仲間、ちょっと前に付き合い始めた知り合いで、一緒にやったらちょっと安くなるみたいな、そういうところで一緒にやる。

山岡　：　だんだんネットワークみたいなの出てきたのかな。

荒井　：　そうだね。その前に霜田系のネットワークがあったわけだけど、言葉では、霜田系とは言わないけど、どうしても霜田系になっちゃうのは、要するに音楽系のノイズとか、それからエクスペリメンタルな音楽やってる人たちのネットワークっていうのは凄く強くて、それに霜田氏も入ってて、霜田氏がその変な詩の朗読したりっていうのも許容されてるような空間があったわけよ。70年代の終わりぐらい。そのネットワークに舞踏とかも入ってくっていう形で形成されていたのが80年代の「パフォーマンス」。

山岡　：　「赤木電気」は、そこに入っていけたわけ？

荒井　：　そう。日比谷野外音楽堂での「天国注射」というイベントにも出てたから。「天国注射」っていうのは、本当に、ある種のアンダーグラウンドの一大イベントだった。

山岡　：　そういった活動の中、なんていうか、モチベーションとしては、アーティストになろうとか、そういうことじゃなくて？

荒井　：　アーティストとしては、版画家としてっていうか、現代美術家としてだった。版画っていうのは一

段下に見られてたから、だからそれでそこをぶち壊すためにでかいのを作って、だからアーティストとして成功するっていうか、銅版画家として現代美術の作家として成功するってのは、考えてたよ。「赤木電気」的なところで何かっていうのはなかったよね。

山岡 ： 80年代のその有象無象とした動きっていうのは面白いですよね。アート以前というか。ていうか今時の人に聞かせたいっていうかさ、今時は、みんな何かアーティストとして売れようとすごい頑張るわけだけど、当時は、それ以前に何かこう、やってることがある。

荒井 ： そうね、楽しかったよね、けんかも多かったけど。

山岡 ： 自分達が楽しいっていうのが一番かな。

荒井 ： 俺なんかはイベントも面白かったけど、イベントの後飲みに行くのが凄い最高で、後はだから、そういうイベントで知り合ったやつの見に行く。1000円とか取られんだけど、安ければ500円とかだけど、行くのがすごい楽しみだったの。それ見るのは、苦痛だったりするんだよ、下手くそだったりして。だけど飲みに行くのが楽しい。だから週に2回ぐらい人のを見に行ってたね、でも500円ぐらいだから。

山岡 ： 霜田さんは、もう、なんていうか、身体を使ったことやってたんですか？

荒井 ： 身体というか、音楽の連中と、すごい付き合いがあって、霜田氏が関係しているイベントは、霜田氏が全部チラシ書いてたのよ。だから、チラシをよく見かけるわけ、霜田氏のソロの「キッド・アイラック・ホール」でやってたのとか、自分のもあるし、隣にみんなでやる20、人くらい出るようなイベントのチラシが並列に置いてあった。全く同じように見えるけど。

山岡 ： 「赤木電気」は、年に何回くらいライブやってたの？

荒井 ： えーと、そうですね、月1回くらいやってたね。

山岡 ： けっこうインプロっぽい感じの？

荒井 ： 基本的には、三枝が、ミニマリズムだよね。ベースだったら、この三音順番に弾くとか、ドラムだったら、バスドラこうで、こっちはこう叩きながら、あとは自分で好きにやってくれとか。ギターもコード3つくらい。で、みんなは初めてギター弾いたり、ベースやったり、ドラムも初めてだったりするから、結構決められてても、楽しいわけ。練習もしなくちゃいけないじゃん、その3つのコードだけど。3つの音しか出さなくても、やっぱり練習は必要なわけだよね。それで彼らはやるけど、俺は練習とか嫌いだった。三枝もよく俺のこと知ってるから、こんなやつにいろいろ言うとまたキレるからと思ってんのか、お前は何やっても

いいよみたいな。

橋本 ： では、みんなが練習してる時間は何やってたんですか？

荒井 ： 集まるじゃん、みんなはそういうふうにやるわけ。俺はシンセサイザー弾いてみたりとか、声出してウェーって言ってたりとか、勝手にやってる。俺の中では、俺がいるから、「赤木電気」はもってると思ってたわけ。こいつらだけじゃ、つまんねーじゃんみたいな。結局、三枝がその後ニューヨークに行っちゃうんですよ。ニューヨークの学校に留学して。三枝が抜けると、基本的にほら、あいつが全部やってたわけじゃん、他の部分は。だから、結局解散したんですよ、「赤木電気」自体は。

山岡 ： 三枝さんが渡米した 1983年くらい？

荒井 ： そう、83年の8月の「天国注射の昼」の後、ニューヨークに行った。

山岡 ： じゃあ、赤木電気は83年までなんだね？

6.「公民館運動」、「現場の力」

荒井 ： それで、「赤木電気」が解散になって、俺はソロになってた。ソロっていうのも変なんだけど。

山岡 ： ひとりになったのね（笑）。

荒井 ： 一人になった。他の連中はあんまり未練はなかったんだよ、そういうオルタナティブなシーンに。でも、俺はすごく面白くなってた。霜田氏が企画するイベントに一人で参加したりとか。「公民館運動」っていうのをその頃、霜田氏が言い出していた。運動のメンバーは20人くらいいて、その中の一人が自分の家の近くの公民館を押さえて、それでみんなでそこでやるみたいな。それで、都内や近県の公民館を転々とした。

山岡 ： 「公民館運動」を文字づらは、すごくラディカルに見えるよね。「公民権運動」を文字ってる。

荒井 ： （笑）それで、「公民館運動」では、だいたい一人の持ち時間が10分で、20人くらいいるから全員で、3時間くらい。その時々に、舞踏家みたいな人もいるし、霜田氏みたいに裸でポエトリーリーディングする人もいたりとか、ノイズの人たちはノイズの人たちでやったりとか、インプロビゼーション系の、フリーミュージック系の人が出てたりとか、そういう風な感じで。それでまた飲みに行って、けんかしたりとか。そういう感じだった。霜田氏は、それとは別に、月一かなんかで「キッド・アイラック・ホール」でソロやって

た、その頃。「スズメ式」だったかな。俺はそれ見に行ったことはない。裸になってポエトリーリーディングしたり、うんこという歌を歌ったり。霜田氏は70歳前くらいだと思うんですけど、土方巽の弟子の弟子の世代と同じくらいなの。霜田氏は実は、けっこう舞踏家との付き合いがあった時期があった。だから、後になってからも、「そういえば、荒井君ってパフォーマンスアートとか言ってるけど、霜田君とかもやっぱりパフォーマンスアートなの？」って聞かれることがあった。「霜田さん今パフォーマンスアーティストですよ」って言ったんだ。

山岡　：　それを言われたのは、いつの話？

荒井　：　2000年に入るか、1990年代末ごろかな。当時の、俺の彼女が舞踏の照明の仕事やってて、その舞踏の公演には、その彼女を通してただで入れるし、彼女のこと好きだから見に行ってたんだ。だから、俺なんかも飲み会にも、すんなり入れた。とにかくそういう会で、霜田氏の話になった。「あいつは舞踏家じゃなかったけど、俺ら一目置いてたね」って言うわけ。「舞踏やってればな」とかいう感じで。けっこう嫉妬みたいなこと言うわけ、その人が。バリバリの土方系舞踏やってる人なんだけど、その人は。「霜田君の踊りはキレてたよね。キッドで毎月やってたから、ときたま見に行ってたよ。ぼくみたいに観てた人はけっこう多いと思いますよ」とか言ってた。結局、「オン・ザ・テーブル」で、それが復活するわけだけどさ。あれって、もう完璧に踊りだからね。それに、あんなことできないからね、普通の人は。踊りって言うか、パフォーマンスっちゃ、パフォーマンスなんだけど。でもやっぱり、俺があれやっても駄目だと思うんだよね。あのきれいな体とかさ、筋肉のひきつってるのとかも、きれいじゃないと。

山岡　：　落ちたことあったよね？

荒井　：　うん、落ちることあるよね、あの人、1回か2回見たことある。ドーンとかいって。

山岡　：　落ちてもいいのよね、曲芸やってるわけじゃないから。ただ上手になり過ぎたねという感想もあったよね。じゃあ、荒井さんに戻ろう。

荒井　：　それで、公民館運動とかで、いろいろな人に会った。

山岡　：　谷川まりさんにも？

荒井　：　そう。それぞれのパフォーマンスは、10分か15分ってことになってるけど、誰も合図しないわけよ。自分で15分だなと思ったら止めるみたいなルールなの。それで、俺は時間とかわからなくなっちゃって、延々自分のことやってたわけ。グエーとか、窒息系のことをその頃からしてた。口の中に物詰めるやつ。ある時、ぺちゃーっとかさなんか顔についたんだよね。なんだよって思って見たら、谷川さんが幽霊みたいにふらふら来て、三角コーナー持って立っててさ、三角コーナーに入ってる生ごみをさ、投げて

るの。フワーみたいな感じで。

山岡 ： 荒井さんに投げようとしてたわけじゃなくて？

荒井 ： まあ、それもあると思うよ。だって自分の時間が来たから出てきたわけだから、彼女は。止めさせようと思ってやったのか、わかんないけど。ピチャーと顔についたのは、後で見たらワカメだ。その時、サックス吹いてたんだ、音の出ない。窒息系じゃなくて。窒息系のサックス吹いてた、ビーとか言って。寝転がってビーとかやってたら、ペチャってついて。サックスのケースとかも後で見たら、卵の殻とかワカメとか入っててさ。なんだこの女っとか思ったさ（笑）。

山岡 ： （笑）だけど、劇場にそういうものないかもしれないから、家から持ってきたんだね。

荒井 ： そうそう。

山岡 ： 窒息系っていうのは、だいたいどうやって生まれたんですか？

荒井 ： 窒息系は「赤木電気」のときにすでにやってたの。俺、吉本隆明主義者だったじゃん。吉本隆明が「マス・イメージ論」っていうのを書いたわけ。文庫化されたの、それも。文庫化される前にまず読んでて、これはもう、吉本は転向したなと思ったわけ。もう終わったと。すごい腹立った、「マス・イメージ論」。いつもの吉本節で、切り方はかっこいいんだけど、切ってるものが違うだろみたいな。

山岡 ： 80年代真ん中あたりかしら。

荒井 ： そうそう。吉本の変節に対して。結局、文庫本が出たんで、単行本はさすがに破る気にならなかったんで、文庫本だったらいいやと思って。それで吉本の「マス・イメージ論」読みながら、口の中に小さいイヤホーン入れて。イヤホーンがマイクになるんだよ。ようするに電気で音を出すってことは、振動体があるわけイヤホーンにも。マイクもそうなの。振動体があって、それに対して声をかけると、それが振動するじゃん。それを電気的に変えるのがマイクで、イヤホーンも逆に言えばそういうことなわけよ。

山岡 ： それはイヤホーンの先を振動させるってこと？

荒井 ： そうそう。ギターアンプとか通してすごい増幅かけて。逆にいうと、ノイジーになるわけよね。ちゃんとしたマイクよりも音が歪んで面白い。それを口に中に入れて朗読しながら、口の中に詰めていく。詰めながら、また朗読する。結局、最近の作品と同じパターンなんだけどさ。そのときは、吉本憎し、みたいな感じでやったわけ。本を破るってことも、俺にとっては大変なこと。お札を破るのもちょっと難しいけど、俺には本を破るってことに、そうとう抵抗感があるんだよ。だってさ、子供の頃から本は大事だって思

ってきたんだから。だけど、こんな本だったらいいやみたいな感じでさ。それが窒息芸の始まり。

山岡 ： そうだったのか！

荒井 ： 窒息芸っていうのはどっかで窒息しそうな音を聞かせるっていうのが一つ意味としてあったんだけど、《Happy Japan !》で初めて、音じゃなくて行為を見せるっていう方向にいったの。音で窒息しそうだっていうより、実際に自分の身体が窒息しそうになってるいる方がインパクトあるし。音を増幅するよりも小さい音だけど、ウグウグウグウグいってる生音の方が効果があるんじゃないかみたいになった。

山岡 ： 吉本隆明の本を食べるやつはタイトルあった？

荒井 ： それはない。というのは、それは「赤木電気」っていうグループでやってたから。赤木電気は、1983年に解散したので、その頃までの作品。

山岡 ： その後、「地下室のために」というシリーズがあるね。

荒井 ： 1986年の「地下室のために」っていうのは、慶応大学の音楽サークルがあって、そこでやった。その人たちが企画したイベントで、出る人は一組だけなんだよね。谷川まりと桑原正彦と3人でやった。

山岡 ： その時、窒息系した？

荒井 ： その時は違う。それは慶応大学の中に、廃墟みたいな地下室があったんだ。今は、もう何も無いのよ。そこで夜、暗い、電気はついてるんだけど、裸電球2つぐらいの所で。

山岡 ： 学生が勝手にやってたの？

荒井 ： いや、慶応大学の学生がちゃんと借りてると思うんだけど。そういう使われてない倉庫みたいな所で。「赤木電気」のときに、俺には持ちネタがいくつかあって窒息系と、あともう一つは、浴衣着てサックス吹くっていうのがあって、それをやったんだ。

山岡 ： わっはっは（笑）。

荒井 ： サックスっていっても3音くらいしか出ないわけよ、4音とか。

山岡 ： 演奏してんじゃないんだよね、つまり？

荒井 ： そうそう。その時は演奏と思ってたんだけど、今考えれば演奏じゃない。

山岡 ： 曲をやってたわけじゃない。

荒井 ： そうそう。曲をやってるわけじゃない。音が出るのに当たったら、ずっと吹くとかさ。ピコピコやってたら、そのうち1つ音出たら、あっ、ここで音でんだって思って、ブーとかやったりさ、そんな感じ。浴衣スタイルっていうのは割と多かったんだよ、その時代の俺は。

山岡 ： そうなの？

荒井 ： だから音楽関係者からは、最近でも、浴衣着ないのって聞かれる。やっぱり気持ち悪かったみたいで記憶に残ってるんじゃない（笑）。どうして浴衣を着たかというと、中学生時代にで見たんだけど、精神病院の人たちが午後3時くらいに散歩すんですよね、20人くらいで。白衣の人が前と後ろにいて、その間を浴衣みたいの着てボーって20人くらいが小さい川の土手を歩いてるわけ、学校で授業受けてると、窓から見えてた。毎日だから、けっこうインパクトあってさ。そのイメージが俺のダメ系のサックスと、つながった。

山岡 ： なるほどね。同じタイトルで、ニューヨークでも、行なったんですね？

荒井 ： 「エーマイカ(A-Mike)」っていう場所で、そこも地下だったので。エーマイカっていうのは、セントマークスっていうイーストビレッジと、SOHO の間くらいにあった。レストランもいっぱいあって。左翼系の本屋さんとか、あとノイズ系のレコードあつかってる中古のレコード屋さんとか。CBGBっていうあの有名なライブハウスもその近くにあったりとか。そういう若い人たちとか、ちょっととんがってる人たちの行くような場所、今でもそうだと思うんだけど。そこの一画の地下室が、「エーマイカ」って言って、即興の音楽家たちが借りてた。ライブするのとか、ミーティングとかするために。

山岡 ： 滞在中の、三枝さんがセットしてくれたんだ。

荒井 ： 違う。俺から。太鼓叩きの風巻さんっていう俺の友だちがセットしてくれた。彼は、ニューヨークの「ニッティング・ファクトリー」っていう所で違法に働いてた。たぶん1年間くらいそこで働いてた。俺が三枝のところに居候してて、再会した。風巻さん、俺のことあんまり好きじゃなかったみたい。ていうか、音楽家として認めてないわけ。彼はほんとに音楽家だから。即興の演奏家だから。なんか、胡散臭い奴と思われてたんだよ、俺は。ただ、人間的な付き合いは問題ないんだけど、なかなかさ、「ニッティング・ファクトリー」に出してくれとは言えない。それはちょっと無理だろうなって、俺も思うから。「ニッティング・ファクトリー」ってあの頃、本当に即興の演奏家とか、ジョン・ゾーンとかやっていた場所。即興でも新しめの即興とか。ほんとに今をときめく人たちが、その頃まだ有名じゃないときにやってたような場所。ジー

ナ・パーキンスさんとか。だけど、ある時、ぶっちゃけ、酔っぱらってるときに話してたらさ、「そんなにライブやりてえのか？」って言うわけ。「せっかく来てんだから、やりてえよ」って。「じゃ、ちょっと聞いてやるよ。」とか言って。そこで紹介されたのがジーナ・パーキンスっていって、チェロを弾いてる女の人で。ちょっと年下かもしれないけど。で、その人たちが運営してる「エーマイカ」っていう地下室でライブやってもいいよって話になったの。

山岡　：　お客さんってどんな人が来たの？

荒井　：　サークルあるじゃん。アナキストとか、即興音楽やってるやつとか、左翼系の人とか。そういう人たちの溜まり場的な場所だったから、お客さん2～30人は来たと思うんだよね。その辺がニューヨークって面白いよね。溜まり場みたいなものを自分たちでつくって、よくわかんない奴でもやってもいいよみたいな。で、やったら、やったでちゃんと見に来てくれる。主宰者の1人であるジーナ・パーキンスもちゃんと観に来て、笑ってるだけだったけど（笑）。笑ってるだけっていうか、何も言わない（笑）。こっちも聞けねえしさ（笑）、どうだったとかなんてさ。

山岡　：　でも、やって嬉しかったというか、良い経験になった？

荒井　：　そりゃね、やっぱりね。俺は、ほら、人が見てなんぼの世界で生きてるから、その頃から。もともとパフォーマンスアートっていう風に考えてたけど、自分の中ではロックとかパンクとかはちゃんとできないから、その代わりにこれやってるって感じなんだよね。だから、やっぱり人がそこに来ていて、「現場の力」じゃないけども、観てる人の波動みたいなものがこっちに来るっていうのが基本的。だからビデオでパフォーマンスやったりとか絶対しないと思うんですよ。

山岡　：　そうして、「現場の力」になったんだね、その時に、2人は。その名前はニューヨークで生まれたの？　荒井さんが考えたの？

荒井　：　いや、当然、三枝ですよ。

山岡　：　なぜ、当然なの？

荒井　：　「赤木電気」って命名にしても、俺は、そういうウィットネスとかないから。

山岡　：　なるほど。「現場の力」って、いい名前だと思ったけど、三枝さんのセンスだったのね。

荒井　：　そうそう。三枝のセンス。「現場の力」っていうのは、グループ名じゃなくて、現場にある気分というか、そういう場を体現するみたいな、そういう考え方なんで。現場があって、その現場の中から吸い上

げて、何か発散するみたいな。だから、それは3人であっても、4人であっても、「現場の力」って言っちゃえば、そうなんだけど、基本的に俺と三枝がいないと成り立たない。だから、「現場の力」は俺と三枝の二人のときもあるけど、谷川まりがはいったり、桑原正彦が入ったり、田中トシが入ったりする。

山岡 ： なるほど、わかった。作品というか、それを作るフォーマットみたいな。

荒井 ： そうそう。一応ミーティングして、どんな感じでやるか話し合うけど、基本的には「現場の力」ってことで練習するわけじゃなくて、それぞれの踊り、ダンサーはダンサーで一つのテーマみたいのがあるんです。たとえば、「多喜二」とかいうテーマあったりとか。「多喜二」といえば「小林多喜二」なんだけど。そういうテーマがあって、このテーマに沿うようにっていうミーティングで。

山岡 ： 実際に「多喜二」のときもあったの？

荒井 ： あった。「多喜二」の本を口の中に入れてくっていう。

山岡 ： また、口に入れたの？ わりと口に入れたいんですね。

荒井 ： だから、肛門衝動って言われてた。幼児的な。幼児って口の中に何でも入れてくじゃん。俺の音楽の友達とかが「荒井、幼児願望だよね」とかさ。自虐的っていう前に幼児的って呼ばれてたからね。「肛門期だろ、おめえ」とかさ。

橋本 ： それ、口唇期ではないですか？

荒井 ： あ、そうだ。そうだね。それで「赤木電気」から、「現場の力」になったのは、もう三枝の中でも、他の三人はもうやらないだろうというのがあった。荒井と2人でやるってことで、音楽という要素よりも、もうちょっと広げた考え方でやろうと。

山岡 ： 三枝さんはなかなかの人ですね。

荒井 ： 三枝とはけんかしたこともあるし、「ニパフ」関係のことで10年くらい会わなかった時期もあるんだけど。けっこう助けてもらってるのよ。

山岡 ： でしょうね。ところで、プロフィールに、1988年9月15日って、日付がちゃんと書いてある作品で「空、東京」っていうのがあったんですよ。これは、どういうものですか？

荒井 ： これビデオもあるけど、「現場の力」ではなくて、初めてだと思うんですよ、ソロでやったのは。常

に誰かとやってたから。

山岡 ： どんなことしたんですか？

荒井 ： 忘れたけど、サックス吹いてたような気がするけどね。

山岡 ： どこでした？

荒井 ： 中野のテルプシコーレですね。

山岡 ： 荒井さんは、「赤木電気」より後あたりから、パフォーマンスアートをやっているという意識だったのかな？

荒井 ： それがね、その頃、ヨーゼフ・ボイスとかパフォーマンスが紹介されるようになったけど、日本の美術手帖でのパフォーマンスっていうと、如月小春とかでしょう？そういうのもあって、俺はヨーロッパやアメリカのパフォーマンスアートっていうのを、意識して勉強した。それから、日本の場合、「概念派」って言われる、ようするに松澤宥系や関西の「プレイ」とかそういう連中のこととか、イベントっていうのを、勉強した。

山岡 ： 美術手帖で？

荒井 ： うん。ビデオとかないわけだからさ。けっこう衝撃的な写真があるわけ。風倉匠がここに（肩に手を置く）焼き鏝（こて）あてた話とかさ、60年代に。

山岡 ： アメリカのって、もしやローリー・アンダーソンとか？

荒井 ： ローリー・アンダーソン、あれはパフォーマンスだと思ってなかった。

山岡 ： だよね。

荒井 ： あれは音楽でしょ、みたいな。

山岡 ： じゃあ、だんだん自分がやってるのがパフォーマンスって呼ぶのかなって思いながらやってたのが、この80年代後半？

荒井 ： 俺のは音楽と呼べないから、もうパフォーマンスでいいと思ってたけど、でもパフォーマンスア

ートなのかどうかわかんない。アートなのかどうかわかんない。

山岡 ： そうか、なるほど。

荒井 ： パンクのことをアートと言うかっていう問題と似てて。自分の中でパンクみたいなものだと。音楽的なもので、パンクロックみたいなものをやってると。あとノイズみたいな、ただ、叫んだりとか。そういうことが、そこにアートがつくのかどうか自分ではよくわかんなかった。

橋本 ： ご自分のことを、パンクだって、すごくよくおっしゃるんですが、パンクの定義ってなんでしょう？ぼくもあまり音楽史詳しくないから曖昧なところもあるんですけど、パンクロックってどういう音楽ですか？

荒井 ： ロックの中から、プログレッシブロックみたいのが出てきて、たとえば、LP の一面で一曲だけとか、それから、クラシックみたいな感じみたいになってきたりしたんだよ、プログレッシブは。たとえば、キング・クリムゾンはけっこうジャズっぽいんだけど、けっこういい感じでまとまりつつあったというか。

山岡 ： クラシックみたいに、ある意味、まとも志向になってきた？

荒井 ： そう、一方、パンクっていうのが全く逆の位相で出てくるわけ。歌も下手くそだし、ギターのコードも1個か2個しかないけど、でも直接的に響きかけてくるみたいな。たとえば、その前のエルヴィス・プレスリーとかビートルズとか T・レックスだとか、そういうものと比べても、相当、はちゃめちゃにおかしいんだ。あと、ファッションの問題。あの独特な。それから、生き方の問題。でも、実はファッションの問題と生き方の問題は相当脚色されてるんですよ。それで、UK のパンクの時代って、「シチュエーショニスト」だった奴がプロデュースしている。けっこうあざとくやってるわけよ、実は。あざといとは言わないかもしれないけど、逆の意味での商業主義みたいに。「シチュエーショニスト」っていうのは、人間の欲望みたいなものの流れみたいな、都市の中の欲望の水路みたいなことを考えてるわけじゃん。

橋本 ： マスメディアには、ある種アンチな姿勢。

荒井 ： そうそう。たとえば、道路に、車とかが走ってるのは、目に見えるんだよ。それはどちらかといえば、マスメディア的なもの。でも、下水道みたいなものって見えないんだけど、本当に大事なものが流れてく。大事っていうのは、汚物とか捨てて見たくないものが流れてる。「シチュエーショニスト」っていうは、フランスの60年代の革命の時に、そういう政府とかが押し付けてくるスペクタクルなものに対して、その裏のスペクタクルっていうか、その下水道的な水路、人の欲情がどういう風にコネクトしていくかみたいな、そういうことを考えてた連中。

橋本 ： で、そこに参加してた人が UK のパンクバンドのプロデューサーになったんだね？

荒井 ： うん、そう。「シチュエーショニスト」の下っ端の方なんだけど。若い奴だから。だけどフランスの「シチュエーショニスト」のメンバーであったことは確かなんで。それは後からわかってくるんだよ。「セックス・ピストルズ」の内幕、裏にいた人として。それで、逆にアート界で「シチュエーショニスト」と「セックス・ピストルズ」みたいな視点で企画展が行われたりとか、あったんだよ。

山岡 ： 荒井さんの、考えが近いってこと？

荒井 ： うん。アティチュード（態度）っていうか、そういうやり方みたいなのが。だから、パンクの人がモヒカンにしたり、鼻にピアスしたりするでしょ？それと似たような感じね。そういう格好はしないけど、気持ち的にはそういう感じみたいな。いつ死んでもいいんだぞとかさ。だから客に嫌われてもいいんだぞとか。

山岡 ： そこで、プロフィールを見ると1988年に、ついに具体的なポリティカルなテーマが出てくるね。『夏の花、広島、死にゆく昭和天皇』。場所も、特徴的だね、東大駒場寮庭。

荒井 ： それはね、自分の中で、左翼的な問題を、なんとか自分の作品と結び付けられないかって、ずっと考えていたわけよ。そして、常にマイナーな音楽界っていうのはどっちかって言うと左翼性が強かった。アンダーグラウンド系の人。保守的な奴ってあんまりいない。すごくスノッブな連中もいるけど。そのスノッブな奴らでさえ、自民党好きだとか絶対言わないスノッブなんだよね。ようするに革マルのこともわっかてるし、中核のこともわかってるけど、スノッブみたいな。もう、アンダーグラウンド界っていうのは、ノンポリの人であっても、基本的に左翼的なスタンス。それで、天皇が下血騒ぎを起こして、亡くなりかけてる時、毎日天気予報みたいに天皇が何ミリ下血しましたみたいなニュースが出て、マスコミ報道が、わけわかんないことになってた。エックスデーという言葉が出ていた。天皇が亡くなる日のことね。で、ある新左翼系のイベントで、エックスデーをぶっ潰せみたいなのがあった。そういう企画があるからやらないかって言われて、参加したんだよ。園田佐登志さんと、三枝の3人で。三枝が延々と日本国憲法を朗読し続けた。延々というか、全文読んでたのか、どこかのフレーズをずっとやってたかわかんないけど。あと、園田は、発音練習の英語とかフランス語だとか、そういう語学ソノシートをコラージュしたのをずっと流してた。俺は小麦粉被って、その後赤ペンキをバーッと被る。そして、『夏の花』（原民喜著）っていう、原爆の話の文庫本を朗読しながら、口に入れていく。

山岡 ： やはり、口に入れたんだね。

荒井 ： それを12月の終わりぐらいに、東大の駒場でやったんだけど、次の年、1989年1月4日に、死んじゃうんだよ、天皇。2月に、亡骸を八王子に運ぶ。それが昭和大喪って日。新宿御苑に人集めて通夜みたいなことやって、それから御苑から八王子まで運ぶ。その間の3日間、歌舞音曲禁止。それにぶつけて、エックスデーの時と同じ主催者が、早稲田のキリスト教会館で「昭和大喪」っていうイベントをや

った。「たいそう」の「そう」は葬儀の喪じゃなくて、鬱病、躁病の躁。今度も出ないかって言われて、やりますって言った。《昭和大噪/昭和大喪に抗して》というの。

山岡　：　その頃、園田さんって人とよくやってたんだね？

荒井　：　そうだね。その時は川仁宏さんも出てたんだよ。この頃は、こういう所のイベントに出るようになってから、竹田賢一さんとか、大熊ワタルさんとか、ずいぶん親しくなった。

山岡　：　顔が広くなった。

荒井　：（笑）こいつは音楽家じゃないけど、なんかやってるんだなみたいな認知はされてきたかのも。ただの浴衣着てサックス吹く人じゃなくなってたっていうか（笑）。

山岡　：　この頃は霜田さんはどうしていたんだろう？

荒井　：　彼は、これには出てないけど、東ヨーロッパとか行くようになってた。その頃から霜田氏はドメスティックな活動がなくなってくるんだよ。俺は霜田氏が抜けていった後、その界隈と付き合うようになった。霜田氏はどっちかっていうとアーティストの方に行く。霜田氏が釜山青年ビエンナーレ（1990）に参加したあたりからかな？ちなみに、俺はそのビエンナーレに銅版画で参加した。とにかく何かのきっかけかで、霜田氏はドメスティックな活動をあんまりしなくなった。やってもソロの活動。そういう感じになっていった。

山岡　：　荒井さん自身は、けっこう続けてテルプシコーレとかキリンプラザとか、いわゆる、上演をする場所で、パフォーマンスをしていますね。こういうのは自分で決めて？

荒井　：　キリンプラザは版画の個展をやってくれたんで、パフォーマンスさせてって言って、やったということ。テルプシコールとかは、向こうの方から言ってくるわけじゃなく、全部自分で借りて、自分でチラシ作って、自分でチラシ撒いて。その時は銅版画の作品じゃなかったけど。とにかくもう、疲れまくりましたよね、人を呼ぶっていうのは。

山岡　：　自主企画だからね。

荒井　：　葉書とかそういうのを100人くらいに送ったりしてた。来るか来ないかわかんないけど、有名な人とかにも送ったよ。でもさ、けっきょくフタ開けたら自分の友だちしか来てない（笑）。自分の友だち、出演者の友だち。だから、疲れたよ。タンザニアから帰ってきてからは、もう、そういうの嫌だなと思った。タンザニアの件は、後で話す。

7.「仁王立ち倶楽部」

橋本 ：「仁王立ち倶楽部」の話ってまだしてないですよね。その同人誌の話、聞かせてください。

荒井 ：「仁王立ち倶楽部」っていうのは、美学校に行ってる頃から、やってた。 85年から89年くらいまで。

山岡 ： 美学校はそもそも何年行った？

荒井 ： 実は助手やってたから、学生の時代を入れて、5年以上行ってんだよ。81 年から、87 年まで。助手だと授業料払わずに、スタジオは使える。それで嶋田美子さんとけんかしたりとか。とりあえず、同人誌作るきっかけになったのは、アリス出版という自販機本屋でバイトしたんだよ。ビニ本じゃなくて、自販機本。知ってる？ こういう本です（出してきて、見せてくれる）。表側は安全なんだけど、裏側がいやらしいの。昼間は自販機に銀色のシートみたいのが貼ってあるから、見えないの。夜になると中に電気ついて、外から見えるようになる。アリス出版のバイトに応募したら、「君、都立大卒業して、ここでバイトするの？」って言われたけど、「ぜひ、お願いします」って言って。それで、とりあえず1年契約ってことで、バイトに入ったんだよ。

山岡 ： なぜ、そこでバイトしたかったの？

荒井 ： したかっていうか、他に仕事がなかったっていうのもあるし、バイト代が良かったんだよね、たぶん。で、編集だから面白いかなと思って。

山岡 ： 卒業して就職っていう発想が、そもそもなかった？

荒井 ： 卒業したけど、5年かかって。だけど、美学校にも行ってるわけじゃん、それでも。それで個展とかしようと思う頃だからさ。

山岡 ： 大学行って、美学校も重なって、美学校でも助手になったりするから、学生終了時期がはっきりしてない。

荒井 ： そうそう。そして、高額のバイトもしてたわけじゃん。美学校に入れるくらいの。でも、途中でクビになっちゃった、バイトは。あんまりやばかったから（笑）。毎日、午後1時とかに出勤するようになってた、しかも、いつも酒臭い息で。最終的にはクビ。「言いにくいんだけど、辞めてください」って（笑）。それで、アリス出版に入って、「とりあえず、君は1か月に3つ本を作ってくれ」って言われた。「ＣHRIS」って雑誌。

1冊は、こういうふうに中の方が荒いザラ紙で文章とかが入ってて、グラビアは少ないの、これ400円。で、こっちは全部グラビアで700円。同じように販売機に並んでいる。実は荒井先生、ちゃんと出演してたりします（爆笑）。作れと言われた2冊っていうのは700円のほうで、1冊は安いやつ。で、3冊作る。基本的に女優さんとカメラマンとぼくとで、あと男優さん、4人で作るの。月2回女優さんと男優さんとカメラマンと俺とで、ホテルに行ったり。

山岡 ： その辺の話、圧縮してもらえません？

荒井 ： うん。アリス出版っていうのは10年以上こういう仕事してるから、今まで出演した全女優さんの写真のポジが入ってるの、でかいキャビネットに。安い方は、そのポジを使って、適当に作れって言うわけ。この女優さんたちは無断でずっと使われ続けているから、大変なんだけどね。で、安い方は真ん中のページあたりは、何ページかは、文章なわけよ。ここって写真入れても紙が悪くて、よくわかんないから、エロ話とかエロ漫画を入れるページなわけ。「不倫奥さんたちの座談会」とかさ。それからどこの風俗がいいかとか。そして、この部分については20万円編集費あげると。漫画家のリストとか、それからインチキな文章書く人のリストみたいなのくれて、この人たちと連絡取って書いてもらえと。桜沢エリカとかも、リストに入ってた。今、桜沢さんは有名になってますよね。「これ自分でやってもいいんですか？」って聞いたら、「いいよ、荒井が全部書くんでも、20万出す」と。その30ページ分くらいに、いやらしい記事や、いやらしい漫画を自分で描けるんだったら、自分でやっていいと。それで「いやらしくなくちゃダメなんですか？」って聞いたら、「別にいやらしくなくてもいい」と。どうせみんな写真でオナニーするわけで、このあたりの文章読んでするやついねえからと。それがきっかけで、『仁王立ち倶楽部』っていうのを中に入れることにしたわけだよ。これが1号目かな。で、この部分は全然エロじゃないの。

山岡 ： それ、ばれないの？というか、怒られないの？

荒井 ： いいんだって。こんなとこでオナニーするやつはいねえんだから、何か、書いてありゃいいと。

山岡 ： なんでもいいから、ページ数稼げと。

荒井 ： それで、音楽家の竹田賢一さんとかに頼んだりしたわけ。1人5000円だったか。だいたいそんな感じで、最初は、原稿料も出してたよ。美学校の校長の今泉さんや、真木画廊のオーナーの山岸信朗さんとかにも頼んだりして、美術評論とかを入れたの。で、俺が1年契約だから、1年間のつもりでやってたんだけど、7号目か8号目か忘れたけど、「すいません、雇えません。うち危なくなっちゃったから」と。

山岡 ： 会社の方が、終わっちゃったのか。

荒井 ： そうそう。「来月からもう来なくていい」って。そしたらさ、今泉さんとかさ、あの人は暇だからね、

12号までってことだったんで、12号までの原稿、全部書いてあったんだよ。一方、竹田さんとかは、遅筆で、1週間くらい待つんだよ。家で待ってたら、奥さんが「カレーライス食べなよ」とかって出してくれたり、「駄目みたいだから。明日は必ず」って(笑)。

山岡 ： 編集者らしい感じだね。

荒井 ： そうそう。竹田さんはそんな感じだったけど、ここに書くのが楽しみの俺の友達的な奴も他にいるわけよ(笑)、今泉さんみたいに。イラストレーターの久住卓也さんが、「仁王立ち倶楽部」って名前考えたんだよ。で、ぶっちゃけ、続けてくれみたいな話になったわけよ。たとえば、当時、先行している、そういうミニコミであれば、作曲家の高橋悠治さんたちのやってる「水牛通信」。すごいぺらぺらのやつ。例えば、レコード屋さん、ラ・モンテ・ヤングとかを売ってるようなレコード屋さんに行くと置いてあった。ワープロとかが普及し始めた頃だったんだ。誰かが「水牛通信」みたいな感じでやってくれよ」って。「そうだな。確かに12号までっていう約束だったから」そういうことで、安易に始めちゃったわけ。その頃、俺まだワープロ持ってなかった。そしたら友達がワープロ持ってて、PC98の。よしこさんっていう、その頃俺が結婚してた女性が、ブラインドタッチできたんだよ。それで、みんなから原稿もらったやつを、よしこさんが俺らの友達んとこ行って打って。それを簡易オフセット印刷で印刷して、10万円くらいかな、500部作って。毎月出すって予定で、12号までは毎月出してたんだけど、その後はちょっとずれてくんだけどね。でも、一応アリス出版で8ヶ月働いたから、編集はできるわけだよね、俺もね。レイアウトとか。

山岡 ： ここに原稿も書いているよしこさんと、結婚してたの？

荒井 ： そう。もうその時にはすでにフェニミズムに目覚めてる。「結婚前後のみな様へ」っていう原稿。

山岡 ： でも、その時点では、まだ別れてない？

荒井 ： 別れてない。結局離婚して、しょうがないからってワープロ買ったんだよね、家に。簡易オフセットの「仁王立ち倶楽部」に移っていった。アリス出版のがなければ、やってなかった。つまり、積極的に同人誌やろうと思ってたわけじゃなくて、バイトしてこういうの作っちゃったから、後始末的にそっちに移った(笑)。でも、すごい大変。本屋とか持ってくわけだ、一応。いいところは、三省堂とかは置いてくれたんだよ。でも、置かない所もあるし。紀伊國屋書店とか。三省堂も、実際はすごい嫌がってた。こっちは個人だから、お金のやりとりがめんどくせーじゃん。小さい本屋だったら、割といい感じだったんだけど。それでも、三省堂はそういう同人誌的なものも、詩とかで扱ってるから、それと同じ扱いで現金取引でやってくれた。

山岡 ： ミニコミブームだったよね。

荒井 ： 去年（2021年）かな、美術手帖の80年代特集で、この「CHRIS」について取り上げられてた。とてもすごい雑誌だったとかって書いてあった（笑）。それで、俺の名前も出てて。でも、俺には一言の電話もなかったんだよ。まあ、本当に小さい扱いだったから。アリス出版をやめた後の俺の作った白黒の方は、500部刷って、たぶん100部くらいは流通してた。でも、アリス出版で作ったのは倉庫に行ったから、書いた人の分×5冊取ってきてただけで、その5冊すら残らないこともあった。売る分は自販機に入れてたからね。純粋に自動販売機で買う人しか買えないわけ。だから、流通なんかしてない、完璧に。それなのにさ、美術手帖では、さも流通してたかみたいな書き方だった。一応、自販機本って書いてあるから、本当のことではある。違うよって思っても、どうも言えないからね、美術手帖にね。でも誰も見てない幻の本とか書いてもいいと思った、実際に幻だからさ。なぜ、美術手帖に載ったかっていうと、真木画廊の山岸さんが亡くなって、山岸さんの資料っていうのが全部、新国立美術館に収蔵されたのよ。たぶんそこの収蔵の中にこれらも入っていたんだと思う。それしか考えられない。山岸さんは、「もの派」をサポートしていた有名なギャラリーの人。「もの派」っていうのは、穴掘ったりとか、天井板取って、そこから梁みたいの出して、ぶら下げたりするから、普通の貸し画廊はそんなことはやらせないわけじゃん。「もの派」のやつらはさ、画廊をプールにしたりとかするからね。それをさせてたところの1つが真木画廊っていう神田の貸し画廊。その山岸さんには、ギャラリーに来た変な作家たちのこととか書いてもらっていたんだ。

8. 美学校と大学院の挫折、海外青年協力隊

荒井 ： そんな頃、俺は、とある美大の大学院に入ることになったんだ。俺は 87 年に美学校の助手をやめているけど、その後も、しょっちゅう、美学校には顔を出してた。その頃、吉田克朗さんの友達の、彼より少し年下の B さんって版画家もよく来てた。彼は、ある美大の大学院で教えていた。その B さんがあるとき、「うちの美大でね、ベニヤ板 1 枚、1．8m×90cm サイズの銅版を刷れるプレスを買うんですよ」「そりゃ、すげえなあ。じゃあ、荒井とか、刷らしてもらえばいいんじゃないの？」って克朗さん。

橋本 ： ほう。

荒井 ： でも、B さんは、「いや、学生じゃなきゃ無理だよ」と。それで、克朗さんが、「荒井が、学生になっちゃえばいいんじゃない？」って言いだしてさ（笑）。「いやでも俺は、美大とか行ってねえし」とか言ったらさ、「いやぁ、普通の大学一応出たろ？試験さえ受けたら大学院に入れるぞ。俺応援してやるよ！」と、なんかわけわかんないこと言われて、「お金高いんじゃない？」って聞いたら、「2年間だから200万ぐらいで何とかないんじゃないの？」と。その頃俺は、すでにアリス出版はやめてたけど、校正の仕事のフリーランスになってたんで、ある程度お金もあったんだ。それより、まあ、俺には上昇志向があるわけよ。

山岡 ： おおお。え？パンクなんだけど、上昇思考があるんだ！

荒井 ： そうそう。やっぱり田舎の小僧だからさ。それでいろいろ考えて、俺、受けてみようかなって言うと、克朗さんは、「よし、多分何とかしてくれんじゃないの？」と。何とかしてくれるってやばいな、とか思いながらさ(笑)。

橋本 ： (笑)

荒井 ： でもまあ、受けてみることにしたんだよ。作品審査とデッサンというのがあって、「俺デッサンなんかやったことないけど」って言ったら、「なんかちょっこちょこっと描いときゃいいんだよ」って言われてさ(笑)。作品審査は、B さんが「お前の作品全部、先生達に見せてあげなよ」とかって感じ。結局、特別に教室2つ借りさせてもらって、でっかい作品全部貼ったのよ。なんだか、個展みたいなことやっちゃったわけ。それはもう相当インパクトあったみたい。デッサンについてはどうしようかなと思ったんだけど、ちょこちょこっと描けって言われても、ちょこちょこっとも描いたことない。裸婦デッサンでモデルは女の人だったんだけど、しょうがねえなと思って、口に鉛筆くわえて、描いた。でも他の受験している人は本当に美術大学から来てる人たちで、俺以外の7、8人は、みんな真面目にやってた。俺は落ちてもいいやぁと思ってたけど、結局でも入れたんだよ。俺の代わりに 1 人落ちてるわけだから、かわいそうにね。

山岡 ： へ～

荒井 ： そうやって、その美大の大学院に入った。ところがさ、B さんって、大学では、ものすごく偉そうにしてて、俺が気軽に「B さん～」とか言ったらさ、「B さんじゃないだろお前！B 先生だろう」とかって言うんだ、で俺は「はい、すいません、先生」と。それでも、1 年半ぐらいは B 先生となんとか仲良くやってたんですよ。なんか俺が 1 人残ってたりして作業してると、「荒井ちょっと飲みに行くか？」とか言う。でも、飲みに行っても割り勘でさ、ケチな男だなって思った(笑)。「割り勘ですか？」と聞いたら、「割り勘だろう！」とか言われて、俺は3000円くらい出した。そのあたりから、なんかこいつ、なんか変な、いやな奴だと思い始めたんだよ、だんだんだんだん。決定的だったのが、ある時、学生とか、助手とかで総勢20人ぐらいで、飲みに行った時。一次会は、いつものように、割り勘。二次会もそう。結局、夜中の2時か3時ぐらいの三次会ぐらいときに俺が切れちゃって、B 先生に向かって、「お前のやってることは現代美術じゃねえだろう」的なこと、言っちゃったわけよ。

山岡 ： けんかの仕方が……

荒井 ： もう酔っ払ってたからさ。B 先生は、なんかもう完璧にさ、偉そうに何かそういう現代美術の話とかしてるわけ、学生に。

山岡 ： うん、ちょっと流行作家ぽかったよね。

荒井 ： そうそう、それでなんか切れちゃって。「僕は、先生の作品は……かっこいい版画とは思いますけど、あれは、現代美術かといえば現代美術ではないような気がする…」って言っちゃった。「そういう言い方はあるか！」ってことで、けんかになってさ。これ以上話しても無理だなと思ったから、「ここも割り勘ですよね？」って言って、払って帰った。次の日学校行ったら、助手の人が、「荒井さん大変だよ、大変だよ。今から謝りに行った方がいい、昨日のことすごく怒ってますよ、荒井さん帰った後、もうあいつはもうクビだとか、言ってたみたい」 それで、「昨日はあんなことを言ってすいませんでした」って言いに行ったら、「その言い方はなんだ！」とか言ってさ、「お前の顔なんか見たくない。お前はクビだ！即刻やめろ」みたいな話になった。なんかもう一週間ぐらいは顔も合わしてくれないし、なんかこれ本気で怒ってるなと思って、克朗さんに電話したわけ。ちょっとトラブったって言ったら 「聞いてます。お前なんかやらかしたみたいだな」とか言われた。

山岡 ： そう！！

荒井 ： 何か理由を言おうと思ったら、「もう駄目だな。やめなさい」て言われて、克朗さんからも切られた。何か言おうとしても「いや聞きたくねえ」みたいになって、お前もう終わったね、みたいな感じ。今泉さんに相談したら、「克朗さんにそう言われたらもう無理だ」と。10月ぐらいだからもう卒制みたいなのを、制作し始めてた。「そういう問題じゃなくて、もうやめるしかないよ。荒井くんね、やめるしかないんだこの状況は、やめないと大変面倒くさいことに、逆になる」 法律的には何かできるかもしれないけど、そういう問題とは違うからみたいなさ。

山岡 ： 実際は、なんかもっとキツいこと、言ったんだろうな、荒井さんは。

荒井 ： それでやめることになってやめたわけよ。だから大学院は中退になるんだけど、それで一番辛かったのは、克朗さんから切られたっていうこと。大学院やめるのもちょっとショックだったんだけど、せっかく 1 年以上やってたわけだから。だけどね克朗さんと、コンタクトが取れなくなったっていうのが何より一番ショックだった。

山岡 ： 優しい先生っぽかったもんね。

荒井 ： そういうことがあって、結局、結構落ち込んで、それでもう。なんか日本の美術界って最悪だなとかさ。

山岡 ： そこに行くのか。極端だな。

荒井 ： もうなんかもういい、何も信じられなくなったっていうかさ。

山岡　：　落ち込むんだね。

荒井　：　落ち込むよ～、そりゃ。だって俺なんかさ、大学院に行って、もう上昇志向極まってるわけ。だから偉そうにさ、友達の桑原正彦の絵を批評したりとかしてたんだよ。桑原は、荒井が一番調子こいてる最低の時期だったって、言ってたな。

山岡　：　そうか、やっぱりやめて良かったね。

橋本　：　(笑)あはははは。

荒井　：　俺もなんかさ、頭ん中でさ、大学院卒業したら助手になって、今度は助教授かな～とか何かいろいろ妄想してた。

山岡　：　なるほど～。

荒井　：　どっかの大学教授になるかな～とか、いろいろ馬鹿なこと考えてたんだよ、その頃。そういうのって如実に態度に出るじゃんか。エロ本作ってたくせにさ～。それでなんかもう日本にいてもしょうがねえみたいな気になってきて。

山岡　：　じつに、極端だな～。

荒井　：　そういう日本なんかもう嫌だと思って、なんかどっか行きたいとか思った。旅行に行きゃよかったんだけど、旅行に行くっていってもどこに行っていいかわかんないし。その時、青年海外協力隊のポスター結構貼ってあっるのを見たわけ。それでまあ、受けたのよ。そしたら1回駄目だったんだけど、最終的に半年後にオファーが来たの、協力隊から。1992年だね。結局8月から3か月間、訓練を受けなくちゃいけない。訓練は広尾の訓練所で、そこに住み込み。

山岡　：　隊っていう言うからには、やっぱちょっと軍隊っぽい？

荒井　：　そうっすね、朝5時半起床で、6時から6時半まで、ジョギング、広尾の街の中でジョギング。30分ジョギングしてそれで朝飯食って、ちょっと休憩して8時半ぐらいから授業。午前中は語学の授業、僕の場合、タンザニアなんでスワヒリ語。英語圏行く人は英語、フランス語圏行く人はフランス語。

山岡　：　自分でアフリカって決めたわけ？

荒井　：　オファーが来た時点で決まってた。もう行ける話として出てるわけ、具体的な話として。だからすぐ3ヶ月、仕事休まなくちゃいけないじゃん、3ヶ月の訓練終わったら、1週間から2週間後に現地に行くって話になってるわけ。もう有無を言わせずそういうかたち、最初から言われるわけだよね。だから、たとえば会社から派遣されてる人は会社がそれを OK にしてるから大丈夫だけど、そうじゃない人たちは、その辺の仕事のこと、家族とか、たとえば子供がいる人もいるわけだから、そういう人たちは、その辺のことを調整しなければならないわけ。

山岡　：　校正の仕事を休んで？

荒井　：　そうそう、仕事はほとんど問題ない。あとは家、借家。その頃友達が多かったんで、若い友達がいて、2間あったから1間を全部きれいにしてそれで、家賃半分負担ということにした。

山岡　：　荒井さんは、その版画を教えることができるっていうので申し込んであったの？版画を教えてほしいところということで、アフリカがあったんだね。

荒井　：　そう。そして、あと職場は、戻ってきたらまた雇ってください、みたいな感じで良かったんです。おふくろと親父は、なぜか、ものすごく悲しんだけど、やっぱりしょうがねなみたいな感じで。30歳過ぎてるのにさ、仕事もしないで、大学院とか通ってるからそうなんだ～と思ってたら、急に今度アフリカ行くって話でしょ（笑）。わけわかんねぇだろうと。それでもまあ、説得して OK になった。

山岡　：　訓練は面倒くさいなと思いながらも、とりあえずやったってことですね。勉強したり走ったりとか。それは平気だったのかな…

荒井　：　うん。そんなに兵隊みたいに厳しいわけじゃないから。ただ、煙草は吸う時間決まってたりとか、お酒は飲んじゃいけなかったりとか、1か月に1回だけ家に帰って泊まれる日があって、そういう日にお酒ガンガン飲んだ。そういうのは、無事、全部クリアできたんだ、俺は。そして、最後の最後っていうのが、天皇に会いに行く日なんですよ。それから、1週間後とか2週間後に旅立つ。その前の、最後のミッションである天皇に会うってことが、俺には大問題だったわけ。それで、俺は、友達にその前の日に電話してくれるように頼んでたの。親父が危篤っぽいから、富山に帰ってこさせなくちゃいけないみたいな電話を事務局にかける、ってふうな。

山岡　：　逃げを予定してたのね。

荒井　：　天皇に会うってことが最後の試練というか、ミッション。このミッションが果たされないと、卒業できない。それは最初から聞いてたことだったので。

山岡 ： それをごまかせるかなっと思ったんだ。

荒井 ： そうそう。そう思って手配してたわけ。手配しても無理だったかもしんないんだけど。当時の天皇は平成天皇、今の上皇ね。で、なぜ天皇かっていったら、彼は皇太子の時代に協力隊の名誉総裁になってるわけ。ところが、彼は、皇太子にそれを継がせないで、自分がそのままやり続けるっていう風に言ったわけ。それは嬉しいわけよ、協力隊としては。だって、名誉総裁が天皇なわけだからさ。しかも、彼は、天皇になってからそんなに経ってないわけ、1992年だから。1年か2年くらい。だから、これはもう絶対的なものとしてあるわけで。それはわかってたから、俺はそういう風に裏工作を考えてたんだよ。ところが、拝謁の2日前に、協力隊の訓練所の所長が「明後日の天皇拝謁についてお話します。皆さんの中にはいろいろな事情があって、天皇を尊敬されない方、或いは天皇とお会いしたくない方もいらっしゃると思います。過去にもそういう例はありました。そういう方は今挙手しろとは言いませんが、まず私に相談してください」って言うわけ。

山岡 ： ほう。

荒井 ： もしかしたら、ある程度理解してんじゃねえかなって思うじゃん。でも、これは、向こうの罠だったんだ。俺は、全然気づかなくて。俺もさ後ろめたいっていうか、嫌じゃん、嘘つくのは。だから、所長に直接会いに行った。「あぁ、早速ですね。で、どうしてですか？」って言うから「天皇っていうのは別にぼくが選んだわけでもないし、選ぶのに参加してるわけでもないので、お会いしたくない気持ちは大きいです。もしお会いしなくていいんだったら、お会いしたくないで」って言ったわけ。

山岡 ： 屁理屈（笑）

荒井 ： 「ああ、そうですか。よくわかりました」って言うわけ。その場でそうしましょうとは言わないわけよ。そしたらさ、その後のこと。10人部屋なんだけど、OBが一人一人付いてるわけ。そのOBからさ、そいつは俺より年下なんだよ、OB だけど。そいつがさ、「荒井君、ちょっとお話を聞かせてほしい。拝謁の件でさ。荒井君の意見もうちょっと詳しく聞きたいから」って。それでいろいろ、「日の丸についてはどう思ってるの？」とか。「君が代についてはどうですか？」とか、聞くから、割といろいろ言ったんだよ。そしたら、向こうはさ、「すごいっすね。そこまで考えてるんだ。ぼくなんかそんなこと考えたことないっす。いやーやっぱり大学出てる人は違いますね」みたいなね。そう言いながらいろいろ聞いてくるわけ。

山岡 ： 思想チェック。

荒井 ： 思想調査ですよね。そして「今日は本当に勉強になりました」とか言うんだよ。

山岡 ： そこまで言うの？

荒井 ： 言うんだよ。年下だしな俺よりな。俺も自分の思いのたけを全部伝えられてよかったなみたいな。

山岡 ： (爆笑)おばかさん……

荒井 ： それで次の日は、副所長ってのがいて、そいつがガリガリの右翼っていうか、大変な奴で、そいつに呼ばれた。飴の次は鞭みたいな感じ。前の日 OB に俺が話したことが、全部そこに行ってて、俺の言ったこと一言一句わかってるわけ。それで「君は日の丸とか駄目なのかね？」とか言って。「いやー、自分は戦争中の問題もあるし。できれば、違うのでもいいかも」って。そしたら急に怒り始めてさ。「自分の国の国旗も敬えない奴が、他の国に行ったらどんなことになるか、お前わかるか」って。「そういう自分の国の国旗を敬えない奴は他の国に行ったら、他の国の国旗を破る」とかわけのわかんないこと言い出してさ。もう本当に怒り出して。君が代のこともそういうこと言い出して。俺が言ったこと全部知ってるから、全部それについて言ってくるわけだよね。それでね「お前みたいな奴はね、タンザニアなんかに行かせない。日本の代表として行かせることはできない。タンザニア人がお前を見て、こんなのが日本人かって思われたら、俺たちは困る」って話になってさ。ものすごい怒って。「お前、やめさせることなんて簡単だ」って話になって。で、俺はその時、痛風持ちだったわけ。訓練中に発覚したんだよ。

山岡 ： そうなんだ！！

荒井 ： ようするに楽しみが、煙草もないし、酒もないから、食に走るわけ。出される食事が、すごく高カロリーなの、軍隊的に。女の子たちは食べきれないわけで、そしたらくれるわけよ。けっこううめえんだよ、それが。朝昼晩と女の子からもらってさ、どんどん食べて、体重は増えてきて。それまで、あんまり肉とか食ってなかったのに、肉食えた。ジョギングしてる途中で足くじいたみたいなことになって、翌朝、医務室に行ったら、「いやー、これすぐ病院ですね。」「くじいたんじゃないんですか？」「それ違うんで。内臓系です」って言われたんだ。裏の赤十字病院に行ったら痛風だった。まずそれがあって、薬とか飲んでた。「君、痛風だよね」「今、薬でなんとか大丈夫です。発作出てません」「いやいや、もうねえ痛風。そういう人は行かせられないよね」それから、「君、スワヒリ語どうなの？」「なんとか大丈夫でしたよ。卒業できました」「いや、あれもね下駄履かせてあげてるからね」とかって。

山岡 ： それさ、3か月の訓練の前にやってほしいよね。

荒井 ： それは、罠がなければわかんなかった。俺がそういうふうに全部言っちゃったわけ。自分で、ゲロっちゃったわけだから。その罠さえなければ、偽電話かけてもらって、そんなことは許されないって言われる可能性もあったわけけど、それだと、全然バレなくて、じゃあ、すいませんしたーってみたいな感じになれたかもしれない。でも、向こうから罠しかけてきたから、俺がその罠に引っかかちゃって、炙り出されてたわけだよね。そういうことで総括されたわけ。困って俺は、その頃、俺エイズの関係でいろいろ動

いてたから、社会党の議員の秘書と仲良かったんで…

山岡 ： そんなこともやってたんだ。

荒井 ： 「ビジュアルエイズ東京」って言って霜田誠二氏が始めたやつ。それで社会党の秘書に電話して、こういうことがあったって話した。社会党って左翼だから基本的に、だから何とかしてくれるかなと思ったんだけど。

山岡 ： できないよ。

荒井 ： うん。で、「それは、大変な事態になりましたね。タンザニアに行けることをお祈りするしかありません」とか言われてさ。

山岡 ： そして、拝謁したの？

荒井 ： 副所長にガンガン言われた後、夜遅くに、今度は所長から会おうって言われた。所長は、「3か月頑張ってきた荒井君のレポートとか読んだけど、荒井君がタンザニアを大好きだっていうのがすごくわかる」って。今度また飴が来るわけ。「副所長は強めに言ったかもしれないけど、荒井君がタンザニアを愛する気持ちとか、版画が好きなのも、わかる」と。

山岡 ： 行ってほしいんだな。

荒井 ： そうそう、行ってほしいわけ。もし俺がこじれて行かないってことになって、クビになったりとかすると、困るんだよ。所長としては、唯一の不祥事になっちゃうわけだ。皇太子の時から、そういういろいろなことがあったかもしれないけど、うまく行かせてた。今まで行かないってやつはきっといなかったわけだよ。それだから、急にさ、割と下手に出てきて、「これはぼくもね、荒井君には行ってほしいんだよ。副所長は行かせないみたいなこと言ったかもしれないけど。本当に、行ってほしいんだよね」とか言って、本当に頼まれちゃってさ（笑）。「そんなに話したくなければ、端っこの方にいればいいし。別に天皇に会ったからって、君が何か起こるわけでもないでしょ」みたいなね。「君がね、天皇に対して何かやる…テロとは言ってないよ……とか全然思ってないから。とにかく行ってくれないかな」みたいな。結局、そう言われて、それで行くことにしたってことだよね、拝謁。友達とかに電話して言うわけよ、こんなことあったとかさ。だいたいみんな左翼だからさ、「お前、それは行っちゃいけねえ。」「辞めちゃえよ」とか言う。「お前それ転向だぞ。行ったらお前転向だよ。お前はもう左翼じゃねえ」とか「お前今までやってきたことなんだと思ってるんだ」とか言われて。「お前それで協力隊行ったら、今までやってきたこと全部水に流すことになるぞ」みたいなことも言われた。

山岡 ： 電話なんかしなければいいのに。

橋本 ： どういう系の友達なんですか？

荒井 ： 音楽系とか、そういう。俺、実際に反天皇制のイベントに出て、いろいろな人と付き合いがあるわけだからさ。電話したのは、ちょっと相談したかったから。相談したら出るなと言われるのはわかっていた。これは裏切りなんだなと自分で思いつつ。自分の過去に対する裏切り。でも、こんなに天皇制のことでさ傷つく、そんな大変なことなんだな、俺たちにとってみたいな。

山岡 ： …なるほどね。

荒井 ： 要するに、理念的に天皇制ってよくないよな、みたいな左翼的な考え方で、身分制度を肯定にするようなものだ、という考え方でいたんだけど、協力隊に行くことで、初めて蹴飛ばされたっていうか、投げ飛ばされて、痛い目に遭ったっていうか。その経験が、後の作品《Happy Japan !》につながる。

山岡 ： で、結局、団体で天皇に拝謁したんですね。端っこの方で。

荒井 ： そうそう。煙草とかあったら取って。置いてあるんだよ。1箱はくれないんだけど。

山岡 ： 恩賜の煙草って言うの？

荒井 ： やっぱり、そうみたい。シガーケースが置いてあって、灰皿とかもあって。それは吸ってもいいし、少しなら持ってってもいいって言われて。でも、配られはしないの。

山岡 ： 持って行ってはいけないの？

荒井 ： 配られなかった。吸うために置いてある。天皇が直接くれた煙草みたいな。俺は反天皇とかいいながら、3、4本もらったの。そして、親父とかにあげたの。そりゃもう、大変な騒ぎですよ、うちの両親は、「これ天皇様からもらった煙草！これは一生の宝だな！」って。母親も「天皇に会ったの？どういう人だった？」とか聞かれた。

山岡 ： で、行ったわけですね、タンザニア。

10.帰国とパフォーマンス再開

荒井 ： 行った先はタンザニアのザンジバル。1992年12月に行って、1994年に戻った。授業とかでも、異文化にどういう風に接触していくかっていう勉強をしたんだよ。ものすごい本当に異文化なんで、本当にわけわかんないことも多いんわけですよ。イスラム教なの、ザンジバル島は。タンザニアの本土はキリスト教。だけどザンジバルはもともと海流とかの関係で、アラブとの交流が強くて、イスラム化してたわけ。生徒は20代の男3人と女1人の4人だけだったんだけど、イスラム教であるってことは、たとえば、知らなかったんだけど、ラマダン中は、女の子とかも、つば吐きまくるんだよね。昼間の間は水飲んじゃいけない。ようするに体内に何かを入れることは駄目なわけ。つばだを飲み込むのも、いけないわけ。それは、昼間だけなんだけど、それでも、みんな脱水状態みたいになって、もう犬とか猫とか駄目になったやつみたいにぼーっとしてる。疲れちゃってさ。暑いしね。注射も駄目なんですよ。大怪我とか、病気の人は例外化されるし、年寄りと子供はラマダン中は、大丈夫なの。でも、信心深いじじいとかばばあに限って、自分は死にそうでも注射は嫌だって言うわけ。そしたら医者も家族も打たせないじゃん、それで結構死ぬ奴がいるんだよ。

山岡 ： ほう。

荒井 ： そんな、いやいろいろなことがあって、慣れるために、こっちも努力するじゃん。知ろうとするじゃん。そういう習慣なんだなぁとかさ。本当にこいつらは金ないんだなとかさ。たとえば、コラージュの授業をする時に、コラージュするから明日新聞か、雑誌でもいいから、何でも持って来てって言っても、誰も持って来ないわけだよ。何で持って来ないか、全然わかんなくて、最初。2回ぐらいそれ言ったけど、誰も持ってこない。ちょっと気心知れた学生に、どうしてみんな持ってこないの？って聞いたら、「ないんです」って。「新聞がない？」「新聞は便所の紙にしたりとか、あとそれにのりつけて、袋にして使ったりする」「では、雑誌は？」と聞いたら「雑誌は……ないですね」で、そういうことか、ってわかってきた。そしたら俺のウチは、青年協力隊の家だから、代々の残された雑誌や、エロ本みたいなもんもあるし、カレンダーもある。それを持ってったわけよ、教室に。今日これを使ってやりますからっていうと、まず、みんな嬉しそうにそれ見てんの、カレンダーとか。

山岡 ： そりゃあ、そうだね。

荒井 ： 富士山とかさあ、新幹線だとかそういうのとか。やっぱりカラー写真きれいじゃん。今はわかんないけど、その頃のタンザニアってさ、白黒のものばっかりで写真とかも何か版ズレおこしてたりするのよね。まあ、そういう感じだったから、それでそれをコラージュするために切れって言っても、誰も切らない。みんな家に持って帰りたくてしょうがなくて、2冊ずつあげるからって好きなのいろいろ、あげる。そして、これは残ったやつだったから、もうきっちり切れって言っても切らないから、結局、俺が全部、破いた。そしたら、さすがに切り始めてコラージュの授業がようやくできた、と。という、そういう文化的なギャップって

いうのは、すぐ乗り越えることができたけれど。それとは別に、ザンジバルでは、あるいい出会いがあるんだけど、それは後で話すよ。

山岡 ： わかった、楽しみ。で、帰国してからが、大変だったのね。

荒井 ： そうなんだ。日本に帰ってきてから、俺は日本の文化に溶け込めなかった。あとほらもう1つは溶け込む努力しないから。

山岡 ： そもそも日本はもうやだなと思ったから行ったんだもんね。

荒井 ： そういうこと以上に、もうその日本の文化自体が、ムリ！みたいな感じになった。あとこっちは、溶け込むつもりもないわけじゃん。タンザニアに居たらザンジバルの文化に溶け込もうって努力する。今度逆に、日本の文化に溶け込もうと努力をするべきなんだよ。だけどそれを拒絶しちゃうわけだよね、拒絶するから、なおさら日本の文化に溶け込めなくなっちゃう。もう一つは、文化がどうとかじゃなくて、例えば帰ってきて、もうカツ丼食いたくて、牛丼食いたくて、ラーメン食いたくてしょうがないわけ。タンザニアでも、日本人で集まればさ、寿司だったらこうだよな～とかって言いながら、そういう話しかしないわけ。日本食に似たものを作ってみんなで食べるみたいな、それぐらいだからもう帰ってきたらもうガンガン食うわけよ。そしたらある日、舌がピリピリしだした（笑）。化学調味料問題ね。2年間もう化学調味は一切食ってなかったから、それなのに、牛丼だとかそういうのって全部に化学調味料入ってるわけじゃん、ラーメンとか、もう1週間後ぐらいでも、何か舌がね、自分の意識と関係なく動く。ピピピッって、チックじゃないけど、舌がぱっぱって動く。何が起こってるんだ？と思ったら、まあ、自分で考えて化学調味料から来てるなとわかった。病院に行くことまで考えたんだけど、そういうことがあって。

山岡 ： はー。

荒井 ： あと、日本の今の狭い歩道って、狭いところは、幅1mぐらいだったりするじゃん。帰国した当初は、まず、それが平均台歩くみたいな感じで、狭すぎるわけ（笑）。

山岡 ： そうなんだ！

荒井 ： あともう一つは、ザンジバルにいるときは、もうほぼ360度を見渡せるわけよ。そこはでっかい木があるな～とかさ、そこに家があるなとか。一応道があるんだけど、ないような、何もなかったりするから。そういうとこ歩いているからいたから、日本で、細いところを、ずっと100mとか歩くとなると、すごい緊張するわけ。

山岡 ： へ～。

荒井 ： 時たま後ろから自転車きたりするとさ、もう悲鳴っていうかそんな感じ。もう本当に大げさじゃなくてすごく怖かったですよね、あと向こうから人が来るのを見ると、もう見えた瞬間からどういうふうにして、どっちに行こうかとか考えるんだよね。来た瞬間に避けりゃいいことなんだけど、もういるのが見えた瞬間びびっちゃって。どうしていいかっていう、どういうふうに対処したらいいかみたいな感じ。それで、俺はもう、ほとんどおじいさん、おばあさんと一緒で、用がなければでかけない、用があっても、もう昼間の混んでないときだけ。一度、新宿駅で、ちょっとやばくなっちゃって、なんか10分ぐらい階段でぼーっとしてた。乗り換えようと思って階段上ってたらガーッと降りてくるじゃん、みんな。もうそれでびびっちゃうわけ。なんかちょっと上がってたら今度下りのやつが、来てまたぎゃーと来るじゃん。なんかもう、もう駄目なんだよ。

山岡 ： そういうことって協力隊の方から、全然違う環境のところに行った人が帰ってきて、環境の違いに適応が、苦しくなることがある、みたいなことは聞かされてないの？

荒井 ： なかったね。やっぱり行くことが前提。行くだけ行く。帰国すると、俺みたいな人多かったと思うよ。対処のしようもないよね。

山岡 ： ありえますよね。

荒井 ： あとはテレビ見てなんかわけわかんないし言ってることが、意味わかるんだけどなんかなんでこんなことで騒いでるのかな～とかさあ。

山岡 ： あ～。

荒井 ： なんかお笑いみたいなやつらとか。今でもそれは一緒なんだけど、この違和感何だろうみたいな。1995年の1月に帰ってきたから、急に、オウムだとか地震だとかいろいろあって。

山岡 ： 急にいろんなことが、起き始めた時期だね。

荒井 ： そういうことがあって、結局またその千葉大のストーカーの時の話みたいに、落ち込んで、鬱になって。あと、酒っていうのがまた関連してるわけだけど、もう酒しか飲まなくなっちゃってた。だから起きると酒飲んでた。どこにも行かなくなってて、怖いから外に出るのが。酒飲み始めて、それで何か夕方になってきて、ゆっくり飲んでるけど、夜の10時ぐらいとかになってくるとベロベロに酔っ払ってきて、そうすると友達に電話して、タンザニアこうだったとかって話して、最初面白がって聞いてくれるんだけど、もうそれがもう積み重なっていくと、「またかよ！いつまでタンザニアの話だよ！」みたいになる。なるよね、俺も、もしそういう友達いたら、もういい加減にしろよ、もう帰ってきたんだからよみたいに言うと思う。

山岡 ： 仕事も再開するのに時間かかった？

荒井 ： それでいろいろあっても結局ね、自分も1回失敗してるわけじゃん、千葉大ストーカー事件で（笑）

山岡 ： じゃあ、これは忙しくするしかない。一度、学習しているから。

荒井 ： そうそう。一度学習してる。だから3ヶ月ぐらいそういう状態が続いて、ある友達からさ、「アルコール依存症の会」を紹介するとか言われたりとか。何か俺、そんなことねぇとか言っても、「まさにお前今そうだろう！」とか言われてさ、もうそいつには電話しないようにしたけど、だって同じこと言われるから。で、すぐ切られたりとかさ。それでその時、桑原くんだけは一応さ、聞いてくれたよ。

山岡 ： 優しいんだ、彼は。

荒井 ： なんか、そうなんだ～とか言ってくれて。サエグサもね、とりあえず聞いてくれて。それで結局仕事に戻って何とか、乗り越えたみたいな感じですよね。

山岡 ： そして、活動再開ですね。

荒井 ： そうですね、サエグサから、ちょっとなんかまた一緒にやってみようぜみたいな話があって、その鬱のときに。そのときにうまい具合に大阪から別の友達が来いよみたいな、出てくれないかみたいなことになって、サエグサと一緒に行った。

山岡 ： 「ピース大阪」ってどういう場所ですか？

荒井 ： 「ピース大阪」っていうのは、今ないかもしんないんだけど、大阪府の土地に、どっちかって言うと左翼系の人たちが戦争の記憶を忘れないようにってつくった。で、そのときのイベントが、レオナルド・フジタの『アッツ島の玉砕』とか、そういう戦争画をあえて、市民に見せる、という企画展をやってたんだ。

山岡 ： 敗戦50周年だもんね。

荒井 ： その企画展でパフォーマンスをやるっていう話。サエグサと一緒にやったのが、なんかちょっと名前忘れたけどちょっと変な、やばいのをやった。俺が裸で「アッツ島」の絵の前で立ってたりとかそういう。『アッツ島の玉砕』ってフジタの一番有名な戦争画で、相当でかい、圧巻の戦争画ですよね。見方によっては物すごい悲惨、なんかみんな死んでるわけだからね。戦意高揚にはならないんではないかと思うくらい。

山岡 ： 東京国立近代美術館でやった展覧会のを、大阪でもやったってことかな？

荒井 ： いや、それとは別系統で、針生一郎とかの関係。その廊下とかに絵が飾ってあって、俺は、そ

の辺を裸でうろつきまくった。

橋本 ： へ〜

荒井 ： なんで裸でうろつき回ってたのか今は忘れたけど、なんかインプロビゼーション。

山岡 ： 裸になることはそれまでも結構あった？

荒井 ： 舞踏家って結構きれいな身体してるんですよ、痩せてたりとか。ダンサーだと太ってるダンサーもいるんだけど、でも、舞踏家については、太ってる人ってあんまり見たことないね。やっぱりきれいな肉体にするんですよ。僕はいつ頃からかわかんないけど、そういう、肉体に対して、ちょっと違うだろうみたいな考え方があって、とにかく窒息系のパフォーマンスだと、肉体とかが結構ピリピリするわけですよ、腹とかもおかしくなってくるし、そういうのを如実に見せたいっていうのがあって、それで裸になるってのが多い。要するに、自分の醜悪な肉体がいかに動いてるかっていうことを見てもらいたいっていう。要するに、最初は口の中に入れて、窒息してビリビリする感じを、マイクで拾ってたのを、マイクなしにして直接見てもらうことにした。

山岡 ： 音よりもそのビジュアルで。

荒井 ： そうそう、そのビジュアルならば、増幅されなくても、ある人には見えるだろうみたいな。例えば俺の汚い肉体だと、みんな見たくなかったりするわけで。俺、ある女性作家から、「荒井さんの裸なんか見たくないわ！」とか言われて、それを逆にやばいっしょ、みたいな、その時思ったのよ。

橋本 ： うんうん。ひどい女だ。

荒井 ： それは要するに男が、きれいな女性のヌードばっかり見てるのを目の敵にする女の人がいるわけじゃん、フェミニストの中に。なのに、俺に対して、「荒井さんの裸なんか見たくない」っていうのって、どうなのか、と思ったわけ。いろいろな意味があるんだろうけど、要するに醜悪な肉体を見たくないっていうんだったら、全く逆のことになるなって。

山岡 ： 醜悪ではないよ。普通の身体。でも、人が見たい、見せていいのは美しい裸。普通の裸は見るためのものじゃないっていうのが、あるね。

荒井 ： そうそう、だから俺の場合はだから、なんか逆にそのパフォーマンスとかそういうことであれば、普通の体がいかに痙攣したりとか、きれいじゃないからみんな見たくないけど、でも見る人にとっては人間ってああいうふうに痙攣したりする、ぎぁーってほどではなくても、腹の筋肉がなんかおかしくなったりとか、呼吸がなくなって、腹がへこんだりとか、そういう微妙な肉体のものを、見る人もいるんじゃないかっ

て思った。自分自身は感じられないことなんだけど、繊細な人にはそういう、ことはわかってもらえるんじゃないかと思った。可能性として。

山岡 ： 多分サウンド系じゃなくなり始めたあたりから、裸になってたのね。この「敗戦後50年」というイベントのタイトル？作品のタイトル？

荒井 ： 作品のタイトルです。

橋本 ： 裸ってもう本当に、パンツもはかないで全裸だったんですか？

荒井 ： いや、はいてるときもあったし、取ってるときあったんじゃないかな。取ってるときもある。でもあんまり、ちんこデカくないんで、あんまりそこだけを、見せたくないっていうのあるんだよね。

山岡 ： なんでそこだけ、気にするの？

荒井 ： だって、やだよ。

山岡 ： それでとにかく、戻ったっていうか、パフォーマンスに。で、もう始まってるよね、その時期、ニパフは。1993年からだから。

荒井 ： それで、霜田氏のニパフ見に行ったりとかして、霜田氏が今までの霜田と全然変わっちゃったなと思ったの。それから呼んでる作家が面白いなと、思ったことは確かで。ただ見に行っても、霜田氏は飲みに行こうとかも言わなかったし。帰ってきたのかって感じで。霜田氏は、なんかあんまり俺と接触しない。「これから飲みに行くくけど、行く？」とか言うかなぁと思ったらさ、「帰って来たの？元気そうじゃん」とかって言うだけ。そんな感じだったんだけど、最終的に谷川まりさんがニパフに参加することになって、その次の年ぐらいに俺とサエグサの「現場の力」が、ようやく参加した。

山岡 ： 99年ぐらいからかしら。99年はキッド・アイラック・ホールで、97年、98年は、新宿文化センターではなかったかしら。

荒井 ： 俺らはキッド・アイラック・ホールしか出てないな。

山岡 ： その後始まる海外の活動と、中国とかアジアで活動しながら作った作品と、出会った友達の話を聞きたい。

荒井 ： 海外に行き始めたのは、2000年の北京の第1回オープン・アートフェスティバルから。これは中国人のアーティストが海外からパフォーマンスアーティストを呼ぶ、初めてのパフォーマンスアートフェ

スティバル。2000年から毎年やってるから、今年（2022年）で23回目、今年もしやれば。このきっかけになったのが、1999年に、ニパフに来てた朱冥(ジューミン)っていう有名な作家がいるんだけど、その作家から、あの頃まだ E メールは普及してなかったから、ちゃんとした招待状が、郵便で届いたわけ。「荒井真一先生」とか書いてあって。中、見たらちゃんとしたスタンプもきれいに押してあって。「招待します。来てください。但し飛行機代は出せませんけど、私たちは初めてインターナショナルなパフォーマンスアートフェスティバルを中国でやるから、ぜひ参加してください。」と。朱冥(ジューミン)はニパフで知り合った日本人の作家、それからヨーロッパの作家に全部出したわけですよ。そして、俺は、初めてだった、そんなちゃんとした招待状をもらったのが。だから、すごい嬉しくて。それで、霜田氏に「朱冥(ジューミン)からこういうの来たよね」って言ったら、「当然うちにも来てる」と。でもまあ、初めてだから行ってみようかなと思ったんだけど、霜田氏は「うーん、俺は行かないな」とか言うわけ。「気を付けた方がいいぞ、荒井」みたいな。

山岡 ： 用心深い。

荒井 ： 朱冥(ジューミン)は、すごい有名な作家で、ハトロン紙みたいなのでバルーン作って。それでそん中に入って、胎児みたいな感じ。それが大型プロジェクト化していくと、オーストラリアのメルボルンでやったのは、そういう風船みたいのを20個くらい浮かべて、その中の一つに彼が入ってるっていうような作品。すごくビジュアルできれいな作品。一つだけ彼が入ってるから、動けるわけだよね。中でグルグル回ったりとかして。他のは止まってて、波の流れに沿ってるわけだけど、一つだけ自発的に動くやつがある。その写真はすごいきれいで、すごく高値で売買されてるわけ。

山岡 ： 見たことある、写真で。

荒井 ： で、俺は1回目のフェスティバルに行った。あの頃の中国はけっこう厳しい状況、今も厳しんだけど。結局彼らはフェスティバルを、東京でいうと八王子の山奥、高尾の山奥みたいなところ、休暇村っていうか、民宿なんだけど、ようするにラブホテルなんだよ。男女交際は、見つかると問題になるわけだ。なおかつ、そういう人たちに場所を提供してるっていうのも問題になるわけ。ラブホテル自体が街中では成立しないような社会だった、その頃。その代り、緩い地域では「休暇村」っていう名前にして、農家だから家の周りに塀があって、なかなか人が入れないようになってて、その中にバーベキューできたりとか、そういうような場所。休暇村ってことで、若い男女が密会するような場所。そういう場所を借り切って、フェスティバルをやったわけ。そこに行くのに北京から車で 1 時間半くらいかかる。彼らは20人乗りくらいのバスを5台くらいチャーターして、参加する人も見る人もその5台のバスに乗って休暇村に行った。そして、イベントが始まって3組目か4組目は「コカコーラ・バス」っていう作品だった。中国の大きい壺みたいのあるじゃん。それにペイントでコカコーラって書いてあって、中にコカコーラいっぱいに入ってんの。どれだけ金かかってんだって感じ。さらに、コカコーラ入れるぞって感じで入れて。コカコーラで満タンになった所に、パフォーマンスアーティストが素っ裸で中に入って。別の友達みたいのが、また素っ裸になって2

人で入って。女の人じゃなく、男2人がコカコーラの風呂の中でいろいろ暴れるみたいなことやってたら、警察が入って来た。その2人は捕まった。それからオーガナイザーは、誰かみたいな話になって。

山岡 ： 男でも、裸がいけなかった？

荒井 ： そう、裸がいけないかったってこと。ばれないように、地方でやったわけ。ポスターとかも貼ってないし、みんな口コミなわけだよね。そこのバス停に行くと、そこに行くバスが出るからっていうのは、もう本当にごく知ってる人にしか言ってない情報。だけど、100人は集まったわけですよ。それでやってたら、警察来ちゃって。だから、誰か内通者がいたってことだよね。誰かが密告した。結局、俺とか出番がなくて。警察が来たって瞬間、裏口から逃げて、30人くらい残った。関係者というか、連帯しようという人たちは残った。俺なんかパスポート取り上げられて、一緒に行った向井千恵さんもパスポート取り上げられて。その時外国人でいたのが、俺と向井千恵さんとロイ・ヴァーラだけなんですよ。いっぱい招待状を送ったんだけど、来たのは3人だけ。パスポート取り上げられて何が始まったかというと、取り調べ。俺とかロイ・ヴァーラも、取り調べを受けてさ、でも、通訳とか付かないわけ。ちょっとだけ英語しゃべれんだけど、結局何かここにサインしないとお前帰れねぇぞ、みたいな話になって、何書いてるかわかんないんで、怖かったけど、これにサインしないとパスポート返せないとかっていうんで、しょうがないと思ってサインしたけど、大丈夫だった。結局警察が夕方に引き上げてってくれて、それで捕まったのがアーティスト人と、オーガナイザー2人。戻ってきたけど、ビデオとか全部没収。それで再開したんだけど、全部出来なくて結局、次の日に、陳進（チェンジン）の家に行って、結構広い家なんで、そこで俺はパフォーマンスができた。

山岡 ： その後、「オープン・フェスティバル」は、結構うまく続けたんですね。

荒井 ： 3人で始めたんだけど、途中で分裂するんだよね、最後には、チェンジン（陳進）が、続けることになった。シューヤン(舒阳)ていうのが一番頭良くて、もう本当に英語もできる。シューヤン(舒阳)は今、ヨーロッパの美術館のキュレーションやったりとかしてる。とにかく、初め頃は、3人でうまく、持ち回りでやってたんですよ。1 回目は3人でやって、2回目はシューヤン(舒阳)がやる、3 回目はジューミン（朱冥）がやる、4 回目はチェンジン（陳進）がやる。でも、分裂が起こって、シューヤン(舒阳)は、別に「DADAO」っていうフェスティバルを始めたし、ジューミン（朱冥）はもともと、オルガナイズとかにあんまり興味なくて、だからチェンジン（陳進）のフェスティバルに出るし、シューヤン(舒阳)のフェスティバルに出る、みたいな。

山岡 ： 荒井さんは、「オープン・フェスティバル」に行ってその後、結構続けざまに年に何回も海外行ってますね？そこでの経験は、どうでしたか？

荒井 ： 北京のオープン・フェスについては、まず、チェンジン（陳進）と仲良くなり、シューヤン(舒阳)も

俺のこと好きだったし。ていうか、俺がキャラクター的に英語が上手じゃないのと、日本だとすぐけんかになっちゃうのよ。酒癖っていうよりも、人の悪口言っちゃうから。

山岡 ： 外国では上手に語学が使えないから、けんかにならないんですね。楽しそうに飲んでいるから、いいやつだなってことになる。

荒井 ： 中国には、酒タバコ文化っていうのがあるわけ、その頃は。今はないみたいだけど、その頃は、例えば俺がタバコ吸ってると、「タバコを吸うんだね」みたいな感じで。みんなタバコくれるんだよ、俺のも吸ってくれ！俺のも吸ってくれ！みたいな（笑）。そしたら、今度逆にあげなくちゃいけないから、面倒くさい文化だなぁと思ったけど、あげて、それで何か一つ、楽になるんだよね。彼らにとってはこいつは、なんか大丈夫？みたいな。酒とかもうガブガブ飲んでるし、酔っ払って踊ったりとかする、時たま。なんとなくこいつは何か、なんかよくわかんないけど、なんとなくいい奴なんじゃないかみたいになる。日本ではそうはいかなくて、日本では、俺は、なんかすぐ人の悪口言って「お前のパフォーマンスはよ～」とかになる。そして、ヨーロッパに行ってもアメリカに行っても、英語で悪口を言うのは難しい。日本では干されてるけど、外国では大丈夫（笑）。

11-1.《Happy Japan !》

山岡 ：《Happy Japan !》 というパフォーマンスは、1999年くらいから？具体的にパフォーマンスが、どのように進行するのか、教えてください。

荒井 ：《Happy Japan !》では、青年海外協力隊の濃い緑のブレザーと赤いネクタイの制服を着て行なう。パスポートを手にして観客に、協力隊のこと、天皇制のことを話す。パスポートのデザインである、菊の紋章のことも話し、そして、白いキャンバス布を広げ、裸になり（ペニスには黄色いピカチューの人形をつけておく）、お尻を観客側に向け、体を曲げて肛門を見せ、肛門にパスポートをあて、菊の紋章との形の類似をアピールする。さらに、国家である君が代を歌いながらしゃがみ、お尻から赤い絵の具を絞り出したように見せながら、尻餅をついてお尻を滑らせ、キャンバス上にアクションペインティング的な日の丸を描く。それは壁に飾る。それから、小林よしのりの漫画「ゴーマニズム宣言・戦争論」の内容の紹介する。「日本はもっと戦争に強くなければならない、日本人は愛国心を持たなくてはならない」などと書いてあることを紹介。ページを読みながら、やぶって、口に押し込む。押し込んでは、「ハッピージャパン！」と言ってバンザイを繰り返す。口に詰め込むとかなりきつい。我慢できなくなるまで、それをする。そこで終わることもあるし、最後に、「ハッピージャパン！」と言いながら逆立ちをすることもある。このパフォーマンスは、初めて行った海外の都市では必ずするようにしている。

山岡 ： なるほど。海外では、どんな反応なの？

Essen, Germany 2007

荒井 ： 初演のころ、北京では、チェンジン（陳進）にしろ、ジューミン（朱冥）にしろ、シューヤン(舒阳)にしろね、面白いって。シューヤン(舒阳)とかは、その頃の美術雑誌の編集任せられてたので、雑誌に俺の文章を載せたりとかしてくれた。受け入れられたかどうかわかんないけど、とにかく面白がられた。

山岡 ： 日本のナショナリズム批判みたいなことっていうのを、中国の人たちはどういうふうに受けたんだろう？

荒井 ： いやあ～みんな馬鹿だから、そういう話はしないよね。なんか、結果的にただ面白いか面白くないかみたいな話だよ。だから荒井の思想がどうとかじゃなくて、何かケツでぐるぐる回ってるのが面白いとか、窒息しそうになってくるのが面白いとか、そういうこと。荒井の思想の背景とかパフォーマンスの背景とかについてとかっていうのは全然話に出ないし。ナショナリズム的な問題も出ないし。

山岡 ： ふーむ、話すには、言語の限界があったのかな。荒井さん的には、どうなんですかそれ。そういう受け方でハッピー？

荒井 ： 大丈夫だよ、それは。だけどね、日本でね、ニパフで《Happy Japan !》をやったんだよ、サエグサと一緒に、なんだけど。その時、まだ、《Happy Japan !》とは言ってないけど、やっぱり《Happy Japan !》的なもの、ね。その時は、谷川まりさんが、俺が口に紙を入れて窒息してるところで、「やめて！」とかって言ったりしたわけ、それはそれでいいの。「君が代」を歌って、その後、日の丸もどきの物を作るわけだけど、そのあたりで、下向いちゃう人がいるんだよね、見ちゃいけないものを見てるみたいな。全員じゃないよ、何人かいるわけ。見ないようにしている。それだったら、出てっていいよと俺は思う。でも、俺から言うわけにいかないからさ。見たくないんだったら、見なくていいよみたいなね、無理していなくていいよ、って、言いたい。ライブハウスってのは、見たくなかったら、出てりゃいいわけじゃん。それもできないで、ずっと見ちゃいけないものと思いながら、下向いてそこにいる。そういう反応ってのは日本では、よくある。

山岡 ：うーん、あるね、そういう傾向。

荒井 ： ジャカルタの時に面白かったのは、ものすごく客が面白がっちゃって、俺が口ん中に紙を入れるたびに「頑張れ！頑張れ！次いけー！」みたいな感じに盛り上がった。

山岡 ： 一気飲み大会みたいになったのね。

荒井 ： もうだいぶ苦しくなってるのにさ、「なんかまだいける！」って煽られて、ググググってさらに入れてみたら、「やったね！いけー！」って。俺はいつやめるられるんだろ〜これって（笑）思った。

山岡 ： 面白いね（笑）、お客さんの反応。

荒井 ： そこまでなのは、ジャカルタ、その時だけだね（笑）。他では、だいたい、やめてくれみたいな感じになっていくんだよ。たとえば、ヘルシンキのケーブル・ファクトリーでは、誰かが悲鳴を上げたりして、「もうやめろ！」みたいなこと言うわけ。フィンランド語で何か言ってんだけど、多分それは声援じゃなくてやめろって言ってる、俺もわかるわけ、雰囲気で。で、そろそろ限界だからって思ってやめたんだけど。

橋本 ： 僕は、《Happy Japan !》 のアイデアにとして、子供時代の銭湯での話を聞いたことがあります。その話をしてください。

荒井 ：《Happy Japan !》 って、尻でぐるぐる回るじゃん？あれは、子供の頃に銭湯でそういう遊びしてたんだ。つまり、俺の快楽と結びついてんのよ。だから日の丸作るっていうことよりも、何か自分が楽しいのが大事だし、それと日の丸の問題を合体させてるだけなんだ。

橋本 ： 銭湯にいるお年寄りとかに遊んでて怒られるみたいな。

荒井 ： 家に風呂なくて、友達も風呂なくて、そいつと一緒に銭湯行ってた。まずボーリング的に遊ぶ。エメロン・シャンプーとかの空とか3つぐらい拾ってきて置いて、桶を転がして倒して遊ぶ。それからなんか、おっさんが湯船に入るとバーっとお湯があふれて流れていくじゃん、銭湯のお湯が。そしたらそれと一緒にぐわあっ〜とさ、腹ばいになって滑ったりとかした。あんまり客いない時間なんだよ、3時とか4時で、まだ大人が入ってこない時間で。じいさんとかに、「お前ら、遊ぶんじゃねぇ！」とか言われたり（笑）。サッカー少年になりたかったらさ、風呂の中で、サッカーの練習とか足でボール蹴る練習とか、してた。

山岡 ： 荒井さんが裸になるのは銭湯で遊んだことが、つながっていたわけね。

荒井 ： それはあるよね、たとえばずっと家風呂だったらそういうことないわけだからね。

橋本 ： 怒られるんだけど、それが楽しくもある。何かパンキッシュな考えとかも、多分重なってくるんで

すよね。

荒井 ： うん。いや怒られるなと思ってるけど、怒られないと面白くない。これは多分怒ってくる人がいるだろうなぁと思いながら、子供だからさっていうか。結局、俺のって、天皇制批判でも何でもない。自分が転向したわけだからね、協力隊に行く時にね。要するに、たんに天皇嫌いだとか、日本嫌いだとか、「君が代」は駄目だとかっていうことじゃない。自分が1回負けちゃってるわけよ、負けちゃってるっていうことだから、そのありのままの自分見せるっていうことなんだ。小林よしのりの本を食うのは何かって言ったら、俺にとっての羽仁五郎のことにつながる。俺は、小林よしのりを読んでる奴を駄目なやつだと言えない(1990年代に、流行した小林よしのりの漫画『ゴーマニズム宣言』のシリーズ)。それから、「君が代」が駄目だとか、もう絶対言えない立場なわけよ、自分が1回負けてるわけだからさ。上から目線じゃ言えないわけ。自分もインボルブされちゃって、1回駄目にされてるっていうか。それから小林よしのりのファンについては、自分も羽仁五郎で左翼、間違った左翼の思想に染まったときがあるから、小林よしのりの漫画読んでそうなっちゃう人は、もう俺は救えないし。

山岡 ： 吉本隆明にかぶれたって言うのも、その1つなのかしら？

荒井 ： 吉本についてはもう批判する必要がなくなった。もう終わった人で、今俺の人生っていうか、俺の生き方には全く関わってない。でも、天皇制はまだ関わってるわけ、生きてれば。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： 基本的に、吉田克朗さんからオリジナルのもの作れって言われてったっていう話をしたと思うけど、やっぱり、いいか悪いかは別にして、俺の他に俺みたいなことをやってる人はいないっていうことだよね。みんな違っていいわけだけど、絶対俺みたいな奴はいないと思う。じゃあ俺は俺で、これがアートなのかどうかは別にして、オリジナルだなと自分で思って、それはもう最初からわかってたわけで、それが受け入れられるかどうかって言ったら受け入れられたと思うよ。

＜付録 ： お母さんとの対話のビデオより。これを流しながらこのパフォーマンスしたことが、何度かある。＞

荒井真一 :日の丸描いとったん、嫌やった？

母:なんか日本侮辱してるようで嫌やった。

荒井真一 :日本侮辱してたかなぁ、そのような感じする？

母:みんな褒めとるかもしれんけど私は嫌だった。

荒井真一 : あんなんせん方がいい？あとは何が嫌だった？チョンチョン出すの嫌なの、ねぇ。

母:みんな、嫌。そやけど自分の好きな芸術だから、私は何も、私は嫌でも子供の好きなことだろう？子供は子供の人生だからねぇ、そういう職業にとらわれず、子供は子供の人生だから。私は何一つわからんけど、人にだけは迷惑かけないようにって育ててきとったから。チョンチョン出して、みんなが喜んでるんやったら、それでいいけど。

荒井真一 : 喜んでるっていうか、確かにね、みんな拍手をしとるわね。不思議だね。

母:なんか私は見方が違うからさぁ、やっぱそんなこと言えんけど。

荒井真一 : みんなチョンチョン出すの嫌いになってきたかもしれん。銅版画だったらちょっとわかっとったんね？ね。

母:昔人間だから私。何もわからない。何でもいいけど、ただ人にだけ迷惑をかけてほしくない。

荒井真一 : かけてないよ～

母:かけてないから、私そんで、自分なりに満足しとるがな。

荒井真一 : 誰か怒っとったって？

母:誰も、なんも怒らんから、私が。

荒井真一 : 裸ぽんちょ、なんてのは昔からやってるよ、あんた知らんだけで。銅版画やってるときから。日の丸はこの5年ぐらいかな。3年か4年。戦争のこととかあるけど戦争とかどういう感じなん？日の丸の旗にあんた達針とおしておったんだろう？

母:千人針？だってさ～、あんたなんか尻で囲んで描いて。

荒井真一 : それでさ、戦争も負けてから変わったわけじゃん日本って、昔と同じ日の丸じゃないんじゃない？

母:日の丸言うたら、やっぱり日本だと思うからさ。

荒井真一 : だって日本でもあった戦争、終わってすぐの頃って、日の丸とか出しちゃいけなかった

時、あっただろう？ねぇ覚えとらん？

母：覚えとらんよぉ、私もう昔人間だから。

荒井真一 ： 昔人間ってあんた若いときの話だいね？あんた戦争の時何歳だったんだよ？18歳だったんだろう？昭和2年生まれだから、18なら覚えとうがいね、あんた。

母：軍事工場の韮原に行っとったから。

荒井真一 ： 岐阜の方か？

母：岐阜県の手前の、富山だわ。

11-2.《Viva! Globalization》

山岡 ： プロフィールには、2002年ごろから2004年にかけて、《ツーリスト》のシリーズがあるけど、どういう作品？

荒井 ：《ツーリスト》のシリーズとは、たとえばジャカルタには、俺らは、パフォーマンスフェスティバルの参加とはいえ、やはり、ツーリストとして行くわけで、そこんところで何か感じたことをパフォーマンスにしてた。たとえば、当時、自己責任論みたいなこと言われてたことあったじゃん、イラクで人質になった人たちの件で。

山岡 ： あったね。2004年のイラク日本人人質事件。

荒井 ： そういう日本の時事問題の変な状況を、ツーリストとしてそこにいる人と共有するみたいな、そういうような作品だったと思う。でもやってることは 《Happy Japan !》 と一緒なんだよ、基本的にね。俺の場合にはストーリー性みたいなものっていうのが大切になってた。パフォーマンスを見に来た人（もしくは通行人）に俺の拙い英語で、今日本でこんな状態ですけどみたいなことを話すんだ。

山岡 ： そして、《Viva! Globalization》 は、ツーリストシリーズから生まれているんだね。パフォーマンスの段取りを話してください。

Jogjakarta, Indonesia 2004

荒井 ： まず俺が裸になり、一人か二人、手伝ってくれる人を頼む。俺はビーチボールの地球儀を用意して手に持つ。手伝ってくれる人に、小麦粉を頭からかけてもらい、さらに、身体をマッサージして塗りこんでもらう。そして僕は頭に地球儀をつけて逆立ちし、Viva! Globalization と叫ぶ。何度も叫ぶ。次にコカコーラの話。子供の時とても好きだったが、値段が高かったことを話す。頭に上から、コーラをかけてもらうことと、マッサージ。再び、頭に地球儀をつけて逆立ちし、Viva! Globalization と叫ぶ。次にケチャップについて話す。デルモンテのケチャップの歌を歌う。流れは以上の場合と同じ。次に、グルタミン酸ソーダ（味の素）について語り、それを身体にかける。マッサージは、それらは、身体に入りやすく、気持ちも良いから。しかし、体に良いかどうかは、わからない。でも、私たちの身体に入りやすく、影響を受ける。最後に、さまざまなインスタントフードの企業の名を叫び、逆立ちをする。逆立ちは、言っていることの、その逆さまのことを言っている、と言う意味。でも、僕はそれに反対しているわけではない。

山岡 ： この作品のアイデアは、やはり、何かの経験が元になっているのかな。

荒井 ： これはね、たとえばパン、僕なんかは子供のときっていうのは、小学校の給食っていうのは、脱脂粉乳とパンだった、基本が。脱脂粉乳は、あの粉ミルク、僕の場合小学校6年まで脱脂粉乳とパンだった。なんでなのか？日本の主食は、米なわけじゃん、味噌汁なわけじゃん。給食でなんでパンと脱脂粉乳か、ミルクじゃなくて脱脂粉乳か。この問題っていうのは根が深くて、戦争直後、米を作る男たちが、戦争に行っててていなかった。

山岡 ： そうだったね。

荒井 ： それで、民主的な学校運営をアメリカ式に考えれば、学校給食ってのは必要だということになった。貧しい子もいるわけだから。そういう感じだったときに、アメリカ政府っていうか、進駐軍的な政府が、要するに給食やればいいっていうことになった。

山岡 ： 以前もあったわけだから、再開だね。

荒井 ： それで何したかっていったら、アメリカの小麦でエクスパイアしてるやつを、要するに、豚とかにやるようなものを、日本の子供にパンにしてあげようみたいなこと。脱脂粉乳も要するに、ミルクのカスだよね。そういうもの。それも、やっぱり家畜のエサなわけ。つまり、自分のところにいらないものを、日本政府に安い値段で買わせてた。破格の値段でね、タダじゃない。この2つで、日本の子供がパン食に目覚めるわけだよ。たとえば僕なんかは別に、小学校行く前までパンって食べたことないわけだよ。

山岡 ： そうなんだ。

荒井 ： 田舎だから、富山は。昭和40年とか、オリンピックぐらいのときは、パン食べる人ってのは、東京にはいたかもしれない、パンと牛乳、インスタントコーヒーとか、紅茶とか。そういう中で、このグローバリズムっていうのは、アメリカが結構うまく仕組んだと思う。田舎の子なんてマーガリンも知らないわけだよ。だけど、学校行くとマーガリンがついてた。マーガリンもほとんどエクスパイア的で、期限切れ的なもんだからさ。それでジャムとか、そういうの学校で習って、食べるとご飯よりおいしいかもしれない。

山岡 ： 甘いしね。

荒井 ： だからそれは、洗脳じゃないけど、味覚革命みたいなもんじゃないか。そして、家帰ってご飯とか食べてそれはおいしいんだけど、親と一緒にどっか行くと、パン買ってくれたよね。学校のパンよりおいしそうなの売ってたりするわけじゃん。コロッケ入ってるやつとか。もう圧倒的な速さでパン文化と牛乳（脱脂粉乳）の文化っていうのが広まっていく。脱脂粉乳ってすげえマズくて、大体3分の1の子供は嫌いで残してたけど、3分の2にぐらいの人は嫌々飲んでた。そういうことは、グローバリゼーションだよね。

山岡 ： ここで言うグローバリゼーションは、主に、食におけるグローバル化なのね。

荒井 ： うん。コカ・コーラ。やっぱり俺が小学校に入った時に、テレビで宣伝してて、それ見て「スカッと爽やかコカ・コーラ～♪」とか歌う、子供は（笑）、何か飲みたいなと思うじゃん。隣が商店だったから売ってたんだけど、ちょっと高いのコカ・コーラって。あの頃、たとえば、プラッシーとかそういうやつの1.5倍ぐらい。なおかつサイダーとか、ラムネかもそんなに毎日飲むものじゃない。その上に鎮座するのがコカ・コーラ。いつ飲むのかわかんないけど、でも毎日毎日テレビでやってるわけ。正月とか、それからの桜の時期になると「チンドン・コンクール」っていうのが富山にあって、全国のチンドン屋さんが集まってコンクールするんだけど、そういうときに、たとえば母親の実家の人たちが、電車で1時間ぐらいだけど、来てうちに一泊するわけだよ。そしたらさ、宴会が始まるわけだよ。俺は、おこづかいをもらえるわけ。そのお金を握りしめて隣の商店に行って、「コカ・コーラください」って言って買った。大人はみんなビールとかお酒飲んで嬉しそうで、その横で、俺はコカ・コーラをテーブルに置いて、コップに注ぐ。「こんなにこれがおいしいのか？」とかって、取られそうになったら 「いや、まだ飲んでない」とか言って（笑）。これがコカ・コーラなんだと思って、ながめながら、ゆっくり飲んでいた。

橋本 ： う〜ん。

荒井 ： そういうことで、だから結局、今やコカ・コーラは普通になっちゃったけど、そういうコカ・コーラが導入され始めの頃ってのは、子供がまず飲んでたんでね、若者とかもう飲んでたかもしんないけど。後で親父も飲むようになった。結局、俺たち子供が、そのグローバリゼーションの伝道者になっているわけ。パンにしてもそうだよ。俺の影響で、親父たちも結局、パン食になってくわけ。

山岡 ： なるほどね。

荒井 ： A ： それと、前に話したけど、俺が海外青年協力隊から日本に帰ってきた時、ザンジバルじゃ食えなかったカツ丼、牛丼、ラーメン、コンビニ弁当を食いまくった。そしたら1週間ぐらいするとときどき舌がかってにツイスト（ピリピリ）しだした。じきに収まるが、また始まる。気持ち悪くて病院に行こうか？と思った時、これって「チャイナ・レストラン・シンドローム」じゃないか、って気がついて、腑に落ちた。「チャイナ・レストラン・シンドローム」ってのは、80 年代にアメリカで流行った病気で、多くの患者の舌がビリビリして原因が不明だった。安くて大盛りのチャイナレストランがその頃各地に乱立して、貧乏人や、ビジネス街でもランチボックスの形で受け入れられ、かなり一般化していった頃だった。原因は大量のグルタミン酸ソーダ（味の素系）で、舌が拒絶反応を起こしたと解明されたんだ。それで、パフォーマンスでは、味の素もかぶり、そういったインスタント食品を販売しているグローバル企業の名前を連呼したわけ。

11-3.《Thank you Joseph Beuys》

山岡 ： ところで、ヨーゼフ・ボイスからは多大な、影響を受けたと聞いた。

2007 Dusseldorf, Kunst Akademie前にて

荒井 ： 1980年代にボイスが日本に来日した時に、見に行ったりとかしたよ。ヨーゼフ・ボイスっていう

のはビッグネームだし、それから日本で大々的な個展を西武美術館でやったり、芸大で講演会やったり。芸大の講演会は行かなかったけど。朝日新聞の講堂で講演会やった時は行ったし、握手もしてサインもらったよね。要するに彼のパフォーマンスはよくわかんなかったけど、自分にとっては相当影響があったと思うんだよね。

橋本 ： へ〜。

荒井 ： どういう風にして、ああいうパフォーマンスするのかっていうのを考えたけど、なかなかわからなくて。でも、ああいうことはしたいなぁと思っていたことはあるわけよ。だから自分のやってるパフォーマンスっていうのがアートなのかどうかを考えるために、ボイスの作品を考える必要があった。フェルトを積み上げたものとか、そこからエネルギーを発生するとか、ハチミツとかの循環とか、それがだからフェルトと蜂蜜とかそういういろいろ、ヨーゼフ・ボイスの作品の中ですごく重要だったバターの問題とか、やっぱり、色々あるわけ、で、蜜蝋の問題、マテリアルの選び方の中に、神秘性みたいのが紛れ込んでる風に思えたわけ、俺から見ると。それは、どうも理解しにくいと、思った、日本人の俺には。たとえばフェルトについて言えばそうだし、自分にとってフェルトってあんまり……確かに銅版画作るとき、フェルトが必要なんだけど、生活の中にはないわけじゃん。それからバターについてもそんなにね、マーガリンぐらいあるけど、でもそんなに生活に密接してるわけじゃないし、蜂蜜っていうのは、好きな人は飲んでるか、食べてるのかもしれないけど、蜂蜜というものも、非日常的な感じが自分にはある。

山岡 ： ふむ。

荒井 ： で、ところが、1987年だったかな？俺が、ニューヨークで三枝のアパートに半年居候した時に、1ヶ月間ヨーロッパ旅行したんだよ。お金ないからユースホステルみたいな所に泊まって、ドイツとかフランスとかいろんな所に、当然ドイツで、ユースホステルに泊まったら、フェルトの毛布だった。要するに毛布が日本みたいなふかふかしてなくてフェルト的なやつなの。わかんないけど、これがその、フェルトなんだと思った。日本での綿の布団が、こいつら（ドイツ人）の場合はフェルトなんだと。それと、食堂に行くとバターみたいなものと、それから蜂蜜とか置いてあって、こいつら（ドイツ人）にとって、こういうふうに日常のものなんだろうと。要するに俺らの醤油と塩みたいに。

山岡 ： うん。

荒井 ： ロンドンでは、テントシティーっていうところに泊まった。それは、夏だけ開催されてて、ラグビー練習場に、軍隊のテントがいっぱい張られてて、泊まれるようになってた。そこでも、フェルト（笑）。なんか硬いと思ったけど、この人たちにとっては、やっぱあれば温かいわけですよ。それで、その1ヶ月のヨーロッパ旅行で、そのバターだの、蜂蜜だのフェルトのことがよくわかった。

山岡 ： ふーむ。

荒井 ： それで、自分はずっと、フォルマリズムとかも含めて、西洋の美術を勉強してきて、そのコンテキストの流れの中で、ヨーゼフ・ボイスってすごいなぁとか思ってた。それはそれでいいわけでだけど、何かどっかで、俺は、極端に勘違いしてるんじゃないかなと思ったんだ、ボイスのことで。たとえばフェルト重ねて電池だとか言ってるのとか見て、布団重ねて電池でもいいわけだよね？　蜂蜜ではなくて、醤油はどうなのか？わさびはどうなのか？みたいな。ことになってくる、それぐらい蜂蜜とかバターってのは、醤醤油とかわさびみたいなもんじゃないかという、置換すると、それで意味が通じるかって、割と通じるんだよね。

山岡 ： うーむ。たぶん、そのボイスのは、動物の体からできてるものからエネルギーをもらうって話ではないですかね。

荒井 ： まあまあ、そりゃそうですね。それと、蜂蜜の場合はやっぱり共同作業という点。

山岡 ： バターも牛乳だし、フェルトも羊毛だけど、日本の日常生活の文化って植物からできてるものの方が多いのかもしれないね、動物性よりね。

荒井 ： そういうので自分の中での反省があった。ヨーゼフ・ボイスをあまりにも高く見積もりすぎたっていうか。

山岡 ： そうなのね。それで、作品《Thank you! Joseph Boyce》ができたんですね。2007年が最初なんですか？　で、そのパフォーマンスは、どのように進行するんですか？

荒井 ： まず、ボイスの作品の写真をコピーした紙を10数枚用意していて、それを壁に貼る。西洋人の女性がいたら、アシストを頼む。その紙に、バターと蜂蜜を塗ってもらう。印刷のインクがとけて、ドロドロとした図になってきます。それを、1枚ずつ、テーブルに載せた皿に置いてもらい、僕は、それにわさび醤油をつけて、口に入れ、「Thank you Joseph Beuys！」と叫ぶ。ぬるぬるになったボイスの写真の紙を皿に置いてもらっては、僕は口に入れ、叫び、もらっては口に入れ。叫びの繰り返し。どんどん口の中の紙が増えて苦しくなり、がまんできなくなったあたりで終わる。黒板を用意できた会場では、途中で、僕はそこででたらめな絵を描く。うさぎや蜂や、FIUのマークを描いたり。2007年に、実際にデュッセルドルフのクンストアカデミーの前でこのパフォーマンスをした時には、日本で買って持っていった、木製の車輪付きのうさぎの人形、カタカタ言うやつ、それの紐をひっぱって歩き回ったり、赤いガムテープで十字のマークを作って、そのエントランスに貼ったりもした。

山岡 ： それは、わたし、見たよ。私がドイツ側と企画して、日本人7人が参加したドイツツアー「Art of Begegnug 2」でのことだね。2007年の夏。ケルン、エッセン、デュッセルドルフ、ヒルデスハイム、ハノーファーをめぐったね。そのパフォーマンスは、ケルンの街角でもやった。

荒井 ： そう。それで、「Thank you Joseph Beuys！」と言いながら窒息するまで続けると。そして、「ありがとうボイス」という作品は、「さよならボイス」でもあります。

山岡 ： ふーむ。ところで、荒井さんって料理するんですか？

荒井 ： 昔はしたけど、今しない。

山岡 ： なんかやっぱし、食べるものとかに関心があるようだね。

荒井 ： 食べるのは関心あるでしょ～。だってだいたい俺が行く店は、おいしいところだから。やっぱりそうい、う何か口唇期欲求ですよ、正直（笑）。

山岡 ： 大人になってないのかもね（笑）。

11-4.「大東亜共栄軒」

富山にて 2006

山岡 ： 荒井さん企画のパフォーマンスアートの国際イベント「大東亜共栄軒」って言うのは何回したの？

荒井 ： 2006年と2008年の2回だけ。1回目が「大東亜共栄軒」で、次が「小東亜共栄軒」。

山岡 ： それはどういうコンセプトで、どういう経緯で始めたの？

荒井 ： それはね、親父が2002年に亡くなって、遺産がちょっと入った。それと、おふくろが1人で富山にいるっていう状況があった。自分はいつもアジアとか行ったり、中国行ったりとか、いつもタダで楽し

い思いしてるわけじゃん。言われてるわけですよ、タイや中国、アジアのアーティストたちに、「荒井はいつお前のフェスティバルやるんだ」って。で、遺産とか入ったんで、これはやっぱり何かやった方がいいかなと思った。それで、今まで世話になったアジアのアーティストを中心に招待した。彼らには、飛行機代とか出さなくちゃいけないと思ってた。俺は、アジアには自分の金で行くけど、アジアの奴が来るときは、すごい金かかるわけだから。ビザの問題とかもある。そういうのも含めて金出して、そういう体制作ろうと思った。基本的は、富山でやろうと思ったけど、東京じゃないと、あいつらも面白くねえだろうみたいなことも考えて、東京でもやるってことにした。東京での1回目は大塚のアウト・ラウンジというスペース、アーティストの田上真知子さんのところでやった。名古屋は、西島一洋さんのところ。彼は、ちょうどニパフをやめた後だったんで。ニパフですり減る時間を減らし、自分のパフォーマンスに集中したい時期だった。それで、西島さんに相談したら、「じゃあ、ぼくは何をすればいいの？」って言ってくれた。「泊まる所と、公演をする場所を確保してください。費用はぼくが払うから」「それは悪いから、こっちで何とかするよ。」って、彼は言ったけど、「いや、いいっすよ」って俺。「なるべく、安く済むようにするから」って西島さんが言ってくれた。それから「宣伝もするから」って言ってれた。泊まる所も安い所を押さえてくれて、チラシもいっぱい作ってくれて、客も50人以上、入場料で宿代はペイできた。たぶん東京よりも客は多かったと思う。

山岡 ： 西島さんの人柄だね。いい雰囲気だよね、名古屋は。

荒井 ： いやもう、人柄だよ、人柄。

山岡 ： うまく行ったわけね。

荒井 ： みんなハッピーというか、客も面白がってた。大塚の「アウト・ラウンジ」でやった時は、田上さんが、終わった後に、みんなに、彼女の手料理みたいのがふるまったりとかして、いい感じにやれたんだ。でも、芸大の大学院生かなんかだったやつがお客で来てて、打ち上げの時に、「大東亜共栄軒」ってこのタイトルは、いかがなものかみたいなこと言い出した。「政治的なタイトルだから、お客を選んじゃうでしょ」みたいな。こういう奴いるよなって思ったよ。それで、2 回目やることになった時に、「大東亜」っていうのは確かに言い過ぎだなと思って。「小東亜」にしたの。

山岡 ： ちまちました変更ね。「大東亜共栄軒」の軒ってとこが、来々軒みたいになってるのがよかった。

荒井 ： そうそう。そういうところが面白さだったわけで。「けん」がラーメン屋みたいになってるけど、それでもまだ「大東亜」だとストレート過ぎるのかなと思って。

山岡 ： そこで、小に替えるところが、変すぎる！！

荒井 ： それは政治的なものを避けるというよりも、「大東亜共栄圏」っていうのは政治的なニュアンスが

強いもので、じゃあ、ちっちゃい「あずま」にした方がいいかなと思ってさ。

11-5.「荒井真一のパフォーマンス 1999 年から 2009 年まで」

山岡 ： 2009 年の NY のブルックリンのグレースギャラリーでのイベント、「荒井真一のパフォーマンス 1999 年から 2009 年まで」 っていうのは、これはけっこう大きなイベントだったのかしら。

荒井 ： そう、5日間のイベントで。「やらないか？」って言われたから。ブルックリンのこのスペースっていうのは金土しか開けてなかったの。だから、その2日間はやってもいいって感じだったんだけど、俺が「できれば今までやったやつを全部やってみてえ」とかって言ったら、「じゃあ、やりましょう、5 日間」って。

橋本 ： そんなことやったんですね。

荒井 ： 1日 1 個ずつ。《Viva! Globalization》のシリーズが3つと、《Happy Japan !》と《Thank you Joseph Beuys》をしたんですね。

Grace Exhibition Space (NY) 2009

山岡 ：この「Globalization」のシリーズの一つ「田中美津」って言うのは？

荒井 ：フェミニスト。俺が尊敬している人。

山岡 ： 個人的に知ってる人？ 壁にピンクで彼女の名前を書いているね。

荒井 ： 知り合いではない。そこの貼ってある写真はね、マッカーサーと天皇が並んでる写真ね、裕仁（ひろひと）。その隣は、裕仁がアメリカでディズニーランド行った時の写真。

山岡 ： そんなのあるんだ。それと美津さんのフェミニズムはどう言う関係にあるの？

荒井 ： 簡単に言うと、これも1つの作品の流れです。ピンクっていうのがエッチなこと、ピンク映画。あと、ピンクっていうとパステルカラーで、ピンク映画のピンクじゃなくて、女の人が好きな色みたいな。

山岡 ： ピンクヘルメットとか。

荒井 ： そういうのでピンクを使うっていうことと、田中美津の本から引用したものを女の人に読んでもらった。俺は壁に貼ったキャンバス布にピンクの絵の具で「美津」って字を頭で書いて、ミッキーマウスのパジャマ着て、アメリカ帝国主義的にオモチャの銃持って、撃ったりとかした。男の願望として、ポルノ写真を舐めたり。「オリンピック」とかいろいろ他にも書いたんだ、頭で。それから、それらをずっと舐めて、それで口の中入れつつ、最後に「トヨタ、ソニー、オリンピック、コカ・コーラ」という字が壁に塗り込まれ、最後には「美津」の字は消えてしまうという。それでただのピンクになって、ピンクの中に天皇とマッカーサーの2人。天皇制とアメリカ帝国主義的なものと、その力によってピンク色になって平和的な感じなんだけど、実はどうなのかねって感じの作品。

山岡 ： だんだんわかってきた。イメージの組み合わせで、作品を作るやり方。

荒井 ： ピンクっていうのは両義的な色だと思う。オリンピックとかトヨタとかそういう日本の企業が、女の人に優しいとか言いながら、塗りつぶしてるけど、結局はポルノ写真を舐める俺みたいな、そういう男性的な欲望のサイクルの中でピンク色が成立している。それはピンク映画と一緒じゃねえかみたいな。

11-6. 《Happy ABE regime!》

山岡 ： では、《Happy ABE regime!》 のお話、お願いします。これは、第二次安倍政権以降だよね。そうすると2011年以降つまり、震災以降の作品ということになりますね。

荒井 ： そう。「ABE regime」とは、安倍的な体制という意味。いろいろとゴタゴタしたことが始まっていました。小泉政権も長かったけれど、安倍政権は本当に長かったし、問題がありすぎだった。小泉政権の時には、小泉の写真使った作品、あるんだよ。

橋本 ： 安倍氏のポスターを自民党本部で買ってきたんだよね。いくらするの？

深圳、中国　2014

荒井 ：　200円くらいかな。いくらでも売ってくれるよ。宣伝になるからじゃない？　20枚くらい、買ったけど、何も聞かれなかったね。それから、パフォーマンスでは、安倍氏の著作「美しい国へ」（文春新書）のページを破って口に入れた。そして逆立ちして、「Happy ABE regime!」と叫ぶわけ。もちろん、逆さまに意味。裸になって、ペイントで、布に日の丸を描くこともした。会場が野外など、日の丸を掲げられない場所では、それを省いたこともある。

山岡 ： ふむ。《Happy Japan !》と、流れはおよそ同じですね。

荒井 ： 口に中に入れるもので、避けるものっていうのがあって、文庫本と、グラビア、これらがやばい。というのは、文庫本の場合は紙が薄すぎて、のどちんこ、この喉の最後のところに、ここに貼りつくことがあって、間違っちゃって、張りついちゃったら、本当に窒息しそうで、マジ窒息。

山岡 ： 危ないんだね。

荒井 ： 本当にやばくなって全部口から出しても、最後のが残る。だからもうどうも出来なくてカーーっと言って、押したらなんか破れて、命拾いした。だからもうすごい怖いの、文庫本は。特に文庫本よりも、辞書的なやつ。薄いものほど、ぴちーっと、喉の奥のとこに張り付いちゃって、見てる人わかんないと思うんだけど、本人は本当必死だよね、本当にもうそれどころじゃなくなってさ（笑）。

山岡 ： 本人は好きでやってるわけだし、喉に張り付いてるのは見えないから、助けようがない。

荒井 ： そうそう。本当にマジで、もうやはり文庫はもう使わないって感じ。やばいからね、本当にコントロールできなくなっちゃう！

山岡 ： 小泉さんのグラビア写真集は？

荒井 ： 写真集は口が切れる。硬いから、口ん中入れてくと、口ん中グッサグサ切れちゃって、窒息はしないし、死にはしないんだけど、出すときに、よだれがもう血まみれになってて（笑）。あれも大変でした。小泉の時は。だからしょうがないよね、小泉のグラビア本。世界の日本のファーストレディーたとへとかっていうの。

山岡 ： そんなのあった？

荒井 ： あったんだよ。要するに、小泉の写真集に日本のファーストレディーたち、あなたたちが私のワイフですっての。

山岡 ： 気持ち悪い。それも、別に批判する意味ではなくて、《Happy Japan !》のように、小泉政権も、安倍政権も、荒井さんは、負けているの？

荒井 ： いくら投票に行っても、あいつらが政権取ってるわけだからさ、負けてるわけだよ。

12. Lee Wen (リー・ウェン)と 陳式森 (チェン・シーシェン)

山岡 ： 関わりの深いアーティストたちの話も聞きたい。Lee Wenと陳式森のこととか。

荒井 ： 彼らと会ったのは多分1999年頃。ニパフに出て、知り合ってる。陳式森は、やっぱり酒飲むんで、そういうことで多分、すぐに仲良くなれた。俺がニパフで 《Happy Japan !》的なものをやって、その前からちょっと顔見知りだったし、打ち上げの後、「今日うちに泊まれよ」と言われて、家に行った。

山岡 ： 陳式森(チェン・シーシェン)さんは家族と一緒に日本に住んでたんだよね、所沢でしょう？

荒井 ： そう。陳式森(チェン・シーシェン)は、基本的には広東省、香港の隣の広州で美術学校に行ってて、日本の美術大学に入るために来てた。日本語学校行ったりとか、いろいろ頑張っていたんだ。陳式森(チェン・シーシェン)は、頭の良い人なんだよ。2年ぐらい日本にいて日本語勉強したりとか、それから、美術大学に入ることとか、そういう画策してる間にもう、日本の美術教育とかって駄目なんじゃないかみたいに思ってたみたいなのね。こんなとこで勉強しても、あんまり意味ないんじゃないかみたいに思って、帰国しようと思ってた。その矢先、1989年天安門事件が起こった。それで、彼は日本にいる天安門事件に反対する中国人たちの仲間に入っちゃった。当然入るわけです、彼はそういう人だから。それで、帰れなくなっちゃった。帰ると、中国の空港ですぐ捕まっちゃう。

山岡 ： それで日本にいたのですね。結構、長くいたよね。

荒井 ： 日本の公安と中国の大使館って仲がいい、実は仲いいんですよ。悪者同士って結びつくんだよ。

山岡 ： !!

荒井 ： 日本と中国で対立してる感じがあるけど、悪者同士はちゃんと仲良くしてる。だからその情報の共有化が進んでて、それでだからそういう、中国民主化運動に関わってる人たちのリストってのは、公安も把握してるし、中国大使館も把握してると。それで帰れなくなっちゃって、ずっと日本にいた。

山岡 ： なるほど。

荒井 ： で、陳さんと、あるとき、ニパフの二次会の後、「行こう！行こう！今日は俺んちで、飲もう飲もう」って、話してたら、そこに来てたLee Wenが、それ聞いて、「僕も行きたい。荒井さんのうちに行きたい」みたいなこと言い出して、いいんじゃないの？って。でも、俺はまだLee Wenのこと全然知らなくて、パフォーマンスも見てないし。なんか変な外国人が「私も行っていいですか？」とか言ってる感じ。それであと何人かと一緒に俺んちに来た。それで、俺はね、途中で気づいた、いろいろ話してるとわかってくるじゃん。こいつがイエロー野郎か！と思って。

山岡 ： イエロー・マン』 ね。

荒井 ： うん。俺はあの問題についてすげー、腹立ってて。

山岡 ： あ、そう？

荒井 ： うん。あの問題っていうか、たとえば自分がパフォーマンスアートとかやってるわけじゃん。俺が、青年海外協力隊から、日本に帰ってきた頃かなあ、福岡市美術館でアジア美術展（1994）があって、Lee WenやJason Limが来たりとか、そういうのがあったわけ。パフォーマンスだけじゃないけどね。それで、Lee Wenの《イエロー・マン》のパフォーマンスとかが好意的に、今語り継がれてる問題としてあるんだけど、それを美術手帖の増刊号で特集みたいな感じでやったよね。日本で初めてくらいに、アジアの現代のアーティストを紹介する企画で、こういうパフォーマンスみたいなものが1冊になって、それを本屋で見たときに、「美術手帖、バカヤロウ！！」と思った。では、霜田氏とか俺とか、どうなってんだって。そんなアジアの奴らを紹介する前に、することあるだろうって。おかしいだろうと、そんな暇があるんだったら、この日本にいる有象無象の奴ら掘り起こせよ！みたいな。

山岡 ： それは私も思った。

荒井 ： 《イエロー・マン》いうのは確かに面白いけど、それよりもっと面白い奴は日本にいると思うし、

Jason Lim（ジェイソン・リム）のやってる無茶苦茶なものなのか写真見て、こんなもんより絶対日本にも面白い奴がいる。何でそれを掘り起こさないんだ？　それは、国際交流基金がらみみたいなことだからで、それは国策。

山岡　：　うん、確かに国策なんですよ。アジアのリサーチは国策で、20年間かけてずっとやってた。私が1992年に、最初にシンガポールに行ったのもその一つだから。

荒井　：　その国策っていうのは要するに、まあ、グローバリズムだよね。日本版グローバリズム。たとえばアメリカがやってた、抽象表現主義のアイデアを世界中にばら撒くというタイプのグローバリズムとは、違った形のプロジェクトとして、日本が、アジアのアーティストを支援する。

山岡　：　アジアの文化のイニシアティブをとるためですよ。それはもう88年か89年ぐらいから、今も。何年か前にあった「サンシャワー」展(2017年、森美術館＋新国立美術館)とか、「アジアがめざめたら」展(2018年、東京国立近代美術館)とかは、その集大成。

荒井　：　うん、今でもそんな感じだからね。いや、でも、そういう日本にも変な奴いっぱいいるわけだからね。だからその時に、何かスッゲー馬鹿みたいだと思って、すげー頭にきて、でこういうの絶対ぶっ殺すとか思ってたわけ（笑）。そしたら、実際、家にいたりとかしたわけ、ぶっ殺そうと思った奴が（笑）。

山岡　：　Lee Wen　のせいじゃないけどね。

荒井　：　そうだよ、そりゃそうなんだけどでも。最初からわかってたら、絶対お前、来るなとか言ったと思うんだよ、来なくていいって。気分悪かったからさ。

山岡　：　そんなに怒ってたんだ。

荒井　：　そりゃ、そうだよ。その雑誌を見た時に、何でこうなんだと。で、その夜、Lee Wenが、自分はイエローマンとかやってるとか言ったんで、こいつが、あいつか！なんで俺はこいつと一緒に飲んでたのかって、思った。だからって、お前帰れって、もう言えねじゃん。もう来ちゃってるし（笑）。それを知るまでは、いいやつだった。俺の作品を見て、「荒井さんは日本の社会どう思う？」とかっていろいろ聞いてきて、英語で。いや俺はねと、話すわけだよ。で、Lee Wenも、いや、今までこんなはっきりと自分の意見を持って、日本の社会について話すアーティストは初めてです、とか言うもんだから、帰れって言えなくなっちゃって（笑）。結局、Lee Wenとも仲良くなった。それから、陳式森が帰国することになって(2002年)帰国する時に、霜田氏が、「じゃあ、バイバイ陳式森の企画しよう」って言ったらしいんだよ。

山岡　：　あったね、そういうの。

荒井 ： そしたら、参加者はニパフ関係でまとめてて、俺とか全然入らない企画だったの。で、陳式森は、ありがとうございますって言いつつ、別の系統の人に話したら、イトーターリさんとか俺とかが出る、髙橋芙美子とかが出るような企画になって、それで陳式森は結局、霜田氏の案を蹴ったの。

山岡 ： 陳さんは、香港帰ってからも、スペースを経営したり、仲間も作って活発だね。今は、香港返還のこともあって揺れてるけれど、でも、負けてないって感じ。Lee Wenは、残念なことに、2018年にシンガポールで亡くなった。パーキンソン病にかかっていて、10年くらいは闘病しながらも、活動していた。

13. チェンマイでのワークショップ

橋本 ： ところで、若い人に期待する、ことはありますか？

荒井 ： ええとですね、霜田氏が中国で今一定の力を持ってる、霜田氏が肩入れした馬六明（マー・リューミン）とか、今もう完璧にパフォーマンスをリタイヤしてるんだけど、霜田氏が発掘した人たちがいるわけ。霜田さんもなんだかんだ言いながら、北京のオープンアートフェスティバルに、その後3回目には出てる。その流れで、霜田さんが西安でパフォーマンスをやった時に、そのあたりは美術大学が強いところで、現地の40歳代ぐらいの美大の教授たちにすごく受けたわけ。その頃、霜田氏はワークショップっていうのがパフォーマンスアートにとってこれから必要になる、ということを言って、霜田氏は実践的にワークショップやり始めたわけ、中国のオープンアートや、大学でね。でも、俺は、パフォーマンスアートを広げるっていう考え方ないわけ、パンクだから。自分がやって面白くてそれでいいみたいな。霜田氏は、たとえば中国でありベトナム、カンボジア、インドとかでの、そういうところでのパフォーマンスアートの、その伝道者であろうとしていた。そういう時期が、あったわけ。今もそうだと思うんだけど。そういう流れの中で、西安でその件で、俺は、霜田氏とけんかになった。

山岡 ： うん…。

荒井 ： 「僕はワークショップとか必要ないと思う」と、言った。「パフォーマンスアートなんて滅びればいいんだ、滅びるんだったらもう滅べばいいし、それを、啓蒙する必要がない」って。でも、霜田氏は「いや、このままでパフォーマンスアートがなくなってしまうから、いろんな人に伝えるべきだ」と。そこで、霜田氏の新しい機軸が見えてきて、ニパフもそうなっていく。霜田氏の考え方っていうか、アイディアっていうのは要するにニパフにしても、日本の若い男の子女の子にちゃんとしたパフォーマンスを見せて、そこまで野望はないかもしんないけど、行く行くは教授になるとかではないかな。なれてないけど今。

山岡 ： 教授になりたいとは思わないかも、霜田氏は。

荒井 ： 俺の中ではパフォーマンスアートというのはサバイバルアートであって、教えられたりとか啓蒙するとかっていう問題じゃなくて、必要な人が、たとえば、小説書きたい人、漫画描きたい人、歌を歌いたい人が自発的にしょうがなくやっていくものだとすればね、啓蒙する必要もないし、なくなっていくから何とかしなくちゃいけないっていう問題でもないなっていうのが、俺の考え方ね。でも、俺は最近は、ワークショップは、やってもいいなと思ってる。だけど、それは、なんていうのかな、自分の流儀みたいなものを、見せるんでいいと思う。霜田氏もそういうやり方なんだけど、実は。どっちかってあの人のワークショップっていうのは要するに、ガムテープだとかゴミ袋だとか。

山岡 ： 自分が使ってるものだね。

荒井 ： そういう身近なものとの対話みたいなところを始めるみたいな。やっぱり流儀はあるんだよね。俺だったら、訳のわからないものっていうのを、出してくると思う。それでいいんじゃないかなぁみたいな。むしろそういう表現の方が力強いと思うんだよね。たとえば日本にもこの頃、大学に小説家コースってあるんだよ、少しずつ。だけど、今のところ、そこから、ちゃんとした小説家が出てきてる痕跡はないわけ。アカデミックな場所から出てこないんじゃない？ ニパフというのは、アカデミックな場所じゃないわけだけど、そっから出てきてる人いるかもしれないけど、相当少ないよ、面白い人出てきてる可能性っていうのは。むしろニパフをやめた人、1回か2回参加して、やめた人たちの方が、面白いものが出てきてるという気がする。パフォーマンスってのは、こういうもんなんだというような、霜田氏の意図は成立しないと思うわけ。とにかくパフォーマンスアートが滅びるとか、これから何を望むかとか全くないですよね、俺は。

橋本 ： 荒井さん、ワークショップやってもいいかなって思ってるんですか。最近は？

荒井 ： 俺がワークショップやらない、やりたくないっていうのを、みんな知ってるからあんまり言って来ない。あと僕が酔っぱらいっていうこともある。シンポジウムとかも声掛からないよね。でも、5、6年前かな、タイでどうしてもワークショップをしなくてはならなかったことがあった。

橋本 ： その話、知りたいです。

荒井 ： 2015年のアジアトピアの時。バンコクとチェンマイでイベントはあって、そのワークショップはチェンマイ。チェンマイのオーガナイザーが、チェンマイ大学で教えているから、そういう機会があったんだと思う。その時は、なぜ俺にワークショップ頼むのか？と思ったけど、俺も半分嬉しかったね。自分の作品見せるだけじゃなくてなんかこう、違う側面で何かやれよみたいな、それで行ったわけですよ。少年院だったの、場所。彼ら、なんか目つき悪かった。ワークショプは、自己紹介の方法。口にピンポン玉入れて自己紹介するのと、逆立ちして自己紹介するのと、それから、頭にバケツ水入ったバケツをせて自己紹介するの三つのうちから1つ選んでやってくださいっていう。

橋本 ： へ〜。

荒井 ： 口にピンポン玉を入れる人もいたし、そしたらモゴモゴ〜って、タイ語で言ってるからそもそも、わからないんだけど（笑）でも、その見ている仲間の奴らはわかるわけじゃん、みんな笑っちゃって。逆立ちできない人もいるんですよ、日本みたいに体育でちゃんと逆立ち習わないみたい。でもできる人は自分でできると思ってるからちゃんとやるわけね。そして自己紹介してるうちに、だんだん手の力が抜けていってさ（笑）よろよろ〜。う〜〜んとかって言ってバタンと倒れたりとかすると、また笑っちゃって、みんな。頭にバケツ乗せる人はなんか、水がどんどん、どんどん減ってくわけね。自己紹介しながら、なんか言ってることがだんだん訳わかんなくなっちゃう、でも頑張って、僕はこういう人間ですみたいなこと言ってるけど、なんかもう疲れ果てて、ボーンとか落としたりとか（笑）そういうのでみんな笑って。俺の今までやってたメソッドが全部入ってるわけだけど。

橋本 ： フィードバックとしてやってもいいかなって思えたわけですよね。。

荒井 ： そういうんだったら、結構面白いなぁと思った。パフォーマンスのワークショップっていうよりもなんかみんなで笑ったりとか、そのコントロールできない身体みたいなものを見て、なんかこう、自分の身体ってのはこんな感じなのかなみたいなことに気がつく、みたいな。

14. ザンジバルの師匠

橋本 ： 荒井さんの歴史を聞いていると、いろいろな出会いに対して、いつも受動的な所がありますよね。それを、けっこう、意外に思う人もいると思いますが、僕は結構荒井さんの事知ってるから、意外ではないです。それと、いろんなメディアというかジャンルをどんどん横断してるところがありますよね。その中で何か共通してる、通底するっていうか、核となる部分というか、大事にしてるものというのはありますか？

荒井 ： ないんじゃない。何かけっこう、そういう感じじゃないかな。何か本当に馬鹿みたいな感じで、なんで、アフリカ行ったのかなぁとかさ思うし、それもチンケな問題じゃん。大学院に入っちゃったから、行っちゃったとかさ（笑）。青年海外協力隊として、タンザニア行ったのも、そんな感じ。

橋本 ： ええ。

荒井 ： でもね、アフリカにしても、要するにそこの場所に行かなきゃわかんないことってのが 大きかったっていうか。たとえば美学校に入って、それでなんかものすごい馬鹿な奴っていうか、面白主義みたいなやつらと会って、俺の吉本主義みたいな頑固なものが崩れていく。そういう経験とかあったけど、もう田舎者だから、最初っからさ、核がないんだよね。自分を偉く見せようと思って、いろいろ核作って、核っていうかそういうものを作ってったけど、どっかで常に壊されて、アフリカに行ってまた壊された。

橋本 ： うん。

荒井 ： アフリカのこいつらにとって現代美術ってなに？俺は現代美術的なことを教えてたわけだよね。コラージュとか教えたりとかしようとしたけど、なんかもうコラージュもできない。コラージュする事よりも、その写真自体がもう大切であるみたいな。そういうのを目の当たりにしたり、一方で俺はその現地の文化に惹かれてしまった。

山岡 ： そういえば、大切な出会いがありましたね、タンザニアでは。さっきの話では出てなかったけど。

荒井 ： そうなんだ。「ズマリ」という楽器とその師匠との出会い。あるレストランで聴いた。それは何かサックスみたいで、吹きたいなぁと思ったから、買いたいなと思って、文化省（ザンジバルの）の上司の人に聞いたら、「あのね、荒井くんね、買えるものじゃないから。」って。尺八みたいに、どっかで買えるのかなと思ってた。

山岡 ： なるほどね。うん。深いね。

荒井 ： 「買えるものじゃないってどういうことなんすか？」って聞いたら、「あれはねシャーマン的なもんだから、弟子入りしないと無理」（笑）っていう話、それで弟子入りってどうすんだよ！とか思ったけど、結局、「僕弟子入りします」って言ったらさ、ちょうどシャーマンとしては、この時代、もう仕事なくなっていて、ザンジバル島の国立歌劇団みたいなのがあって、そこに1人いるのがわかった。で、その人、ムゼー・コンボという人を紹介してもらった。「ムゼー」は、スワヒリ語で長老という意味。つまり、コンボ爺さんという呼び名。年は当時50歳くらいだったかな。結局、彼以外のシャーマンも今、失業してるわけだよね、あんまり仕事ないわけ、病気治すっていう仕事が。だから、レストランで吹いたりとかしているわけ。

山岡 ： なるほどね。

荒井 ： 「弟子入りっ、てどれぐらい払えばいいんですか？」って言ったら、「あいつの給料が大体月3000円だから、1回500円ぐらいでいいんじゃない？」みたいな、4回やれば2000円だから、ほぼ月給と同じになるわけで。

橋本 ： うんうん。

荒井 ： そしたらなんかものすごく、向こうも喜んじゃってね。「お前は今日から俺の弟子だ！」みたいな感じになった。そして、「明日の1回目は俺のバナナ畑に来い」と言うから、それはどこですか？って聞いたら、「あのへんだから～」って。わかりました、行きますって、言ったんだけど、バナナ畑って言っても全然、どういうふうに生えてるのか、よくわからない（笑）。

山岡 ： いわゆる畑のイメージではないのね。

荒井 ： 自生のバナナと変わらなくなっちゃってて。実際に見て、ここが師匠のバナナ畑なんだと思った。「この畑すごいだろ～、お前大変なんだぞ」って師匠。そして、そこで練習始めた。なんか、1ヶ月ぐらい、週1回行くごとに500円払って、でやってるうちに、いやあ、「月2000円だよね～、来月分を一括で先にくれ。」とかいう話になって、「そういう方式ですか？」「それも悪くないだろう」 で、2000円渡したわけよ。そして、「師匠いつなったら、僕のズマリくれるんですか？」「お前はね、まだ自分のズマリを持つレベルじゃない。まだまだ先だ！」みたいな話になってさ。そしで、1ヶ月半ぐらい経ったときに、「再来月分の払え！」みたいな話になった（笑）。「何でですか？まだ6回分あるんですけど」「お前はね、何でそういうことでビビるんだ！」みたいな事言われて。「わかりました」って、払った。それで、なんかどんどん、4ヶ月先ぐらいまで払っちゃってさ。

橋本 ： すごいなあ。

荒井 ： いや、面白いんだ。1ヶ月目ぐらいの時に、師匠も酒好きだってのわかったから、ビールの国営工場みたいなのところに連れて行った。ザンジバルはイスラム教だから、普通の人は酒飲まないんだけど、一応国営工場があるわけ。そこで飲むと安いのよ、ホテルとかより。師匠は「ここは俺初めてだ。」とか言うけど、自分家の近くなんだよ。「このビールいくらだ？」 「100円ぐらい」って言ったらさ 「たっかい！！こんな高いものどうすんだ！」と、いや僕が払うから大丈夫でしょうと言ったら、「たっかい！」とか言いながらも、すぐ飲んじゃう。でさあ、ビール持ってくるおばさんとかいるじゃん。そのおばさんが、「ムゼー・コンボ何でここに来たの？」って聞くと、「この弟子がおごってくれるって言うから来たよ～」って。働いてる人みんな知り合いなんだ（笑）けど、自分は来たことがない（笑）。それで、そのうち、「ビールとかもうしゃらくさいから、なんかもうちょっと強いのはないのか？」って、言い出す。知ってるんだよ、なんとジンもウォッカもあるわけ、国営工場には。「ジンはいくら？」「100円です」「たっけーー！」とか言いながらグイって飲む（笑）。

山岡 ： それ全部、スワヒリ語で話してる？それぐらいわかるんだ。

荒井 ： 簡単なのだったら。それでなんか、散々飲んで、俺のコップに、ビール残ってるとさぁ、勝手に飲んだりとかするの、師匠。「お前は飲まないのか？」とか言って。「いや、まだ飲んでる」とか言っても、「飲まないんだったら、注文しろ！」とか言いながらグイッて飲んでる（笑）。こいつヤベエと、思った。俺にとっては、本当に1100円、200円の世界だから、全部払っても1000円ぐらいなわけですよ、2人分で。帰りはご機嫌になって、「よし！次回は、俺の知ってる安い飲み屋に一緒に行こう！」とか言ってさ、次のレッスンの後行こうという話になって、行ったんだよ。ちなみに、ザンジバルの家というのは、塀がないのよ。小汚い家がいっぱい建ってるんだけど塀がないのね。

山岡 ： はい。

荒井 ： だから、鶏とか、あっち行ったりこっち来たりしてるし、塀がないから、子供なんか、どこんちの子供かわかんねえんだよ。ムゼー・コンボの家に行ったんだけど、なんか10人ぐらい子供がいてさ、鶏が行ったり来たりするし、「俺の息子と娘はこれとこれと〜」と言って、3人ぐらいなわけ。「他の子は何なんですか？」「近所の子供だよ〜」とかって感じで。「夜になったら、あいつら自分ち帰るから」って。子供も鶏も自分ち帰って寝る。そんなことが、俺は面白くて。で、レッスンの帰りに行ったバーは周りに塀がある。塀っていってもバナナの葉で作ってる塀なんだけど、とにかく塀があってさ。でも、明らかに、周りと違う雰囲気。バーって言うから、まあこういうもんだろなって思ったんだけど。家そのものは、普通の家じゃんと思ったけど、囲まれてるのがすごくて。「入る。ここ、安い。すごい安い。今日の、お前の、おごり」とか言って。

山岡 ： （笑）

荒井 ： 入ったら、赤いコップ、緑のコップのダメ系のプラスチックのコップが2つ出てきた。「お前には、これは強いからコーラで割った方がいいよな」って言うから、「はい」とか言ったら、コーラがきて。まず、コップに透明なお酒入れて「ちょっとお前飲んでみ」とか言ったら、やっぱり強いわけよ。「な、お前、コーラだろ」ってコーラで割って。ゆっくり飲んでたら、師匠は来た瞬間一気飲み。そんなたくさん入ってない、50ccくらい一気飲み。「これ、お前、おごりなんだよな」って言いながら、またすぐ次のが来て、一気飲み。一気飲み3回続いて、俺は、ゆっくりぬるいコーラ割りを飲んでる。師匠は話とかもせずに、とにかく来たらすぐ飲んでの連続。周りにいる奴らもヤバ系なんだよ。俺が普段会ってる生徒たちと違って、完璧にダウンしてる感じ。ハッパなのか、酒で来てんのかわかんないけども。なんかもうヤバ系なの、中にいる人が、昼間なのに。無気力な感じになってて。ところが、そいつらには、コップがないわけ。俺とムゼー・コンボにだけ、コップがある。俺が飲んでなかったら、「これ、コーラ臭えな」とか言いながらまた、ガッて飲んじゃうわけよ、俺のを。「もう1杯いくか」「はい」とか言ったら、また来るわけ。自分の来たら、自分のバッと飲んで、俺はゆっくり飲もうと思っても、途中でまた取られて飲まれて。そういう応酬があって。結局、1000円くらい。でも完璧ぼろぼろ。俺も、ゆっくり飲んでるけど、けっこう酔っ払っちゃって。

山岡 ： 飲まれちゃうから、慌てて飲んじゃうんじゃない？

荒井 ： そうそうそう。生ぬるいコーラで、暑いし。国営工場だと、氷くれって言えば氷入れてくれるんだけど、そこにはない。とにかく暑くて。1時間くらいしかいなかったけど、俺もボーとしてきてさ。師匠が「もう、帰ろう」とか言ってさ、ようやく、帰った。次の日に学校で「ムゼー・コンボにこういうところに、連れて行かれた」って言ったら、学生に「目潰れますよ」って。ようするに、密造酒で、ちゃんとした工法じゃなくて、化学的な物を入れてる可能性がある。もう一つは、そこに外国人がいるってことが基本的に危ないっていう。なぜ、ムゼー・コンボがすぐ飲んでたかっていったら、警察に来られたときにコップがあって、そこに酒が入ってると、証拠になるわけ。

山岡 ： なぜ、バナナの葉の塀があるんだろう？

荒井 ： 隠しているわけよ、見えないように。そこは、相当安いことは、安いのよ。キオスクで買う酒より、全然安い。俺の場合はコーラあるから、カモフラージュできるとムゼー・コンボは思ってたみたいだが、学生に言わせると「もう 1 回行ったら、絶対荒井さん捕まって、国外退去になるか、国外退去って言われて、お金巻き上げられる。目潰れるか、賄賂要求されるかだから、絶対行っちゃいけねえ」と。

山岡 ： 危なかった。

荒井 ： ムゼー・コンボは、そういう変なやつで、けっこう俺は好きな人。でも、あまりにも前借りが多すぎたから、俺は１回キレちゃったんだよ。「もう、やめよう、こういうことは。今までの分は、なくす。来月からは1ヶ月毎にする。今までの5ヶ月分についてはなかったことにする。来月からは普通に1ヶ月ずつにしようって」そしたら、すっげー怒っちゃって向こうが。

山岡 ： バカにされたと思ったのかな。

荒井 ：「お前はズマリをなんだと思ってるんだ。俺は子供の時に師匠に弟子入りした。その時、牛一頭と師匠の家に行った。その後住み込みだった。お前、住み込んでるか。牛持ってきたか。それぐらい大事なことを俺は教えてんだ。お前はうちに住み込んで、ちゃんとほうきで俺んちきれいにしてるか。それに比べればなんだ」と、逆切れされてさ。「じゃあ、どうすりゃいいの？」って言ったら、「お前はな、そういう考え方改めろ」って言われて、逆に怒られてさ。

橋本 ： 怒られてどう思ったんですか？

荒井 ： 言われてみりゃさ、俺も半分シャーマンだと思い始めてたから、確かにそれぐらいのことかもしれないと思った。俺はもうすぐ日本に帰るし。「お前、日本に帰ったら、いいズマリ吹きになれるんだ。俺の弟子だぞ」とか言われた。それで1年くらい習った時に、「よし、お前のズマリを作ることになった」とかって言って作ってくれた。2か月後にできてきたんだよ。俺に吹かしてくれて。「いいズマリだ」とかって自分も吹いて。「これはいいズマリだ。よかったな」と。1万円以上金払ったんだけど、うちに持って帰って、うちで練習しようと思うじゃん。「お前はまだ保管の仕方がわかんないから、だめだ」とか言ってさ、くれねえの（笑）。でも最後には、くれたよ。

山岡 ： よかったね。

荒井 ： 俺は、バイク持ってた。ザンジバルには、時たま、夜通し踊りつくす儀式というのが、あった。遠いとこなんだよ、バスで行くと 時間くらいかかって。「荒井、お前弟子だから、明日俺を運ぶんだ」とか言って、一緒に行ったの。ずーっとバイクで30分以上乗ってて。急に浜について、「荒井、ここから浜沿い

に行った方が近道だ」「浜だとバイク運転できねっすよ」「できる」とか言うから、1 キロぐらい走ったら、さすがにやっぱり進まなくなって。「師匠、やっぱり、だめですよ。どうします？」「これはもう行くしかない」「動かないっすよ」「押す」とか言って（笑）。押してさ、だらだら行ったりした（笑）。別の時は、師匠が、5階建てのザンジバルで一番高級な国営ホテルのレストランで演奏することがあって、乗せてったの。出番の前に屋上に上って、二人で、ゆっくりしてたわけよ。俺とか煙草吸ってたし。そしたらさ、「ここは高い所だなあ。すごいな。ザンジバル全部見えるな。」とか言ってさ。俺は「東京には60階建てのビルがあります」って言った。でも、師匠は、そんなの見たことないわけじゃん。「60階ってここが5階だから…」って自分で、指で測り始めたんだよ、空見ながら。10階、15階、20階とか言って。それ見て、かわいいなこいつ、って思った。最高、面白かったよね。だから、ザンジバルでは、ぼくは木版画を教えてたんだけど、ズマリを教えてくれる人もいて、すごい楽しくて、そして、俺の何かが、そこでも、壊されたんだ。

山岡 ： いつの間にか、面白いものが、変わっていったんだね。荒井さんの成長のプロセスで。

荒井 ： そう、そう、そうなの。富山にいる時は、頭でっかちだったんだけど、神保町のラーメン屋で友だちにコケにされたりとかしながら、それが崩れていったんだよ。

橋本 ： ストーリーとして、これでまとまりましたね！